1223-19

308
246

家庭裁縫獨學

始

宮內省圖書寮

家庭裁縫獨學

昭和三年 宮內省圖書寮

特277
311

はしがき

昔からの例へにも衣食住と云ふて、吾々には着ることが一番の上位に置かれて居ります。申すまでもなく一家の生活に、一年三百六十五日の間、寢ても起きても肌より離すことの出來ぬものは衣服であります。そして此の衣服を掌るものは婦人であります。

そこで婦人は此の衣服を掌どると共に之れが裁縫の道を心得ねばなりません、他の事は知らなくとも知らぬなりに通されることもありますが此の裁縫の道だけは何うしても心得て居ぬ時は一身に不自由、一家の不經濟であるばかりでなく生涯の苦痛となるものであります。

一家の主婦となりて良人の衣服を手入れすることも出來ず我子の着物をも縫ふことが出來ずに一々人手に賴むにも、要所々も知らぬやうでは敎育ある婦人と云ふことが出來ませんでせう。恥かしい事ではありませんか。故に今の御家庭では能くこれ等の事を自覺して學問の修業と共に縫裁の道に勵むやうに爲し、それから種々なる諸藝に入るやうにして居られますが誠によいことであります。

本書は此の裁縫の道を學ぶ方の參考となり又はお友達ともなるが爲めに一通りの筋道を述べたもの

で且つ裁ち縫ひの仕方は一つの技術で其人の腕と心の働きによりて仕立上りが上手となると下手に出來るとの二つになるのですから此の修業も又肝要であります。

昭和二年丁卯の春日

東京の郊外

著者識す

家庭裁縫獨學……目次

◎婦人と裁縫……一
◎衣服各部の名稱……二
◎裁縫用具に就て……六
◎運針……九
◎糸の結び方、留め方、繼ぎ方、……一〇
◎縫ひ方……一二
◎紉け方……一八
◎躾の掛け方……二一
◎衣服の裁縫……二三
◎小裁と中裁襦袢……二二
◎本裁男繻袢……二九
◎本裁女襦袢……三一
◎一つ身單衣……三二

◎一つ身袷……三九
◎一つ身綿入……四六
◎一つ身袖無綿入羽織……五〇
◎三つ身單衣……五六
◎三つ身袷……六〇
◎三つ身綿入……六六
◎四つ身單衣……六九
◎四つ身袷……七五
◎四つ身綿入……八一
◎四つ身綿入羽織……八二
◎本裁女單衣……九一
◎本裁男單衣……九八
◎中裁袷……一〇七
◎本裁女袷……一一四
◎本裁男袷……一二二

◎本裁女綿入……一二九
◎本裁男綿入……一三五
◎絹布本裁女袷……一三九
◎絹布本裁男袷……一四〇
◎本裁女綿入羽織……一四一
◎本裁男綿入羽織……一四七
◎本裁男袷羽織……一五〇
◎絹布本裁男袷羽織……一五四
◎絹布本裁女袷羽織……一五五
◎本裁男單衣羽織……一五六
◎本裁女單衣羽織……一六三
◎本裁女小袖一重……一六三
◎本裁男小袖一重……一六五
◎本裁單重……一六六
◎本裁長襦袢……一七二

◎本裁被布合羽……一八〇
◎比翼……一八六
◎腹合せ帶……二〇一
◎丸帶……二〇四
◎男帶……二〇七
◎女袴……二一一
◎綿布男袴……二二七
◎小裁綿布男袴……二四八
◎中裁綿布男袴……二五〇
◎絹布本裁男袴……二五四
◎夜着……二五三
◎蒲團……二六一
◎手提袋……二六三
◎アンテランパックの作り方……二六三
◎寢冷知らずの作り方……二七一

◎手輕な小供服……二七七
◎西洋涎掛……二八三
◎西洋前掛……二八五
◎女兒服の下着……二九〇
◎小供シャツ……二九六
◎紙入の作り方……三〇二
◎揚子入れの作り方……三〇四
◎卷煙草入れの作り方……三〇五
◎墓口の作り方……三〇八
◎ときわ袋の作り方……三一〇
◎括り猿の作り方……三一二
◎扇形の兩面涎掛……三一三
◎玩具の犬の作り方……三一四
◎ちとせ袋の作り方……三一六
◎衣類の洗濯……三一一

◎汚點拔き法……三二

——目次終——

家庭裁縫獨學

○婦人と裁縫

裁縫は女子手藝の中の最も大切なもので、婦人の生命と云つてもよろしい程、貴重なものである事は普く、御存じのことゝ思はれます。文化の今日、種々なる事が舶來して或る一面には此裁縫の道などを一向に省みぬ方があります。

賃金さへ拂へば、誰れにでも賴めるから窮屈な技藝などは、何うでもよいとお思召からでもありませうが、貴族紳士の上流社會には夫れでも宜しいとして、中流以下ではそんな事では困る場合があります。其お若い時代に何うでもよいと無視された裁縫の道が、一家の主婦となり、家庭の母となつた時に、今更必要であると云ふことを、つく〴〵感じられるものであります。

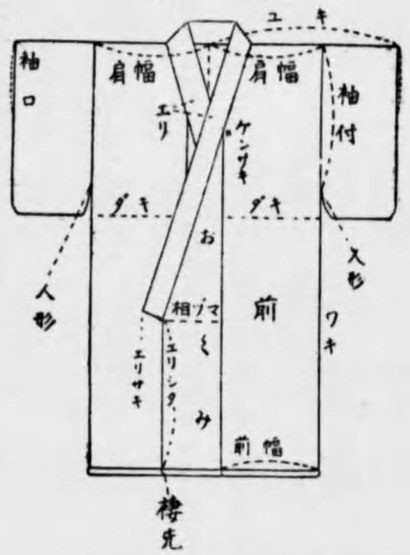
ですから其の人々の趣味によりて何を御研究になつても御任意ですが、斯の裁縫の道だけは誰方でも御心得置かるゝやうおすゝめするのであります。

そこで先づ裁縫の順序として、衣類に就ての名稱より順を追ふて、お解り易いやうに述べて置きます

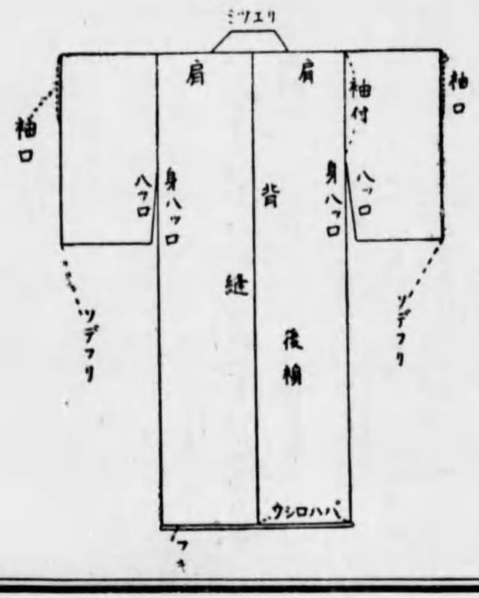
◉衣服各部の名稱

總て裁縫を致しますには、第一衣服の各部の名稱を知らなければなりません。そこで今左にその圖解をいたします。

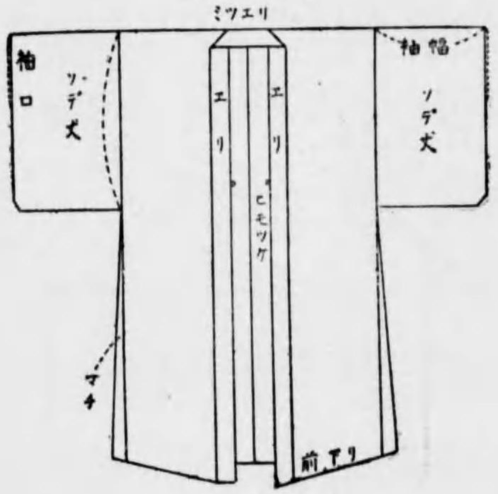
圖物（イ）男



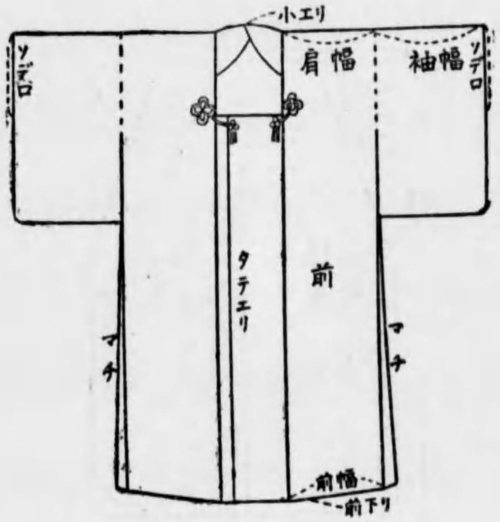
圖物（ロ）女



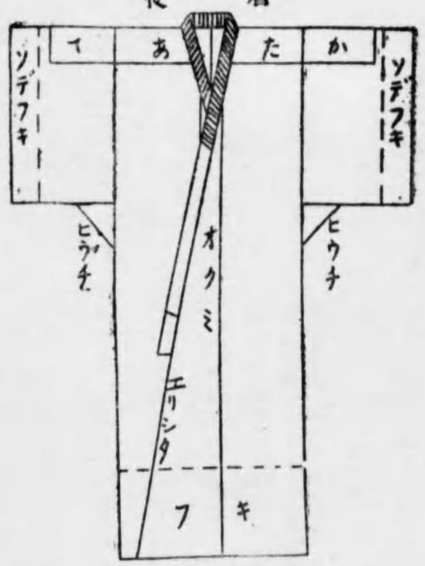
圖織羽（ハ）



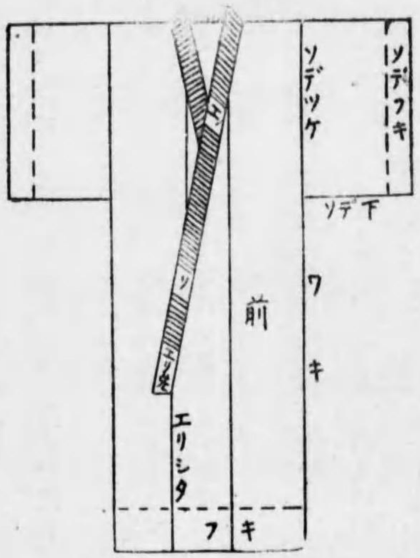
圖布被（ハ）



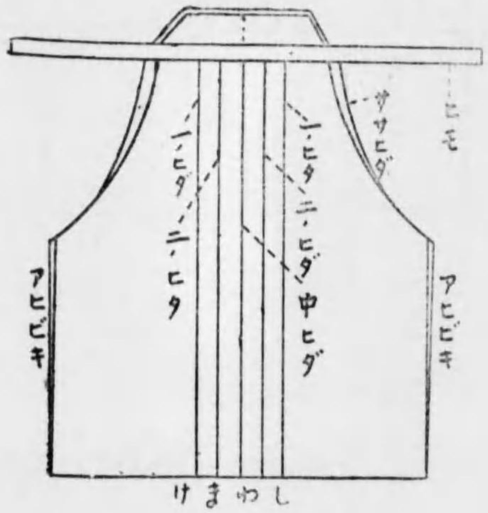
（ヘ）夜着圖



（ト）捲袷圖



（ニ）袴前圖



（ホ）同後圖

◉裁縫用具に就て

裁縫に必要な器具は、裁板、針箱、尺度、筦、熨、火熨斗、並に臺、裁庖丁、鋏、糸卷、袖形、指輪針、絎臺、刷毛、霧吹、糊筦、糊板、チョーク、アイアン(アイロン)、ミシンなどであります。

(イ)裁板は、樹脂の出ないものがよく、長さは二尺五寸位から四五尺位、幅一尺から一尺二三寸、厚さ一寸から二三寸位、のがよろしう御座います。

(ロ)針箱は、五六寸のものがよく、針刺の中に入れます毛や綿は、十分に消毒して用ふるのであります

(ハ)尺度は、普通鯨尺を用ひます。之れは裁縫には大切な物であります。そして之れを求めます時は、形正しく歪んだり、狂ひのあるのは避けなければなりまん。

(ニ)筦は、歯が薄くて鋭いものは、布に筦傷が出來ますから、よく注意して求めなければいけません。

(ホ)鏝(笹鏝)は、折り目、接ぎ目、はぎ目、小皺などにかけるものでありますが、三寸内外のものがよろしう御座います。毛織物や洗濯物の仕上などに使ひます時は、西洋鏝がありますからそれをかけますとよろしいのです。鏝は、使ひます時、よく注意しませんと、鏝をいためたり又火傷する事などあります。

(ヘ)鏝板は、薄い板の上に、綿を載せ、白布か紙を覆つたものであります。使ひます時は、此の上に材

料をのせてかけるのであります。

(ト)火熨斗は、口の廣いのが持ちはよろしう御座います。金の薄いものは、いけませんから、稍厚くて臺の附いたものがよろしいのです。火を入れます時はなるべく火を竪に入れ、そして、紙か、小布などで、熱さを試してから使ひます。又材料の地質によりて、薄い布を一枚おいて其の上からかけるのであります。

(ヌ)火熨斗臺は、火熨斗に附いてゐるものと又ないものとありますが、必ず附けて用ひます。

(リ)裁庖丁は、大形と中形と小形の三種あります。これは鋏で裁ち憎い所を裁つ時に使ひます。

(ス)鋏は、日本鋏、羅紗鋏とあります。鋏は、その用ひる場合によつて、使ひよいのを用ひます。

(ル)糸卷は、厚板や、薄板や、セルロイド、又は厚紙などで造つてありますが、二三寸方形のものがよろしう御座います。

(ヲ)袖形や褄形は、必ず適當なものを使ひます。袖形は、三分から一寸位まで、褄形は一分五厘から二寸位までといたします。

(ワ)指輪は、金屬、革、眞綿などで造へたものがよく、これは、指をいためないために必ず使ふのであります。

(カ)針には、種々の名稱のものがあります。木綿物は時には、三の三か、三の四、又は三の五を用ひ、

絹物の時には、四の三か四の四を用ひます。木綿物を縫ひますには、此の外、大茶穂、中茶穂、小茶穂などがあります。又絹物には、絹針、紬針などありますが、針はその人の指によつて適當なのを求めます。

(ヨ)紮け臺は、紮ける時、折附け、又は待針を打つたりいたしますには大變便利なものであります。形はいろ〳〵ありますが、見て適當なのを求めます。

(タ)霧吹は、材料の地や、染色によつて地直しをいたします時に細かい霧をかけるのに必要なものでありますが、高價なものでありますから、一般には求め憎いのであります。口で霧を吹く事も練習いたしますと、非常に便利でございますが、口の中が不潔であつたり又霧の大きさが一樣でないと、衣服を汚しますからよく注意しなければいけません。普通はブリキ亞鉛で出來た霧吹を使ふのがよろしう御座います。

(レ)糊篦、糊板、錐などは、袴腰を附けます時に使ひますが、いづれも適當なものを用ひます。

(ソ)アイアン（アイロンともアイヨンとも云ひます）

アイロンには、外部から火で燒くもの又は內部から燒くものとあり、又は瓦斯、電氣で燒くものなどであります。

左に記しました樣な裁縫用具はすべて、其の使用に注意し使用いたしました後は、何れも清潔にして一定の所に藏ひおき、破損したり、紛失したりしない樣に心掛けねばなりません。又床の上に針を落しておく事や、仕立てました衣服の中に針を縫ひ込んだりして怪我する事などは婦人の恥であります

◉運針

運針は、すべての縫ひ方の基本でありますから、よく練習して、熟達しなければなりません。

運針の方法は、まづ右手の中指に指輪をはめた左圖の樣に布を持つて、右の手の中指、藥指、小指は握つたまゝ布は平に延ばして、右の端から上げ下げしながら右手の拇指と人指し指を、互に左の方に進め針を運んで左手の際まで參りましたら、針の先を、左手の拇指と人指し指で摘み、右手で眞く糸を伸ばして布の縮まない樣にしなければなりません、はじめは、布を一枚で、布が白布なら白い糸で縫ひ、針目の不揃などはかさはず、常に早縫ひの練習をするのであります。

こうしてだん〳〵進むに隨つて針目を二分位に揃へて縫ひ、馴れるのを待つて布を二枚にし針目を一分五厘位にし、順々に布を三枚、四枚と重ねて針目を一分位に縫ふ事を練習するのであります。一度縫ひ終りましたら糸は針のまゝ抜き取り、そして又初めから縫ふのであります。こうして約五十分間に、長さ一尺の布ならば廿回以上百回位まで縫ふのであります。又針や角、圓などを次々と實習するのであります。用布は木綿で練習し、形を縫ひます時は、篦で標を附けてか、鉛筆で繪くのであります。

◉糸の結び方、留め方、繼ぎ方

留結びは、右手の人指し指の頭にかけ、拇指で捻つて中指と拇指とで引き締めるのであります。

糸の留め方に、抄留め、返留め、打留め、四つ留などあります。

抄留め、これは針留めともいひ、縫ひ終りを丈夫にいたしますための仕方であつて、縫ひ終りの針穴から、一針一針に返し、その縫ひ糸を針の先に一つ卷いて針を抜き出し、糸を反對の方に堅く引き締め、其所から後へ、元の針目に沿つて五分か一寸位縫ひ返すのであります。地の薄いものならば何か小布を當てゝ針留めをするのです。

返し留めは、縫ひ終りを、其の糸で元の針目に沿つて縫ひ返す留め方であります。

四つ留めは、縫ひ終りの留め方で、針を抜いて其處に針を當て、糸を一度針に搦んで針を抜き締めるのであります。

四つ留めは、單衣ならば袖口に袖口裏の附いた時の袖口留め、袷、綿入、羽織の袖口止め、袖附、脇明の止めや衿先等の表裏四枚寄り合ふ所などの、針留めから少し離れた所を四枚一針にかけ、左手の拇指と人指し指とで布を堅く押へ、針を抜いて元の針穴に刺し、針の先に糸を一つ搦んで針を抜き、そして糸を引き締めるのであります。

糸の接ぎ方には、機結び、重ね接ぎ、結び接ぎ、撥り接ぎなどであります。

機結びは、二本の糸を接ぎ合せる時の方法であつて左右の手に糸の端を持ち、圖の樣に、右を下、左を上に糸を重ね左のを左手の人指し指の上に載せ、拇指で押へ右手の糸で輪を作り、其の上にかけ糸の端を輪の中に潛らせ、右の長い糸を引き締めます。

結び

機

（イ）

（ロ）

重ね接ぎは、糸の有るたけ縫ひ終つて、打留めをし、別の糸の先を留め結びにして一寸程手前から前の縫ひ目に沿つて縫ひ重ねて行く方法であります。

結び接ぎは、縫ひ方途中で終つた糸と、外の糸とを機結びに接ぎ合せて縫ひ續ける方法であります。

撚り接ぎは、縫ひ終りの糸の端と外の糸の端とを一寸程、撚りを解き、四本撚り合せて接ぐ方法であります。

◉縫ひ方

縫ひ方には、素縫ひ、本縫ひ、合せ縫ひ、伏せ縫ひ、袋縫ひ、返し縫ひ、千鳥縫ひ、輪縫ひ、纏ひ縫ひ、結り縫ひ、卷き縫ひ、袖形の縫ひ、穴結り縫ひ、袖口の掛け方褄縫ひ方などあります。

素縫ひは、運針の初歩の縫ひ方であります。布を一枚か二枚重ね、針には糸を通さずに端から端まで成るべく早く縫ふ方法であります。

本縫ひは、布を二重にして針には布の色と違つた色目の糸を通し、縫ひ代、針目に注意して迅速に縫ひ上げる練習をする方法であります。

合せ縫ひは、布と布とを中表にして二枚合せて縫ふのです。合せ縫ひを用ひる所はたくさんあります背も脇も皆此の縫ひ方であります。

袋縫ひは、襦袢、單衣の袖下、又は、三つ身四つ身の背縫ひ等に用ひる縫ひ方で、初め表から縫ひ代一分に縫ひ返して縫ひ代通りに縫ふのであります。

ミシン縫ひは、本返し縫ひ、又は丸返し縫ひと云ひます。シャツ、や、西洋前掛などを縫ひます時にミシンを使はずに縫ふ時の縫ひ方であつて一針進んで、一針前の糸の所まで返して縫つてゆくのであります。

返し縫ひは、半返し縫ひとも云ひます。針を返す時、針目の半分の所まで返します。初め一分の針目に一針縫つて五厘後に返し又一分進んで五厘返しますのです。之れで縫ひ上りを表から見ますと、丁度並縫ひの樣に見えるのであります。これは縫ひ方を丈夫にする時の仕方ですからネル等の脇縫ひ、袖付け、又は布を接ぎ合せて縫ひ込みを左右に割る時などに用ひます。

千鳥縫ひは、地の厚いつまりフランネルの樣ものゝ單衣の裾口や、袖口、背や脇の縫ひ込み等を綴ち附けます時などに用ひる方法で圖の樣に左から右に進むのであります。

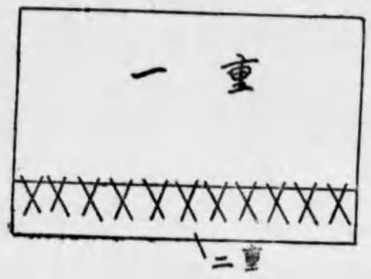
輪縫ひは、ヨダレ掛け、西洋前掛、シャツ等で、ミシンを使はずに、色々の模樣を縫ふ時などに用ひる仕方であつて、始め、一針縫つて針を表に出し、縫ひ糸を輪にして、左拇指で押へてゐて、針を元の穴から通して一針縫ひ、針を輪の中に掛けて糸を引き締めながら進む縫ひ方であります。

纏ひ縫ひは、ネルやセル等の縫ひ込みを綴ち附ける時に用ひる仕方で、表に針目を小さく出して針を

かけ、他の一方を縫ひ込みの端にかけ、圖の樣にするのであります。

ひ縫鳥千

裏



表

卷縫ひ

卷縫ひは、裁ち目の解れない樣にしておく爲に用ひます。衿肩の裁ち目などを卷縫ひしておくのであります。

仕方は、裁ち目の向ふから手前に針を出し、又向ふから手前に出してゆく縫ひ方であります。

結り縫ひは、シャツやズボン下などの穴の解れない樣にする爲の方法であつて、布の裏から針を通し針を拔かない間に針の、元の方の糸を針の先に手前から向ふに掛けて針を拔き、堅く引き締めるのであります。

穴結りには、色々ありますが、いづれも紐を掛ける所でありますから、丈夫にしておくのであります

その仕方は、穴の切れ目の際に、共糸で芯を入れ極く淺く針を裏から表にかけて結り縫ひをし、縫ひ終りの所には閂止めをしておくのであります。

穴結り（圖示）

袖口布の掛け方は、はじめ、横の方を縫ひ附け、角の所は、極く小さく返し針をし、堅を縫ひましたら、又角の所で返し針にし横を縫つて袖口布の方に折り返し角の所は正しく引き返すのであります

但し、袖口布の先の方は、袖口布の丈の端にキセをかけて、袖口布が裏袖よりも、引きいれる樣にするのであります。

袖形を縫ひますには、決の角の所に袖形を當てゝ、標を附け、そこの所は小針に縫ひ、袖口明の所はよく糸止めをし、袖形を作りますには、袖附けを右に、袖口明の方を左に持つて、五つか七つ襞を取り、少しキセをかけ、一方に折りを付けて、襞を正しく疊んで、襞を取りました所から一分はなれた所の襞の中に針を通し其の針を後に返して襞全體を折つて手前に出して留めるのであります。

袖形の襞の取り方

裾の縫ひ方は、まづ裾先の所に裾形を當てゝ標を附け、其處を表幅と同じに縫ひ締め、裾先の方に斜に裏衽を引張り、息を吹きかけて、膝頭に載せて掌で壓して乾し、皺をよく消しましたら、表衽を

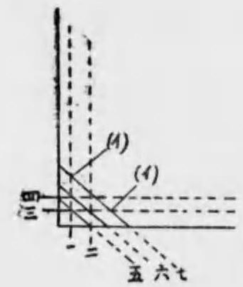
向ふに、裏衽は自分の方に持つて、適當な所に待針をさし、其所を小針に縫つて一分ほどキセをかけ、表の方に折りを附けて針目を四五分に隱し躾を掛けるのであります。

額縁縫ひは、セルやネル等の樣に地の厚いもので上仕立にいたします時は裾先を額縁縫ひにするのです。

方法は次の圖の樣に折りを附け、圖の七の折り目を合せ、圖の合印（イ）と（イ）との樣に一と三の折り目の所まで返し縫ひにし、縫ひ代だけを殘して中の縫ひ込みは斜に切つて取り去り、縫ひ目を割つて表返して、裾下と裾口とを紩けるのであります。

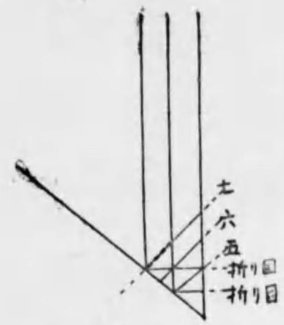
ひ縫緣額

イ



額緣縫ひの出來上り

ロ



此所を互に縫ひます

◉紵け方

紵け方には、まづ耳紵け、三つ折り紵け、本紵けとあります。

耳紵けは、二つ折り紵けとも云ひます。

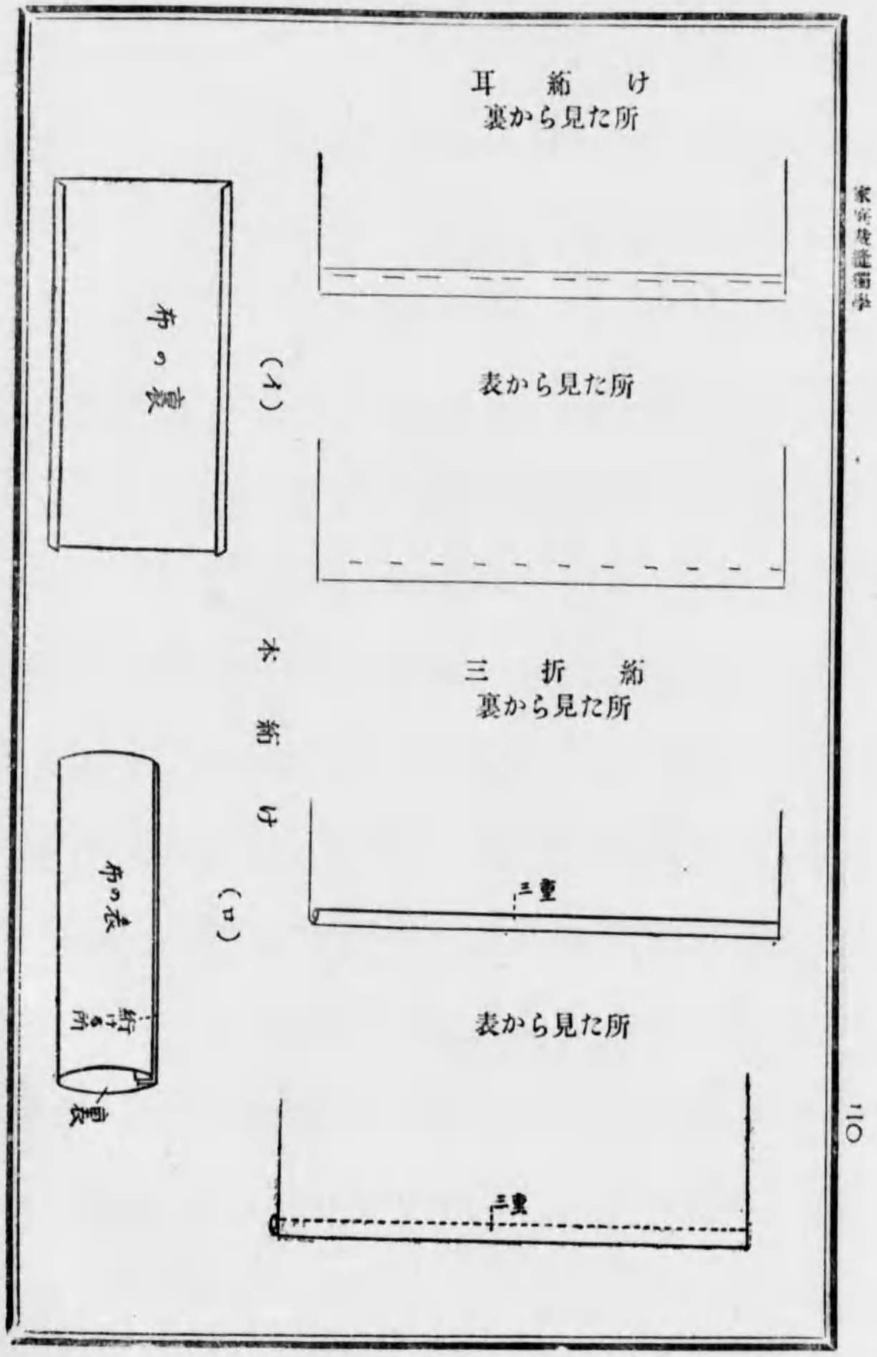
布の耳を裏に折り返し、裏には小針を二針、表に小針を一針出し、針目と針目の間は、七分か八分位にして布と布との間に通しそこは大針にし又前の樣に裏と表に小針を出して行くのであります。

單衣の振りや脇縫ひの縫ひ込みなどを綴ぢ附ける時に致します。

三つ折り紵けは、先づ紵け代だけに折りを附け其半分を中に折り込み、表には極く小針に裏は布の折り目の中に針を通して、三四分位の大きさに紵けるのであります。單衣の袖口、衿下、裾口などに用ひます。

本紵けは、布の兩端を二分五厘づゝ裏に折り返し、裏を中にして二つに折り、兩端の折り目に合せて布の間を向ふは二分位手前は三分位に抄つて紵けるので主に紐や帶や綿入の衿下などに用ひます。

紵け方圖



◉躾の掛け方

躾の掛け方には、並躾、隠躾、グシ躾とあります。

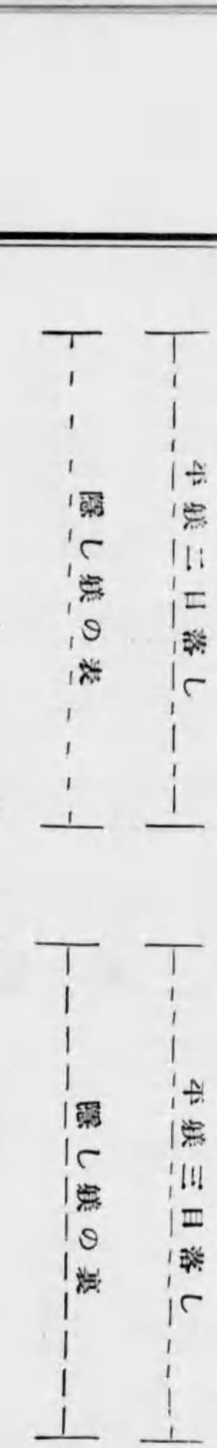
並躾は、平躾とも云ひます。これは着用する時に取り去るものでありまして、一目落し二目落し三目落しとあります。一目落しは、針目七分から一寸位にし、表に大針一つ、裏に小針を一つゞゝ出すのであります。二目落しは表に小針と大針を出し裏に小針を出すのであります。三目落しは、二目落しより、表に小針を一つだけ多く出すのであります。

隠し躾は、着用いたします時もとらずにおくのですから表から目立たない様にするものです。それで糸は布と同じ色のものを用ふ様にし、針目は三分から五分位にして、表に小針裏に大針を出すのであります。

グシ躾は、又縫ひ躾とも云ひ又、飾り躾とも云ひます。躾糸で圖の様に、グシ縫ひの様にするものであります。

躾の圖

（イ）　平躾　一目落し



衣服の裁縫

小裁と中裁襦袢

一つ身襦袢

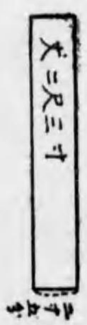
○仕立上げ寸法、袖附三寸五分以上、袖幅四寸以上五寸五分。袖口廣袖、身八ッ口二寸、馬乘二寸、衿幅八分、袖丈五寸以上、身丈一尺以上、衿肩八分以上一寸、其の他は一杯であります。

襦袢の袖丈は、上に着る着物の袖丈よりも二分か三分短くいたします。

○裁ち方と積り方

並幅で長さ三尺の布、但し袖丈を五寸、身丈一尺、衿肩八分、衿丈二尺三寸、衿幅二寸五分として。

裁ち方圖



身丈　用布
袖丈 5. ＋ 10. ＝ 15.　15. × 2 ＝ 30.
ミダシ　メビシロトヨリカタイヤウヒ　ミヨリタケの半分　ミヨリタケ
10. ＋ 1.5 ＝ 11.5　11.5 × 2 ＝ 23.

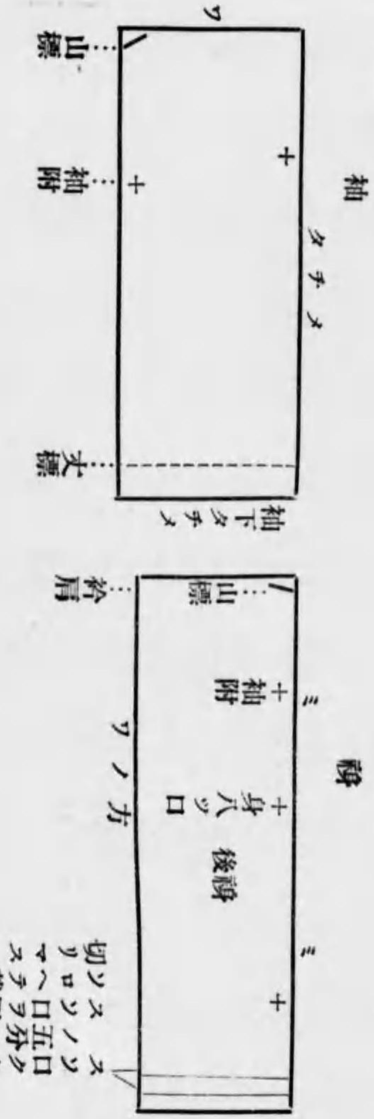
裁ち方說明、袖丈の上り寸法より五分長いものの二倍を用布から取り、幅を二つに切つて兩方の袖とし、殘つた布を半幅に折り、又丈と二つ口折つて衿肩を八分切り、後襟は其のまゝで、前襟は半幅に切るのであります。衿は別の布を用ひます。

○標の附け方

先づ袖の布を、表と表合せ、長く揃へます。それを丈二つに折り、丈の輪を左に、裁ち目は右に持つて、幅の裁ち目の方を自分の向ふに、耳を自分の方にして下におき、袖丈の上り寸法より一分長く標を附け、次に自分の前で左の端に山標をし、次に袖附の標を附けます。

襟は表を中にして幅を二つに折り、次に幅の裁ち目の方を下にし、輪の方を上にして丈を二つに折り丈の輪の方を左に、裁ち目を右、耳を自分の向ふにして平に下におき、身丈を四枚共よく揃へましたら、自分の向ふで、左の端に山標を附け、それから袖附と身八つ口の標とを寸法通りに附け次は馬乗の標二寸に、裾掛の五分を加へ二寸五分の標を自分の向ふで右から左に度つて附けます。衿丈の標は附けないものであります。

標附け方の圖



○縫ひ方の順序

先づ袖の表を見て、袖口を八つ口の方で、幅五分殘して淺く縫ひ、引き返して裏を出し、袖丈の標の所を縫ひましたら、袖附を右にし、左の袖に縫ひ目を自分の向ふに折り、右袖は自分の方に折り附け又引き返して表を出し、双方共正しくして下におき、袖幅の標を附けて其所折りを附け、袖口を三つ折にして紮け、次に後幅は一杯にして、馬乗の標から身八つ口の標まで脇を縫ひ、縫ひ込みは前襟の方に折を附け、次に脇縫ひの所で、後襟の縫ひ込みの端の引きつらない樣に、斜に後襟の方に折り其の折り山を前襟の縫ひ込みだけに綴ぢ附け、それから身八つ口と、馬乗と、脇の縫ひ込みとを綴ぢます。

裾口は、二分五厘の幅に二つ折にして縫ひ、それから袖を附け、縫ひ目は袖の方に折りを附け、前幅は一杯に衿肩まで斜に折り附け、其所に衿を比へて待針を刺し、衿を附けて縫ひ目は衿の方に返し、半衿は左を五分程長く掛け、衿幅の標を附けて其所に折りを附け、左右の衿先は一分中を縫ひ、縫ひ込みを裏の方に折り、それから三つ衿に芯を入れて縫ひ附けましたら衿を紮け、紮け終りましたら双方共正しくして畳みます。

半衿は衿を紮けてから掛けてよろしいのです。

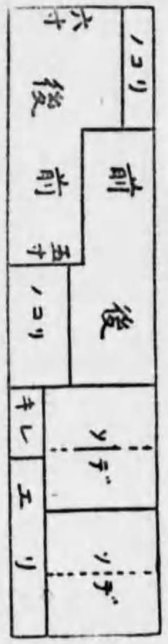
一つ身襦袢は生れた時から二三才位まで用ひるのであります。

三つ身襦袢

○仕立上げ寸法、袖丈一尺三寸以上。衿幅一寸以上一寸二分。衿肩一寸二分。身丈一尺二寸以上。前幅一杯、後幅一杯、袖附四寸五分内外、袖幅廣袖であつて上着と同じにいたします。身八つ口二寸馬乗二寸。

○裁ち方と積り方

裁ち方の圖



○裁ち方説明

袖丈の四倍したものを用布から取り片端から衿幅を竪に落して衿とし、殘つた幅の廣い方を二つに切つて袖とし、後の布の丈を三つに折つて共の折山の所を、一方は向ふの方から、前幅だけ五寸切り込み、一方は手前から五寸切り込み、兩方の切り込みの端から端に向つて斜に綿を引き、その綿を切り、次に衿肩を定めて背の端から殘布を取るのであります。そして殘布は衿に用ひます。その

時は、中央に別の布を接ぎます。並幅で九尺の布を裁つ時、袖丈一尺三寸五分としての身丈の出し方。

$$\left\{\begin{array}{l}\text{巾地}\\ 9.0\end{array}\right. - \left(\begin{array}{l}\text{袖丈}\\ 13.5\end{array} \times 4\right)\Big\} \div 3 = \begin{array}{l}\text{身丈}\\ 12\end{array}$$

○標の附け方

標附けは一ツ身と同じであります。

○縫ひ方の順序

左右の袖を縫ひ終りましたら、襟を出し、布の表を見て背を極く淺く衿肩から裾口に向つて縫ひ手前に折り返して引返し、裏を出して前と同じに衿肩から衿肩の上り寸法の所から縫ひ、自分の方に返します。それから背縫ひを左に持つて襟を平に下におき、後幅と肩幅の標をしあとは一ツ身と同じに仕立てるのであります、

袖丈が長いのですからつうは、袖幅標より廣い分は裏に折つて、袖附止り一寸程上つた所まで耳絎けいたします。

三ツ身襦袢は三才から五才位の小供の用ひるものでありまして、襟を三布で取りますから三ツ身と名附けたものであります。

四ツ身襦袢。

○仕立上げ寸法、袖丈一尺五六寸。袖幅五寸内外。身八つ口二寸。馬乘二寸五分。身丈一尺五寸。前幅後幅は一杯。衿肩一寸五分。衿幅一寸二分以上。

○裁ち方と積り方

裁ち方の圖

積り方

袖丈 身丈 川布
(15. + 15.)×4＝120)

○裁ち方説明

用布の中から袖丈の四倍を取り丈を二つに切り、左右の袖とし殘つた布の中から幅二寸五分を竪に裁ち落して衿とし、幅の廣い方は丈を四つに折り、衿肩一寸七分を切つて襟にいたします。

○標の附け方や縫ひ方は三つ身と同じであります。

四ツ身は五六才から十一二才までの小供の用ひる衣服であります。

○本裁男襦袢

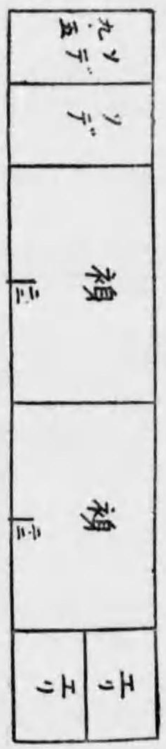
本裁は襟を五布で取り、大人の着る衣服であります。

○仕立上り寸法。袖丈一尺以上一尺三寸。身丈二尺以上。後幅八寸。前幅七寸。袖幅九寸。袖附一尺一寸以上一尺二寸。(着物の袖附より三分詰めます) 衿肩。(上の着物より一分詰めます) 肩幅八寸五分。袖一尺七寸五分。

○裁ち方と積り方。

裁ち方説明。用布の内から袖丈の四倍を取り大を二つに切つて左右の袖とし、殘つた却から身丈の四倍を取り丈を四つに折り輪の二枚の所で衿肩を二寸二分切つて襟とし、あとの布を幅二つに切つて眞中で繼ぎ合せて衿といたします。

裁ち方の圖



幅九寸五分、長さ一丈五尺六寸の布。

袖丈一尺二寸としての身丈の出し方。

ソデタケ　　用布
(12. ×4=48.　156. −43=108.
エリカタヘマワシヒロミタケ　ミタケ　エリカタヘマワシエリタケ
(108. −　3　)÷5=21.　21. +　3　=24.

○標の附け方は四ッ身と同じであります。

○縫ひ方の順序

袖の表を見て、袖附の方を、幅、五六分殘して袖下を淺く縫ひ引返して裏を出し、袖丈標の所を縫ひ左袖は袖附を右に持つて向ふの方に折り、右袖は自分の方に折りを附け、返して袖幅標を附け、それから袖丈の長いもので袖附より下までありますの時は、袖丈標から袖附標まで袖幅標通りに縫ひ内袖の方に折り返し、外袖の縫ひ込みは袖附標から下の方に縫ひ込みの引つらない樣に、外袖の方に斜に折り返し、折り山を前袖の縫ひ込みに縫ひ附け、袖下の角の所は、はじめ丈の縫ひ込みを、袖幅標を縫つた所に縫ひ附け、次に幅の縫ひ込みを、内袖の方に返して丈の縫ひ込みだけに縫ひ附けます。

襟は、はじめ、衿肩を右に持つて背を二度縫ひにし、自分の方に折り返して下におき、後幅と肩幅の標を附け脇は、袖附標から馬乘標まで縫ひ、前に折り返し、脇の縫ひ込みの多い時は、前後の縫ひ込

みを一分交へて折り附け、其折り山の所を前襟の縫ひ込みだけを抄つて綴ぢ附け、一分交へた折山から前後の縫ひ込みを左右に開き、縫ひ込みの端を削後共襟に綴ぢ附け、馬乘を耳絎けいたします。

袖附けは、まづ肩山と袖山とを合せて待針を刺し、襟で袖を挾み、襟の縫ひ代を折り、四枚一度に極く淺く糸止めをし、其の糸で始めと終りは一寸程の間を、襟を極く淺く返し針で縫ひそれから上は一分の縫ひ代で縫つてゆき折りは袖の方に返します。

裾口は、三つ折り絎けをし、前幅を定めて標を附けて其處に折りを附け、それから衿山を接ぎ合せ衿の縫ひ代の折りを附けましたら衿山と背縫ひとを良く揃へて衿肩廻の所は、衿を少し緩くして縫ひ、衿の方に折り返して衿幅標を附け、三つ衿に芯を入れ、衿先は一分先を縫つて裏に折り返して正しく絎け附けましてから半衿を掛けるのであります。半衿は、上前が下前より一寸長くなる樣にして衿山を定め、始め堅に折を附け、左右の端に一分のキセを掛る樣に縫ひ附けておき、衿の縫ひ目を善く扱き出し、衿より五厘先に出して、下衿の見えない樣に衿半を少し緩めて附けるのであります。

○本裁女襦袢

男物と違ひます所は左の所だけであります。

○仕立上げ寸法。袖丈上の着物より二三分短く。袖幅、上の着物より一分狹く。袖附、上の着物より

一分少くします。身八つ口三寸。前幅六寸五分。衿幅、三つ衿で一寸五分裾口で一寸八分以上二寸裄一尺六寸五分。半衿幅一ばい。

半衿を掛けます時、模様のおき方に依つて、上前を一寸長くする時と、下前も上前も同じ長さにする時とあります。半衿には別の布を裏衿に附け、其の中に別の布を薄糊で張つた物を芯に入れます

○縫ひ方で男物と違ひます所は、身八つ口を四ッ身の様に明ける事と、袖丈が長くて袖附が少いので袖は袖附の止りから下、を四ッ身の様に耳紬けか、三つ耳紬けにする事であります。

○半衿の縫ひ方と掛け方

半の衿拵へ方は、裏表の衿に同じ色の布で裏打をし、裏衿と表衿とを、中表に重ね、幅を二寸程殘して、衿山の方を縫ひ合せ、折りは、はじめ横に折つて次に竪を折り、角の所を綴ぢ、返して表を出し、表裏共に躾を掛け、はじめ附けた衿より半衿を五厘先に出して表衿を紬け附け、次に裏衿を紬け附けて最後に火熨斗をかけて仕上げるのであります。

○一ッ身單衣

○仕立上げ寸法、袖口一尺以上。袖附三寸五分から五寸まで。袖丈五寸以上。袖口廣袖。身八つ口二寸。抱幅三寸五分。衿下四寸から五寸。衿幅一寸内外。身丈二尺五寸内外。衿肩一寸内外。衽幅二

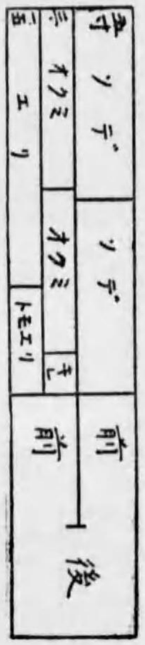
寸五分から三寸。衽下り二寸五分。相襟二分詰まる。後幅前幅一杯。

○裁ち方と積り方

幅九寸五分、長さ九尺の布。

袖丈一尺三寸。袖幅五寸。衽幅三寸。衽丈一尺八寸。衽幅一寸五分。衿丈三尺五寸としての裁ち方

裁ち方の圖



○裁ち方説明

九尺の中から袖丈の四倍つまり五尺二寸を取り、其の端から幅一寸五分裁ち落して衿とし、又衿三寸裁つて左右の衽とし、殘りの幅五寸の布を竪二つに切つて兩方の袖とし、後の幅九寸五分の三尺八寸の布を半幅に折り是を竪二つに折り衿肩を一寸明け、後身は其のまゝ前身を半幅に裁つのであります。

積り方

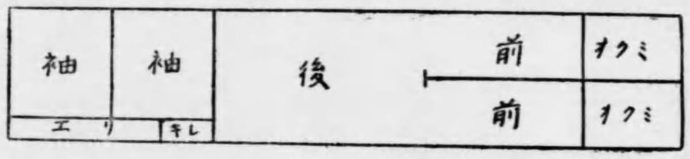
ソデタケ
13. × 4 = 52. 90. − 52. = 38.

38. ÷ 2 ＝ 18.（ミタケ）

幅に九寸五分の布。

袖丈一尺四寸五分、袖幅七寸、身丈二尺四寸、衽下り二寸、衿幅二寸五分、衿丈四尺五寸、衿肩一寸、衽丈二尺二寸としての裁ち方。

裁ち方の圖



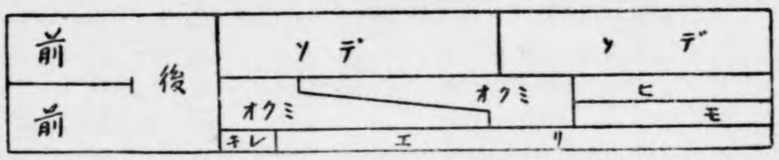
14.5 × 4 ＝58.（ソデタケ）　24. × 3 ＝ 72.（ミタケ）

72. ＋58. ＝130.　130. － 2（オクミ下リ用布）＝ 128.

幅に九寸五分長さ八尺の布。

袖丈一尺。袖幅五寸。衽幅三寸。衽丈一尺八寸、衿幅一寸五分。衿丈三尺五寸。衿下六寸。衿肩一寸、身丈二尺としての裁ち方。

裁ち方の圖



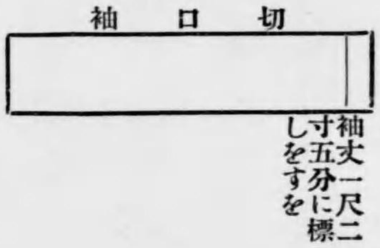
積り方

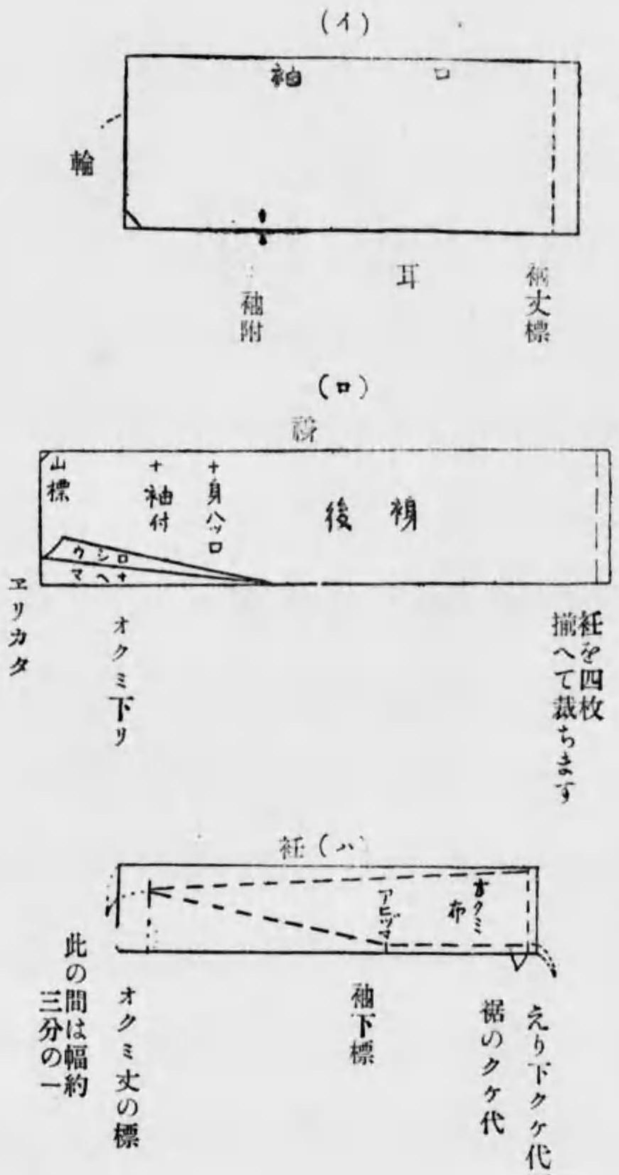
10. × 4 ＝ 40.（ソデタケ）　20. × 2 ＝ 40.（ミタケ）　40. ＋40. ＝80（用布）

○標しるしの附け方圖

（イ）

袖口切





○縫ひ方の順序

袖口布は、並幅の四つ割で、袖丈と同じ長さの別布を用ひます。そして標を附けます時は一分短くいたします。まづ袖口布を自分の向ふにし、袖を自分の方に持つて、袖布を緩く、袖口布を引きつつて縫ひ、袖の方に折り返し、袖下を袋縫ひにいたします。其の縫ひ方は、はじめ布の表を見て、袖附の方は布の端から幅五分か六分殘し口元の方は、袖口布の幅の上り寸法より、二分程入つた間を淺く縫ひ、返して布の裏を出し、口先は四枚止めをし、其の糸で袖丈標の所を、袖口布の奥の方から紡け代の二倍手前まで四つ縫ひにし、其所で一針止め、その糸で袖下を布幅の終りまで縫ひ、次に袖口布を紡け代の二倍縫ひ殘した所を縫ひ、そして袖口の紡け代を二厘として鞐を掛け、それから袖口布を紡ける方にも鞐をかけて針を三分位に紡け、次にの袖幅標を附け八つ口を耳紡けにします。今度は衿下

を三つ折縫けにして、衿下標から一寸上つた所まで縫け、それから後幅と肩幅の一杯の標を附けまして脇を縫ひ、前襠に折り返し、脇縫ひ込の多い時は、前後の縫ひ込みを一分程交へ、其の折り山を前襠の縫ひ込みだけに綴ぢ、そして縫ひ込みを前後に開いて身八つ口と脇の縫ひ込みを綴ぢ、袖を附けて袖の方に折り返し、次に前幅と幅抱の標を附け、折りを附けたら其所に衽を揃へ、待針をして袋縫ひにし、左右共下から衽を附け、縫ひ目は衽の方に返します。衽の附け方は身と衽も標に拘らず、縫ひ代を一杯にし布の表に縫ひ目を出し、一分の縫ひ代にし裾口から四分上つた所から衽下りまで縫ひ衽の方に折返し、次に布の裏から襠と衽の幅標を合せて、裾口から衽下りまで縫ふのであります。縫ひ目は、裾口から、衽下止りの二三寸上まで衽に縫け附け、次に裾を幅二分五厘に三つ折にし、左右の褄先を斜に折つて針目を三分位に縫け、それから衿を附け、縫ひ目は衿の方に返し、衿幅の標を附け、衿先を一分中を縫ひ、裏の方に折つて縫けましたら双方正しくしてたゝんでおくのであります、三つ折には白木綿か白晒布等を入れるのをよろしいのです。

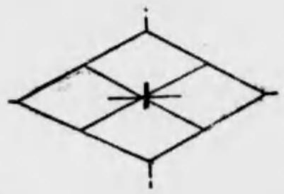
衿の布幅の狡い時は、裏地を附けて裏衿の方に折り返し三分位の針目で伏せ縫ひをいたします。

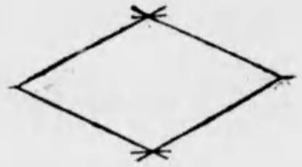
○附紐の縫ひ方

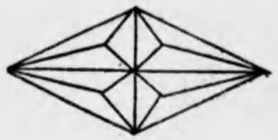
附紐は並幅の四つ割の布で一尺八寸。上等のときは、半幅二尺位要るのです。

縫ひ方は、布を中表にして幅を二つに折り、一方の縫ひ殘した所から引き返して表から鞍をかけます。男ならば縫ひ目を下に向け、女ならば上に向けて、脇縫ひの止りと、紐幅の山とを揃へ、一方の端の裁ち目の所を、縫ひ代だけ裏に返し、四方縫けましてから飾縫ひをするのであります。紐附が廣い時には、幅の中央と、脇縫ひの止りとを揃へて縫けるのであります。

ひ縫り飾紐







○一ツ身袷

○裁ち方と積り方

表の裁ち方は單衣と同じであります。

裏の裁ち方積り方。

幅九寸五分長さ八尺二寸五分の布。

袖丈一尺三寸。身丈一尺九寸五分。衽下り二寸。衿肩一寸。衽丈一尺七寸五分としての裁ち方。

裁ち方圖

積り方

そで丈 13. × 2 = 26.　82.5 − 26. = 56.5

56.5 + 衽下り 2 = 58.5

58.5 ÷ 3 = 19.5　19.5 − 2 = 17.5（みたけ）（おくみたけ）

裁ち方説明。

用布から袖丈の二倍を取り、これを半幅に裁つて兩袖とし、それから襟を取り、殘りを衽といたします。

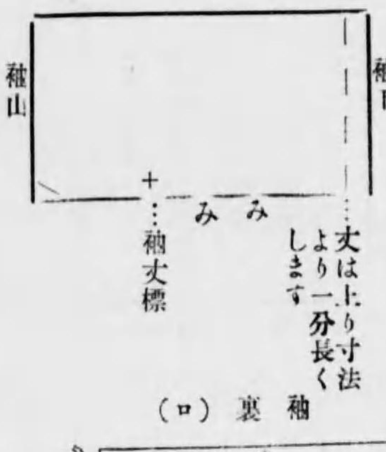
袖口布は別に並幅を四つ割にしたもので袖丈と同じ長さのもの二枚用ひます。

○標の附け方

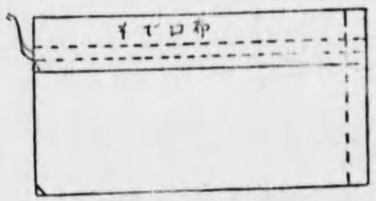
（イ）

表　袖

（裏を向けて）



（ロ）　袖　裏



袖幅の終りが裏袖幅が狹いので、表袖幅に合せて袖口布を掛け出します。

山標

…袖つけ標

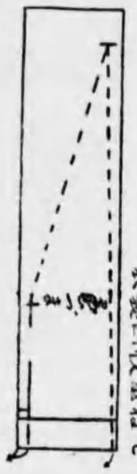
袖口布を縫ひ附ける標

（ハ）胴裏

（ホ）袖裏

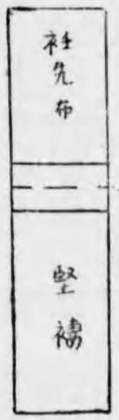
（ヘ）裾廻布

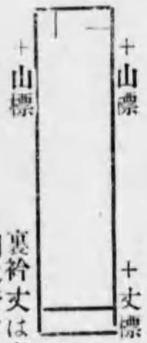
（ト）衽　表裏四枚重ねて



身に附く所　胴接ぎ標

（ト）衽　裏





○縫ひ方の順序

先づ裏袖に袖口布を縫ひ附けて袖口の方に折り返し、次に表袖を自分の方に持ち、裏袖を向ふに折つて、袖口布を少引きつらし、表袖を緩くして口先を縫ひます、

若し裏袖が廣くて袖口布幅の端さであります時は、裏袖も緩くします。口先を縫つた縫ひ目は、表袖の方に返して下におき、袖幅の標を附け、表は標の所を、裏は標を五厘縫ひ込んで八つ口を縫ひ、裏の方に折り返します。袖下は裏表四枚共に縫ひ、返して縫ひ目を正しくし、八つ口と袖口には、前後を別々に躾を掛け、袖下には四枚共躾を掛けます。

襟はじめ、後幅と肩幅標とを附けまして、背を縫ひ、縫ひ目は前襟の方に返し、次に、通し裏の時は、表の様に幅標をして脇を縫ひ、胴裏と裾廻布とが別布の時は、標と標とを合せ、布一枚づつ前後別別に接ぎ合せて、胴裏の方に折り返し、表から躾をかけます。躾は絹布の時は縫ひ躾にし、綿

布の時は二目落しにかけます。

それから後幅と肩幅標を附けて脇を縫ひ、前襟の方に折り返し、裾口で裏表の縫ひ目をよく合せて待針を刺し、縫ひ目毎に一針糸止めをして裾口を縫ひ合せ、其の縫ひ目には一分のキセを掛けて表の方に返し、躾を掛けましたら袵を定めて袵綴ぢをいたします、綴ぢ方は裏の前幅の間に二針、表に五針脇の縫ひ目には、裏表に出し、後は裏に五針、表に十一針を出して綴ぢます。それから脇の縫ひ込みを、脇縫ひの止りから下後縫ひ込みを一分程重ね、縫ひ込みの引きつらない様に斜に後襟の方に折り返し（裏表共）脇の縫ひ目を布の間で、裾口から脇縫ひの止りまで綴ぢ、脇縫ひの止りで、裏表四枚共極く淺く針を通して糸止めをし、其の糸で一方の身八つ口を縫ひます。それから裏表の襟で袖の裏表を挾み、袖の山と襟の山と合せ、身幅に縫ひ込みのあります時は、折つて一分縫ひ代にし、縫ひ込みの少い時は、はじめと終りだけを折り、其の外は開いておき、袖の方は殘らず縫ひ代を開いて待針を刺し、襟を手前に、袖を向ふに持つて袖附標の所で表襟と裏襟とに極く淺く針を通して糸止めをし其の糸で表の袖を附け、はじめ五六分の間は襟を極く淺く返し針に縫ひ、段々一分の縫ひ代にして附け終り、五六分手前まで縫ひ、五六分の間は、附けはじめの様にして糸止めをし、袖の方に折り返し裏袖は袖幅に縫ひ込みのある時は、折つて一分縫ひ代にし、縫ひ込みのない時は、はじめと終りだけ折り、襟を開いて袖を手前に、襟を向ふに持つて、表袖の様に附けて襟の方に折り返します。それか

ら前襟の幅を、表裏引き合せて、襟を附ける部分を綴ぢて前幅と抱幅と其の中程とに標を附け、次に竪衿と衽先と別布の時は、それと接ぎ合せ、衽先の方に折り返し、躾と胴接ぎの様に掛け、裏表の衽を合せて褄を拵へ、隠躾を針目五分位にし、表に一針づゝ出して綴ぢ、次に衽の裏表で前襟を挾み、裾口の縫ひ目をよく揃へて袵山と裾口の縫ひ目の所とで糸止めをし、衽下りの所まで四つ縫ひにし、折りを表襟の方に返しましたら次に衿下を、表は幅標の所で、裏は幅標を五厘縫ひ込んで褄先から衿下標の所まで縫ひ、折を表に返し、引き返して縫ひ目を正しくして躾を掛け、次に衿下止りから衽下りまで、衿の附く所を、衽の裏表の幅を揃へて躾で綴ぢておき、裏衿りのある時は表衿の端に縫ひ附け、裏衿の方に折り返して針目五分位に伏せ縫ひをし、其の衿を背から左右に附け下げます。衽下りの所は一針極く小針に止めます。そして裏衿の方に折り返し、三つ衿には別布を芯に入れて綴ぢ、衿を紮けましたら正しく疊んでおくのであります。

綿布の時は、霧を吹いておき、絹布の時は火熨斗をかけるのであります。

背守り。背守りは衿肩から五分下げて附け、紐は身八つ口の止りと同じ高さの所から附けるのです、糸で守り縫ひをいたします時は、青、黄、黒、白、紅の五色の絹糸で左圖の様にいたします。

男

女

○一ツ身綿入

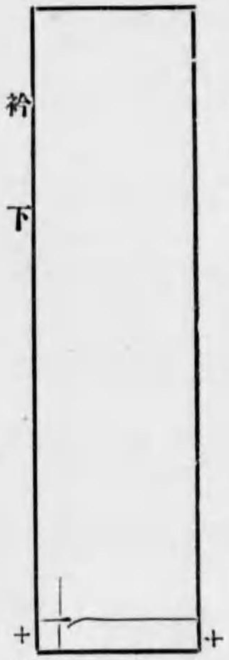
○裁ち方と積り方

裁ち方は袷と同じであります。

○標の附け方

大體は袷と同じですから違ふ所だけ述べますと、袷より袵が少し大きくなりますので、次の圖の樣に表衽に、出袵の四分の一以上五分の一切り下げを附けましたら袷の樣に標を附け、裏袖丈は一分短く標を附けるのであります。

表衽に切り下げを附けた所の圖



袷下

袷下の紮け代
二分五厘

此の間出袵の四分の一
裁ちおとします

○縫ひ方の順序

先づ裏袖に表袖より幅六分廣くなる樣に、袖口布を掛け、其の縫ひ目は袖口布の方に返して躾をかけます。

袖下は袖口布の縫ひ目を良く合せて縫ひ、袖附を右に持ち左の袖は自分の方に折り、右の袖は反對の方に折ります。それから表袖を縫ひ、折目は、袖附を右に持ち左の袖は向うに返し、右袖は自分の方に返し、口明は二分の縫ひ代にして折を附け、其所に躾をかけます。そして袖下にも躾をかけ、それから表袖幅の標を附け、裏はそれより六分廣く標を附けます。次に、表裾に後幅と肩幅の標を附け、脇を縫つて前裾の方に折り返し、後の裾縫ひ込みにキセを取つて前裾の縫ひ込みに縫ひ附け、次に前

幅と抱幅と其中程とに標を附け、折を附けて其所に衽を揃へて待針を刺し、左右共裾口から縫ひ、折り目は衽の方に返します。それから衿を附け、衿の方に折り返し、次に表衿幅の端に裏衿を縫ひ附け折り目は裏衿の方に返して躾を掛けます。今度は裏褄を取つて後幅と肩幅の標を附けて脇を縫ひ、前褄の方に折り返し、後褄の縫ひ込みにクセを取り、前褄の縫ひ込みに縫ひ附け、次に前幅と抱幅と其中程に標を附けて其所に折りを附け、其所と衽を揃へて縫ひ附け縫ひ目は衽の方に返します。

裾口は、裏と表の縫ひ目をよく揃へて待針を刺し、裾を縫つて縫ひ目に一分のキセを掛け、表の方に折りを附けて躾を掛け、褄には隠し躾をしまして次に表袖を附けて縫ひ目を袖の方に返し、次裏袖を附けて縫ひ目は褄の方に返すのであります。

裾廻布と胴裏とが別の布である時は、裾廻布の脇を縫ひ、それから胴裏の脇を縫つて胴接ぎをし、胴裏の方を返して、躾は、綿布ならば二目落しにし、絹布ならば縫ひ躾をかけ、衽も竪褄布と衽先布とを接ぎ合せ、折りを衽先布の方に返して躾をかけるのであります。

褄を縫ひますには、裏を自分の方に、表を向うにして縫ふのであります。裾口と衿下とに躾を掛けて、鏝を當てそうしてから縫ひ目を正しくして夜着疊にするのであります。

○綿の入れ方

袖口綿と、裾綿を拵へ、裏はたゝんでおいて表を引き伸し、後の方を見て其の上に幅も丈も二寸位づゝ長く綿を載せ、裾口と袖口とに袵綿をくるみ、袵のおき具合を見て、双方の縫ひ目を揃へて裏を引き伸ばし、又、裏褄と袖とに綿をおき、前の方から決に手を入れて、袖口と決を一緒に持つて引き返し、裾口も表の前から手を入れて、脇縫ひと褄先を一緒に持つて引き返し、双方共正しく引き合せるのであります。

○紮け方

三つ衿に待針を刺し、双方共正しく引き合せて、袖口を四分裏に折り、針目を一寸位にして綿を括り附けましたら裏表の袖幅を揃へ、八つ口と身八つ口の所は、裏の方に綿をくるみ、袖下の縫ひ目を合せて八つ口を紮け、それから裾の折り目から一分五厘程上の方に、衿の時の様に袵を綴ぢ、又、衽の縫ひ目と、脇の縫ひを裏表合せて衿下止りで綴ぢ、衽幅を揃へて折りを附けましたら衿下を紮け附け次に衽先の所は注意して表と裏とを共に綴ぢて、衿幅の標を附け、衿先は一分中を縫ひ裏の方に折り返して衿を紮けます。そうしてから附紐や守縫ひを附けてから疊んでおくのであります。

綿を入れる前に、八つ口と身八つ口を縫ふのもよく又袵綴ぢの仕方は、縫ひ目を一針づゝ返し針にして止め、前幅の間で二針、表は其の倍より一針多く出し、後は裏に五針、表は其の倍より一針多くして綴ぢるのであります。（縫ひ目の針は數に入れません）。

尚一つ身綿入の重ねの時は、上着より下着の寸法を左の様に短くいたします。

袖丈、袖口で四分、袖附で三分。（つまり袖下で一分斜になります）袖附一分、袖幅は上着と同じ身丈一分。後幅一分。（廣げて二分です）前幅二分。衿肩一分。衽幅は衽三分以上ならば一分詰め三分以下ならば上着と同じにいたします。衿下上着と同じ。衿丈三分。（左右で六分）衿幅は同じ衿一分。

○一つ身袖無綿入羽織

○仕立上げ寸法、身丈一尺三四寸。身幅は前後共一杯。衿肩一寸二分。前下り五六分。脇明き六寸以上六寸五分。襠幅裾口で一寸五分以上一寸八分。上の幅五分から一寸。衿幅一寸から一寸二三分。紐附下り肩山から五寸。紐は別布を丸衿けといたします。紐幅五分。長さ六分。

○裁ち方と積り方

並幅で長さ五尺の表地。

裁ち切り寸法、

後身丈一尺八寸。前身丈二尺。衿肩一寸二分の内八分か九分、眞直に切り、殘り三四分で圓く裁ちます。

前幅三寸五分五厘。後幅九寸五分。襠幅三寸五分五厘。襠丈一尺二寸。

裁ち方の圖

積り方

襠丈の積り方　後身丈上り 13. － 脇明 上り寸法 7 ＋ 裏に折り返す分 5 ＝ 12. 裁切寸法

用布　襠丈 前丈を長くする分 50. － 12 － 6. ＝ 7　36. ÷ 2 ＝18.　後丈の裁切 18. ＋ 2　前丈裁切寸法 ＝20

裏地の裁ち方

裁ち方の圖

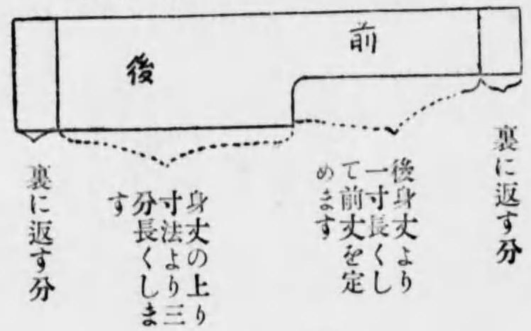
積り方

後身丈上り 13. × 4 ＝52.　52. ＋ 2. ＋ 5. ＋ 前下りと襠巾の二倍 2 ＝56.5　（三つ衿裏代、三つ衿裏代、前下りと襠巾の二倍）

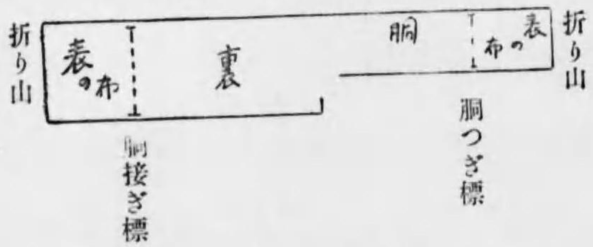
袖丈　裏巻の分尺　56.＋12.＝68.5　表用布　裏袖の用布　68.5－50＝185

○標の附け方

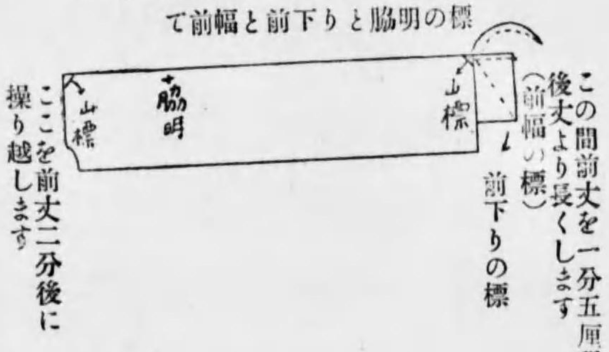
（イ）表　襟



（ロ）表を返して胴裏の方を向けます

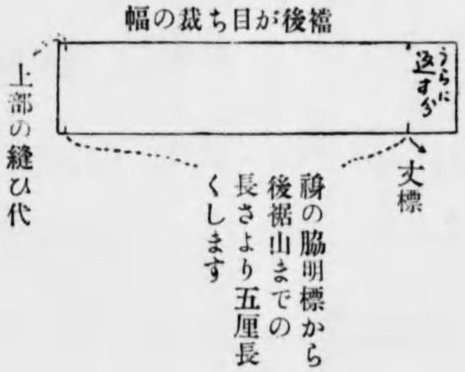


（ハ）前襟の上に後襟を折り返して前幅と前下りと脇明の標

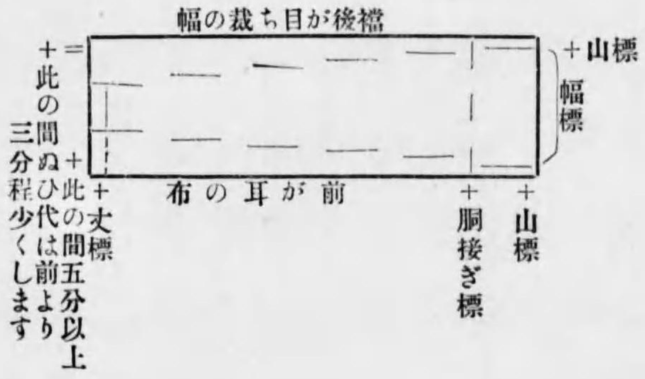


（ニ）

襠



（ホ）　當襠の上に裏襠をおいて胴接ぎ幅と丈の標をします



○縫ひ方の順序

最初に前後の胴接ぎをし、五厘のキセを掛けて胴裏の方に返して躾を掛けましたら前下りを、表は標の所、裏は標より一分か一分五厘縫ひ込み前幅標まで縫ひ、裏襟の方に折り返し、其の糸で針目五分位にし、裏の表に一針小針に出して隠し躾を掛け、それから後幅と肩幅の標を附けます。襠に、裏表接ぎ合せて裏布の方に折り返して躾を掛けそれから後襠を附け、後襟の方に折り返し、前幅標をして前襠を附けるのであります。其の附け方は前下りの所では、前下りの縫ひ込みを縫ひ附けずに離しておきます。前襠を附けた縫ひ目は、前襟の方に返し、次に脇明を縫ふのであります。その縫ひ方は表の裏と裏裏の裏とを合せて、襠丈の上りの所で一針止め、其の糸で脇明の所を、表は標の所を、裏は標を一分縫ひ込む様にして縫ひ裏の方へ折り返し、本綿綿を一寸位に切り、綿幅の中央と脇を縫つた糸とを合せ、其所へ綿を少し緩く綴ぢ附けるのであります。斯うして左右の脇を縫ひましてから双方の縫ひ目を正しくし、鏝を當てましたら裏表とも裏の方を出し、前襠は後襟の間にたゝんでおいて綿を入れるのであります

○綿の入れ方

前の様にたゝんである所へ、表襟の後の裏の上に、綿を身の丈より二三寸長くおき裾口の所は身丈より綿を五分位長くし、殘りは折り返しておき身幅の方は綿の殘りは後幅だけにして裏表の間に折り込

んでおき、次に肩から手を入れ、左右の脇を持つて引き返して表を出し、裏の前襟を上に、表の前襟を下にして布を平に下におき、裏の前襟の裏の上に綿を置き、其の上に表の前襟を引き返して載せまして双方を引き合せて紵けるのであります。

○紵け方

前身裏の衿を附ける所を、裏表の幅を揃へ、躾で縫ひ合せておき、そして紐を揃へ、肩山から五寸下つた所で、裏襟の表の方に縫ひ附けておき、次に衿布の裏の上に衿芯を少し緩く縫ひ附け、衿丈の中央と、衿肩の中央とを揃へ、裏襟の表と衿布の表とを合せて待針を刺し、衿肩から紐附下りまでは衿を一分以上一分五厘程緩くし其所から裾口までは、衿も襟も平にし、襟の縫ひ代を裾口で三分にし、裾口から二寸程上つた所では二分にし、二寸の間は縫ひ代を斜にし、衿は眞直にして衿を附け、衿の方に折り返しましたら衿幅標をし、衿先は一分先を縫ひ、折りは表衿になる方に返し、はじめ衿を附けましたら、縫ひ目の所に、衿先の縫ひ込みを返し針にして縫ひ附けましたら衿を紵け、次に衿に躾を衿先からはじめ、肩山から二寸程下つた所まで掛け、それから前襠の縫ひ目を裏表揃へて布綴ぢいたします。

○肩揚げの仕方。

肩揚は、衿附の縫ひ目から二分程離れた所を縫ふ様にし、其所から五分程、脇に偏つた所を山にし

て、着物の時の樣にするのであります。

三つ身單衣

○仕立上げ寸法

身丈、二尺七寸か八寸位。袖丈は、一尺三寸から一尺六寸まで。袖附は、四寸五分から五寸まで。袖口は袖附と同じ寸法にします。袖幅は七寸内外。身幅は一杯にし、衽幅も一杯にします。衽下りが三寸。相褄幅は二分詰めます。衿幅は一寸で、身八つ口は二寸五分。

○裁ち方と積り方

幅九寸五分、長さ一丈三尺五寸五分の布、

袖丈一尺四寸。袖幅七寸五分。身丈二尺六寸三分。前幅四寸七分五厘。後幅六寸四分五厘。衽幅三寸五分。衿丈四尺五寸。衿幅二寸としての裁ち方。

裁ち方の圖

積り方

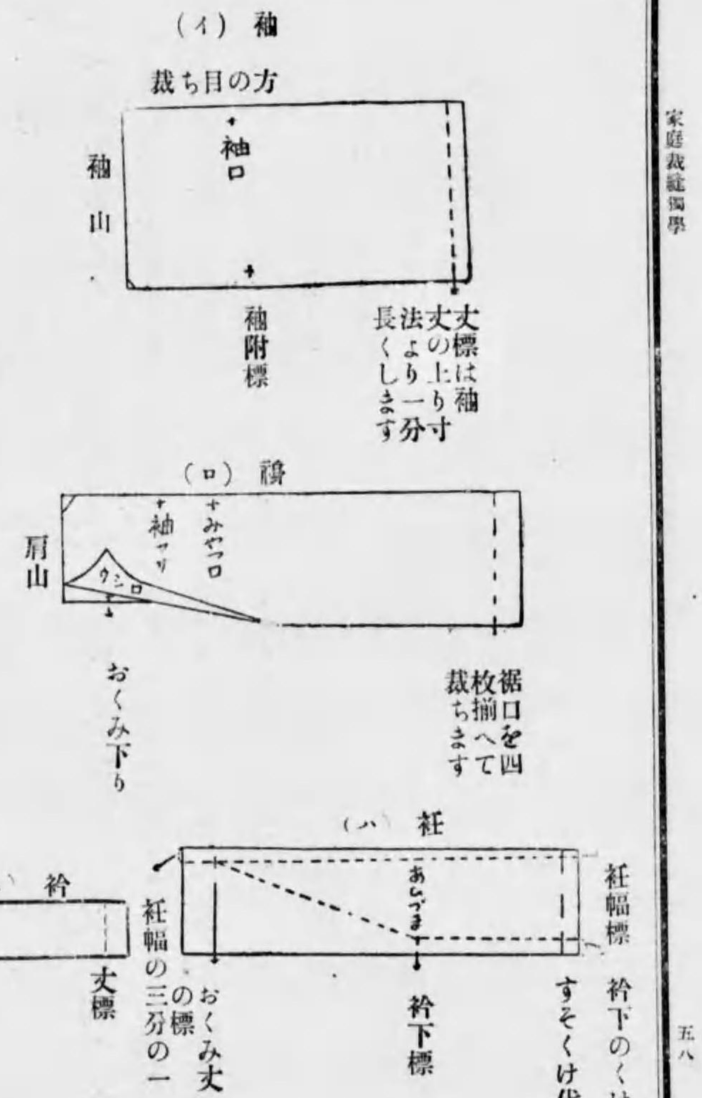
ソデタケ 14. × 4 =56.　ソウ尺 135.5 −53. =79.5

79.5÷3 =身丈 26.3

裁ち方說明

先づ用布の中から袖丈の四倍を取り其の片端から幅二寸を竪に切つて衿とし、廣い方を兩端といたします。殘つた布を三つ折にし、其の折目の所を、一つは自分の向ふから幅の中央まで、一つは手前から向ふに幅の中央まで切り、そうしましてから三つ折にしました中の布を、竪に半幅裁つて前襟とし、次に衿肩を明け、背の端から左右の衽を取るのであります。

○標の附け方



○縫ひ方の順序

袖は、布の表を見て、袖附を右に持つて袖丈の標を合せ待針を刺しておき、袖附と袖口との方に幅を五分づゝ殘して、袖丈標の極く先の方を淺く縫ひ、返して裏を出し、袖附を右に持つて、袖下から袖口の方に縫ひ廻し、次に袖口を細く三つ折にして絎けましたら袖幅の標を附け、そこに折り附けて八口を耳絎けにいたします。

衽は、衿下を三つ折にして衿下の標から、一寸程上つた所まで絎けます、

襟は、はじめ表を見て背を袋縫ひにいたします。

其の他は一つ身と同じであります。

○揚げの仕方

揚げをいたしますには、衿山から裾口の方を、一寸か一寸五分出して、丈を二つに折り、其の中央の所を山として、前の方は二分多くするのが普通であります。

肩揚は、二三才の小供なら、衿附から二分離し、六七才ならば背縫ひから三寸二三分離れた所を山にし、十四五才ならば背縫ひから三寸八分か四寸の所を山とし、十七才は四寸二三分の所を山とするのであります。

○三つ身袷

○裁ち方と積り方

表の裁ち方は、三つ身單衣と同じであります。

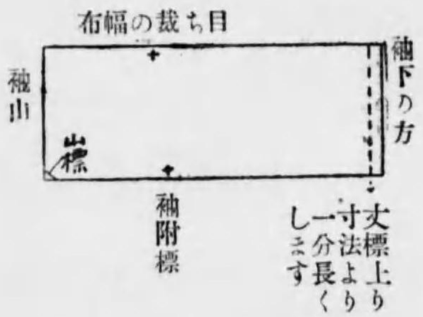
○裏の裁ち方、表の身丈より、袵の二倍たけ長くします外は表と同じでありますが、裾廻し布と胴裏とを別布で仕立てます時は、袵の二倍の外に、胴接ぎの縫ひ代を一寸以上二寸程長くします。其の外に、袖口布は別布で、並幅四つ割の長さ一尺二寸のものが二枚要ります。

袖口布は、裾廻し布の地質に依つて共布を用ひるのもよろしいのです。

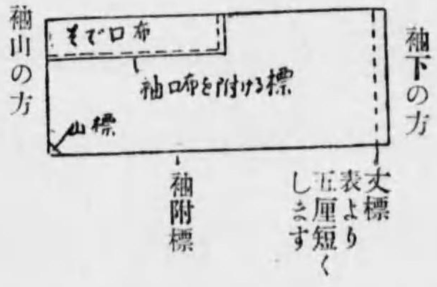
○標の附け方

裏身丈の標を附けます時は、はじめ、裾廻し丈を出來るだけに丈標を附け、それから胴裏の布を裾廻布とを接ぎ合せ、表身丈より出袵の二倍だけ長くなる樣に丈標を附けるのであります。

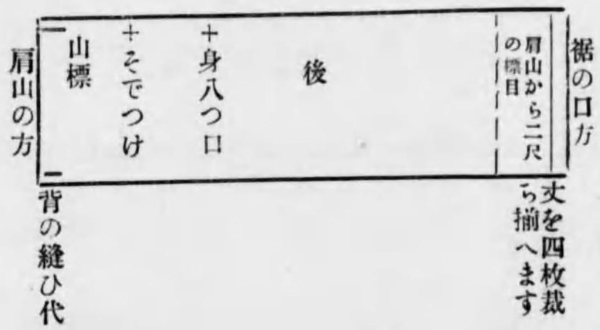
袖表（イ）



袖裏（ロ）



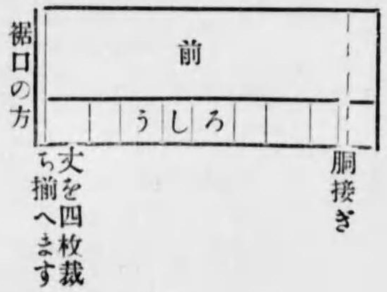
袵表（ハ）



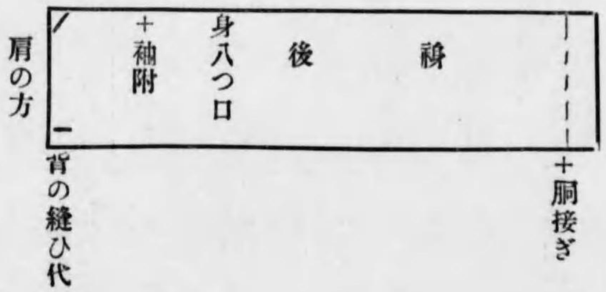
（ニ）前襟の衽下の標を附ける

衽下り

（ホ）裾廻し



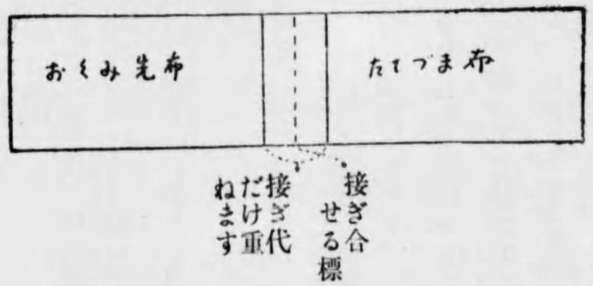
裏胴（ホ）



（ヘ）衽下りの標

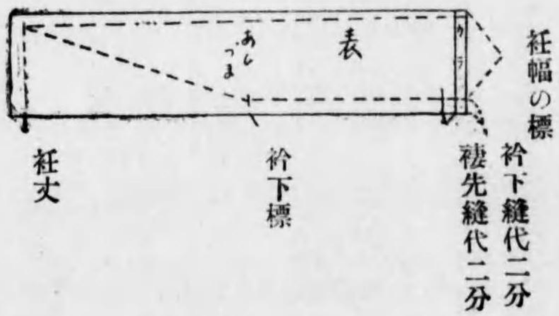
前衽下り

（ト）衽（一）



（チ）衽（二）

裏衽の上に表衽を出袵の二倍短くして重ね四枚一緒にいたします



衿の標の附け方は單衣と同じであります。

○縫ひ方の順序

裏袖に袖口布を掛けましたら裏袖を自分の向ふにし、表袖を自分の方に持ち、口明標を合せ、表と裏を少し緩くし、袖口布を引きつるして待針を刺して縫ひ、表に折り返し、口明の所を持ち、只し持ち方は、(左の袖は裏を自分の方に、右袖は表を自分の方に持ちます)そして四枚共に縫ひ、表の方に折り返し、決の所の縫ひ込みは、初袖下を折りそれから竪を折り、そして是を縫ひ附け、返して縫ひ目を正しくして躾をかけます。

襟は、衿肩を右にして背を縫ひ、自分の方に折り返して下におき、後幅と肩幅の標を附けて脇み縫ひ前襟の方に折り返し、それから前幅と抱幅と其の中程とに標を附けて折りみ附け、衽を揃へて待針を刺し、左右とも裾から衽を附け、折り目は衽の方に返します。

裏襟は、裾廻布と胴裏と別布の時は、布を一枚づゝ胴接ぎし、胴裏の方に折り返して躾を掛け、それから衿肩を右にして背を縫ひ、向ふの方に折り返し、後幅と肩幅の標を附けまして脇を縫ひ、前襟の方に折り返し、次に、前幅と抱幅の標を附けて折を附け、其所に衽を揃へて待針を刺し、左右とも裾から衽を附け、衽の方に折り返しましたら表と裏の裾口の縫ひ目をよく揃へて待針を刺し、縫ひ目毎

に一針返して裾を合せ、折目に一分のキセを掛けます。褄は左右とも隠し躾をかけまして次に袵綴ちを、下前の衽附の縫ひ目から始め、前幅の間で、裏に二針、表五に針、後幅は裏に三針、表に七針出して、縫ひ目毎に一針返へし針にし、糸が引きつらない様にし、それから背を裏と表との間で裾口から肩山まで綴ち、脇の縫込みは、裏表別々に、後襟の縫ひ込みを單衣の様にクセを取り、待針を刺しておき、裾口から身八つ口の止りまで綴ち、脇縫ひの止りまで裏表四枚共に糸止をし、其糸で身八つ口を表と裏と合せて縫ひ、裏に折り返します。袖附は襟の裏と表で袖の裏表を挾み、襟を手前に袖を向ふに持ち、身幅に縫ひ込みのあります時は、縫ひ込みを折つて一分縫ひ代にし、表袖口は縫ひ込みを開き、袖附の初めを四枚共に、極く淺く針を通して糸止し其で五六分の間は、襟を五厘の縫ひ代で返し縫ひし、其所から一方の袖附止りから五六分手前までは一分縫ひ代にし、五六分の間は返し針に縫ひ、袖の方に折り返します。それから裏袖幅に縫ひ込みのある時は、袖を折つて一分縫ひ代に、襟を開き、袖を手前に襟を向ふに持つて、表袖の様に附け、襟の方に折り返し、それから衽の縫ひ目を裏表揃へて、布の間から綴ち、次に衽幅を裏表揃へて折りを附け、表は折目の所を、裏は五厘縫ひ込んで衿下を縫ひ、返して縫ひ目を正しくして一束に躾を掛け、次に衿下止りから衽下りまで、衽の裏表の幅を揃へて綴ち、衿は背から左右に附け下げ、衿の方に返して針目を五分位にして伏せ縫ひをし

衿幅の標を附け、衿先を一分先縫ひ、裏に返し、三つ衿に芯を入れて縫ひ込みに綴ぢ、衿を絎け終つたら疊んでおくのであります。

○三つ身綿入

○裁ち方は三つ身衿と同じであります。唯袵が大きくなりますから表衽に切り下げを附けるのであります。

○標の附け方で三つ身衿と違ふ所。

袖は、衿の時には裏の袖丈を表袖丈より五厘短くしますけれども、綿入は、一分短くいたします。裏袖幅は表袖幅より六分廣くいたしますから、袖口布を縫ひ附ける標をします時は、裏袖幅が六分だけ廣く出來るかどうかを度り、出來ます時は袂の樣にし、出來ません時は、裏袖布幅より先に、袖口布を三分程出して袖口布の標をするのであります。

○縫ひ方の順序

裏袖に袖口布をかけ、（それは、表袖より袖口の所で、幅六分廣くなる樣にかけます）袖附を右にして袖下から口明まで縫ひ口明の所は裏を少し緩め、袖口を少し引きつらして糸止めをします。（口明下から袂の角までは四方の縫ひ代にいたします）そして袖附の方を右に持ち左の袖は自分の方に縫ひ目

を返し、右袖は向ふに返しそれから表袖の裏を見て、袖附の方を右に持ち、袖下から口明まで縫ひ、よく糸止めをし、袖附を右に持つて、左の袖は向ふに、右袖は自分の方に縫ひ目を返して袂の角は單衣の樣に折つて縫ひ附け、左の袖は袖附の方から口明の圍りに躾を掛け、右袖は口明の所から袖附まで躾をかけてそれを下におき、袖幅の標を附け、裏の袖幅は袖口から下を表より一分詰めて標し、袖山の所は表より六分廣く標をし、袖下の縫ひ目を裏表揃へて待針を刺し、袖附標から標まで裏をつり表を緩くして八つ口を縫ひ裏に折り返し、綿を幅一寸位に切つて、綿幅の中央と縫ひ目を揃へ、糸が引きつらない樣に綴ぢ、返して表から躾をかけます。

襟は、先づ表の襟を取り、衿肩を右に持つて背を縫ひ、自分の方に折り返し、後幅と肩幅の標を附けて左右とも後襟を自分の方にして脇縫ひをし前襟の方に返して後襟の縫ひ込みに斜にクセを取り、それを前襟の縫ひ込みに附け、下において前幅と抱幅と其中央に標をつけて折をつけ、其所に衽を揃へ左右とも裾から衽を附け、衽の方に折り返し次に衿を背から附け下げます。只し衽下の邊は衿を少し緩くします。そして折り目は衿の方に返しておき、表衿に裏衿を縫ひ附け、裏衿の方に折り返して躾をかけます。それから裏襟を取り、衿肩を右に持つて背を縫ひましたら向うに折り返し、下において後幅と肩幅の標を附けて折りを附け、脇を縫つて前襟の方に折り返し、表に從つて前幅の標を附け、其處に衽を揃へて待針をし、左右とも裾から、衽を附け衽の方に折り返しましてから表と裏との縫ひ

目を揃へ裾口を二分の縫ひ代に縫ひ、折目に一分のキセを掛けて表に返し、針目を五分位にして裾口と衿下に躾をかけ、褄には隱し躾をかけましたら袷の樣に身八つ口を縫ひ、裏に綿を當てゝ綴り附けます。今度は袖を、裄の裏表で挾み、四枚共に糸止めをし、裄を手前に袖を向ふに持て裄を一分縫ひ代に折り、袖は開いて附け、袖の方に折り返し、裏袖は袖幅に縫ひ込みのあります時は、袖を折つて一分縫ひ代にし、裄は開いて附けましたら折りを裄の方に返し、それから全部の縫ひ目を正しくして夜着疊みにしておくのであります。

○綿の入れ方

先づ裏表共、布の裏を出し、前裄は、裏も表も裄の裏表の間にたゝみ込み布を平に引きのばし表の後裄と袖の裏とに、綿を、幅も丈も二三寸長くおき、袱綿をくるみましたら綿幅の廣い分は、脇の縫ひ目から裏表の後裄の間に折り返しておき、肩山から左右に手を入れて兩脇の袱山を持ち、肩山から布を引き返して前裄の裏を出し、前裄と前幅とに綿を入れ、袱綿をくるんで、裏裄から決に手を入れ、決と袖口とを一緒に持つて引き返し、裾口と表裄の方から手を入れて脇の縫ひ目を持ち、右手で褄先を持つて引き返し、双方をよく引き合せて夜着だゝみにいたします。

○紵け方

先づ裏と表の背縫ひを合せ、三つ衿の所に待針を刺して裄と丈を引き合せ、針目を一寸位にして袖口に袱綿を括り附け、口明の所は、表を少し緩めて、裏と表とを一緒に止め、袱を二分にし針目を二三分位に紵け、其糸で口明下の縫ひ目を、裏表合せて綴ぢましたら、裾袱を定めて、袱綴ぢを袷の樣にし、それから背と脇を一尺程と、衽の縫ひ目を衿先の所まで綴ぢ、表衽と裏衽との幅を合せて、折をつけ、裏の方は衿先の所を、二針綿を括つて衿下を紵け、衿の縫ひ目の所は、裏と表とを一緒に綴ぢて衿幅の標を附け、衿先は一分中を縫つて縫ひ込みのある所は綿を薄くし、縫ひ込みのない所は綿を厚くして衿を紵け、終りましたら、正しくたゝんでおくのです。

○四つ身單衣

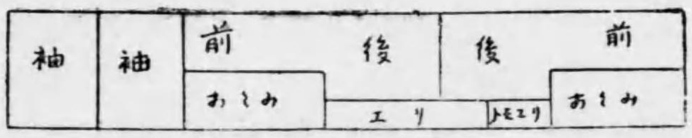
○仕立上げ寸法

袖丈一尺五寸内外、袖口と袖附は五寸内外、袖幅七寸五分内外、身丈三尺内外、身八つ口二寸五分
衽下り三寸五分、衿下八寸、衿幅一寸二分、相褄二分詰　身幅と衽幅は一杯。

○裁ち方と積り方

幅九寸五分の布で、但し袖丈一尺四寸、後幅七寸五分、

裁ち方の圖



前幅、五寸七分。衿肩一寸八分。身丈二尺八寸五分。衿幅一寸。衿丈四尺五寸。衽幅三寸八分。

積り方

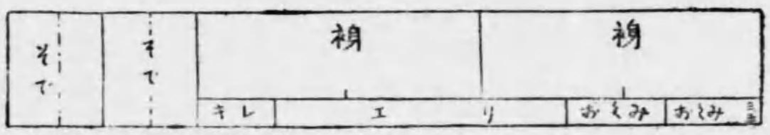
袖丈　身丈
14. ＋28.5 ＝42.5　　425. × 4 ＝170.
用布

裁ち方説明

袖丈の四倍を用布から取り両袖とし、殘りを四つに折つて衿肩を切り其の裾口の方、輪になる方を後とし其所を衿幅だけ、竪に裁つて衿にし、前襟の方へ衿肩から眞直に折を附けて衽といたします

並幅の布で四つ身事裁ちの裁ち方

袖丈一尺四寸。身丈二尺八寸。衿肩一寸七分。衿丈四尺六寸。衿幅三寸五分。衽丈一尺五寸。衽幅三寸五分。として。



積り方

袖丈　身丈
14. ＋28. ＝42.　　42. × 4 ＝168.
用布

幅、九寸五分、長さ一丈八尺の布で四つ身逆衽裁ち方と称り方。

袖丈一尺五寸。後幅七寸五分。前幅六寸五分。衿丈五尺。衿幅二寸。衿肩一寸八分。身丈三尺。衽幅上で三寸、下で三寸八分として。

裁ち方の圖

積り方

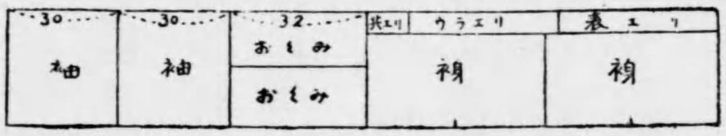
袖丈
15. × 4 ＝60.　　そうバ
180 － 60 ＝120　　120 ÷ 4 ＝30
身丈

並は幅の布で別紙のた裁ち方と積り方、

袖丈一尺五寸、紙丈三尺二寸。紙幅四寸五分、衿丈五尺四寸。衿肩二寸。身幅七寸、衿幅二寸。と

して

裁ち方の圖

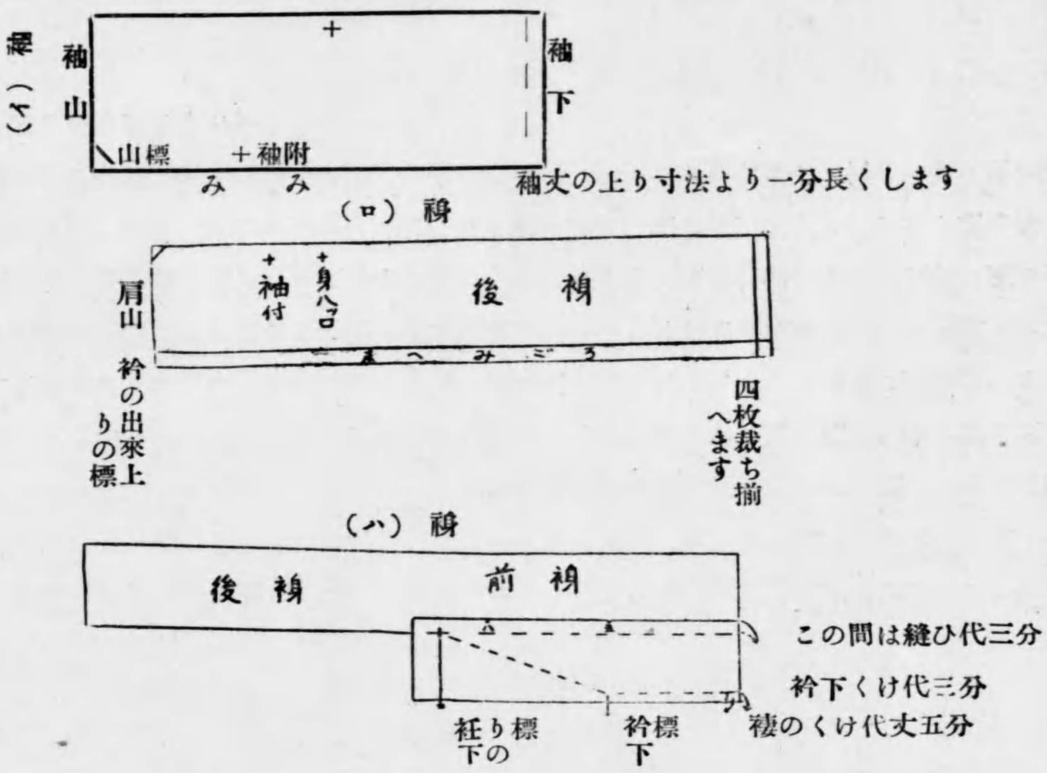


積り方

袖丈
15. × 4 ＝60　　身丈
35. × 5 ＝175.

175. ＋60. ＝235.

○標しの附け方



衿の標の附け方は三つ身と同じであります。

○縫ひ方の順序

袖や背の縫ひ方は、三つ身と同じであります。

そうして後幅と肩幅の標を附けましたら衽幅と標とを合せ、袖口で縫ひ代一分五厘とし、衿下で二分五厘として衽下りの所で四分にして縫ひ、衽の方に折り返し、衿下は、裾口から衿下の標一寸程上まで紮け、そして前幅の標を附けて後幅標と合せ、左右の脇を縫ひ、前襟の方に返し、後襟の縫ひ込みを、後襟の方に折り返し、その折り山を前襟の縫ひ込みだけに抄つて縫ひ附け、脇の縫ひ込みを、上前は裾口から身八つ口の止りまで耳紮けにし、後身八つ口を耳紮けをしましたら下前は、身八つ口の止りから裾口まで綴ぢ後身八つ口を綴ぢて衽の縫ひ込みを、袖口から衽下りの所まで衽に紮け附け、裾口は三つ身の樣に紮けます。今度は袖を附け、袖の方に折り返し、衿を背から左右に附け下げ、衿の方に折り返し、表衿に裏衿を附け、裏衿の方に折り返し、針目を三分位にして伏せ縫ひをし、衿幅の標を附けて衿先は一分先を縫ひ、裏衿の方に折り返し、三つ衿には別布を芯に入れて綴ぢ附け、そして衿を紮けるのであります。

○四つ身袷

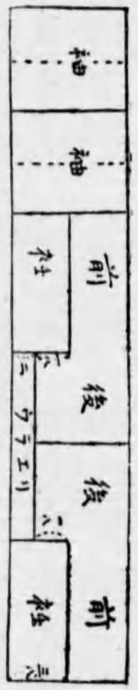
○裁ち方

表の裁ち方は四つ身の單衣と同じです。

○裏の裁ち方、

表の身丈より、袵の二倍だけ長くします外は表と同じですが、裾廻布と胴裏と、別の布を用ひます時は、袵の二倍の外に、胴接ぎの縫ひ代を二寸程長くいたします。又裾廻は、横布を用ひる事もあります。

裁ち方の圖



積り方

4｛(表身丈－裾廻高)＋4出袵＋胴接ぎ代｝＋4袖丈

＝胴裏と袖の用布

裁ち方の説明

用布から先づ表袖丈と同じ長さのものを四倍取り丈を二つに切つて左右の袖とし、後の布を中表にして二つに折り、丈を二つに折り、布丈の殘らず輪の所に衽幅を三寸八分切り込み、其所で、幅三寸八分の切り止りから手前に衿肩を一寸八分とし、殘り幅二寸は布丈の輪の方を、裾口まで眞直に裁ち落し、幅二寸の布は裏衿にし、一幅の方を前襟に、幅を裁ち落した方を後襟といたします。

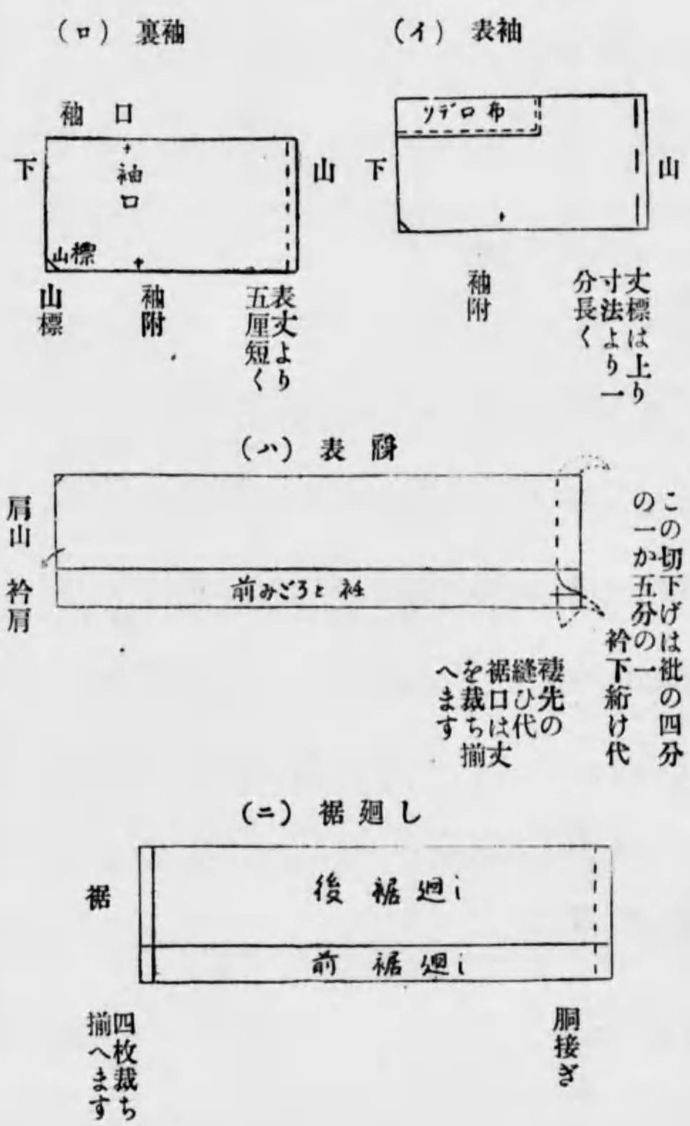
裁ち方の圖

（常幅の布で横布裾廻裁ち方）

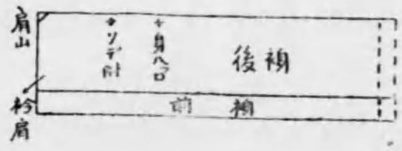
横布の裾廻を裁ちますには、前、後、衽を裁ち切らずに背、脇、衽の縫ひ目を附け一枚の布を用ひるのであります。

積り方は、並幅の時は、前後の幅と衽幅上り寸法とに、背、脇、衽の縫ひ代を加へ、之を二倍したものを裾廻の用布といたします。

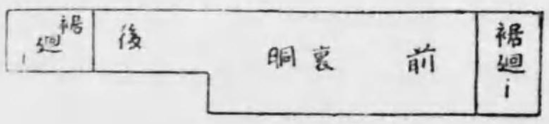
○標の附け方



（ホ）胴裏



（ヘ）胴裏（胴裏と裾を接ぎ合せた所）



裾廻しと接ぎ合せる標

（ト）表袖をの袱二倍だけ短くして裏袖の上にのせて四枚共に標を附けます

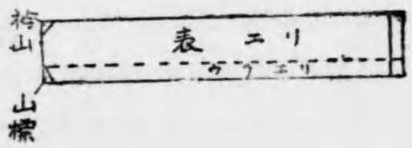
衿下りの標

相袖で袵幅を二分詰めます

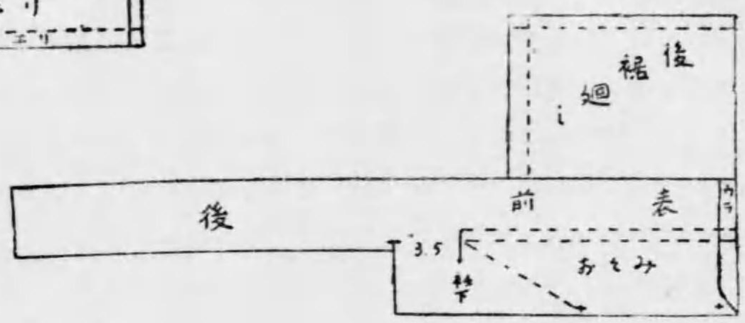
衿下標

縫ひ代三分

（チ）衿



（リ）裾廻しが横布の時の袵



背の縫ひ代

○縫ひ方の順序

最初に袖口布をかけて三つ身の様に、左右の袖を縫ひましたら表袖を出し、衿肩を右に持つて背を縫ひ、自分の方に折り返し、次に背縫ひを左にして布を下におき後幅と肩幅の標を附け、其所に折を附けておきます。

それから前袖の標と標を合せて縫ひ、袵の方に折り返し、袵を左に持つて布を下におき、前幅標を附けて折りを附け、後幅標と、前幅標とを合せて左右の脇を縫ひ、前袖の方に折り、脇縫ひに縫ひ込みのあります時は、後袖の縫ひ込みだけを開いて後の方に返します。次は裏袖を出し前後の胴裾をし

て胴裏の方に折り返し、表から二目落しの躾をかけましてから衿肩を右に持つて背を縫ひ、向ふに返して後幅と肩幅の標を附けましてそれから表の様に衽を縫つて衽の方に折返し、左右の脇を縫つて前襟の方に折返し、脇の縫ひ込みは、表の通りに折ります。

そして裏表の縫ひ目を良合せ、裾口を二分縫代にして待針を刺して裾口を縫ひ衽の所は裏衽を自分の方にして褄を縫ひ、一分のキセを掛けて表の方に折を附け、衽の所だけに針目を五分に隠し躾をかけます。その他は表から躾を掛け、それから袵を定めて三つ身の様に袵綴ぢをし、終つたら裏と表の間から手を入れて背を綴ぢ次に、脇を綴ぢましたら身八つ口の所を四枚共に糸止めをいたしまして一方は、其の糸を切らずに、袖附の所まで裏表合せて縫つて裏の方に折り返します。今度は袖を出して袖山と襟の山とを合せて待針を刺しましたら、袖附の所は四枚共に浅く針を通して糸止めをしてから表袖を附け、袖の方に折り返し、次に裏袖を附けて襟の方に折り返します。衽は裏表の縫ひ目を合せて布の間で綴ぢ、裏表の衽幅を揃へて衿下の所に折を附け、其所の表は標の所、裏は標より五厘縫ひ込む様にして衿下を縫ひましたら引返して表を出し、折を附けて二枚共に躾をかけ、衿を附けます所を裏表の衽幅を良く揃へて、躾糸で綴ぢておきまして、背縫ひから左右に衿を附け下げて衿の方に折り返し、表衿に裏衿を附けて裏衿の方に返して躾をかけ、衿幅の標を附けて折を附けましたら、衿先を一分先縫ひ、裏に折り返して、三つ衿には別布の芯を入れて衿附をし、終つてから是をたゝんで押しをおくのであります。

四つ身は、そら衽ですから衽は袷でも四つ縫ひにする事が出來ません。それから裾廻が横布の時は裾廻の背と脇と衽を縫ひ、胴裏の背と衽と脇を縫ひましたのちに胴接ぎをして躾をかけるのであります。

○四つ身綿入

○裁ち方は四つ身袷と同じであります。

○標の附け方は、出袵が袷より多く、丈が表より一分短くいたしますだけで外は袷と同じであります

○縫ひ方は、袖は三つ身の時と同じで襟は四つ身袷と同じであります。

○綿の入れ方は　表の身頃丈に　表衿を縫ひ附け、綿を入れましてから三つ身綿入の様にいたします

○四つ身綿入羽織

○仕立上げ寸法

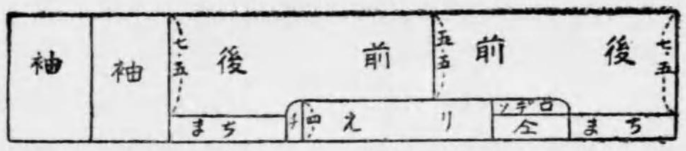
袖丈、着物より三分長くいたします。袖幅は着物より二三分廣く。袖口は着物と同じ。袖附は着物より一分多く、身丈、二尺内外。衿肩、着物より一分大きく。後幅、六寸五分、前幅四寸五分、衿

幅、一寸三分から一寸五分。襟幅には裾口で一寸六分で、上の幅が五分か六分。前下りに七八分。紐附下りは肩山から六寸以上六寸五分位下つた所。

○裁ち方と積り方

並幅で、長さ、一丈八尺の布での裁ち方

裁ち方圖



積り方

袖丈裁切　16.5×4＝66.　そう尺　180.－66.＝114.

前後の差　5×2＝10.　144.－10＝104　104.÷4＝26.　後身丈　前後の差前丈　26.＋5.＝31.

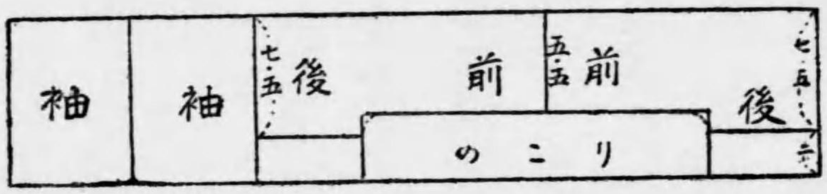
裁ち切り寸法

袖丈一尺六寸五分、袖幅九寸五分。後身丈二尺六寸、前身丈三尺一寸。後幅七寸五分。前幅五寸五分衿肩二寸、襟幅二寸　襟丈二尺六寸、衿幅四寸。衿丈は身丈上り寸法より四寸長いものの二倍。袖口

布幅、二寸。同く丈一尺三寸。紐附布丈五分。

○裏の裁ち方

裁ち方の圖



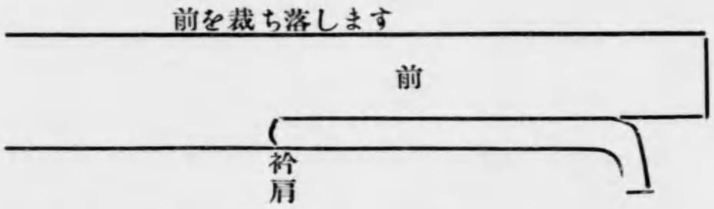
積り方

袖丈上り　16.×8＝128.　身丈上り　22.×8＝176.

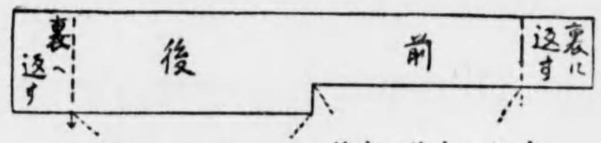
そう縫代　裏表の合尺　表用布　裏用布　128.＋176.＋142＝318.2　318.2－180.＝138.2

○標の附け方

（イ）



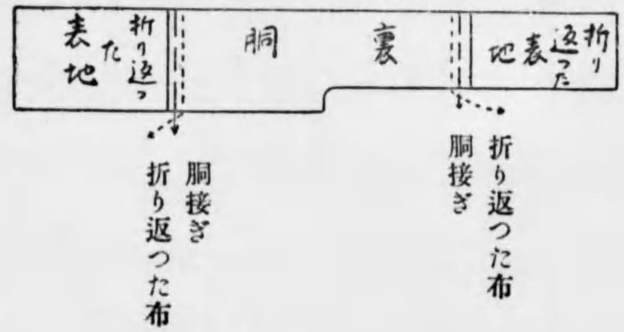
（イ）褥



丈此所は丈の上り寸
標法より三分長く

前丈は後丈より丈
前下りと裾口縫標
ひ代の一分と肩山の操り越し
四分だけを長くします

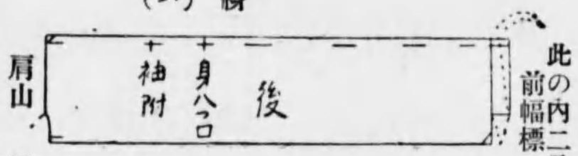
（ロ）褥 折り返しを返して上に胴裏をのせた所



胴接ぎ
折り返つた布

胴接ぎ
折り返つた布

（ハ）褥

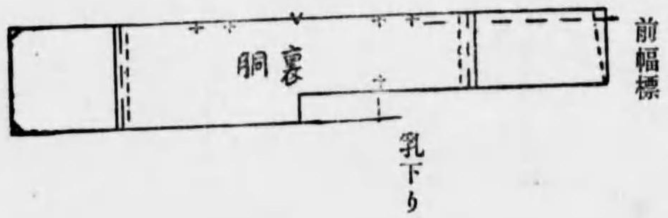


肩山
二分操越し

前下り

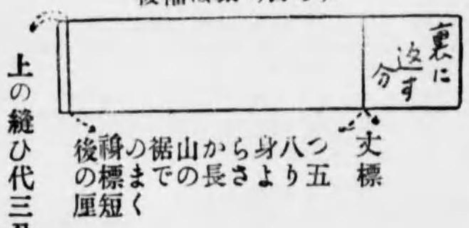
此の内二分長くします
前幅標

（ニ）褥 前幅と乳下りの標



（ホ）襠

後襠は裁ち目の方



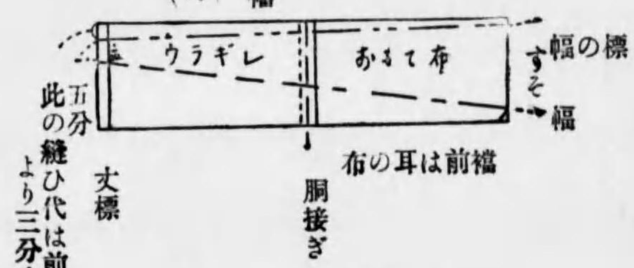
上の縫ひ代三分

後褥の標短厘

裾のまくれ山の長さ身八つ口より五

丈標

（ヘ）襠



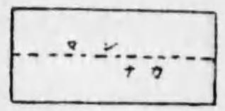
五分
此の縫ひ代は前より三分少く

丈標

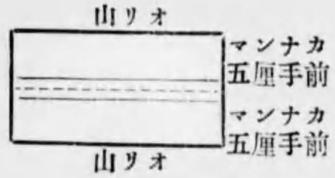
胴接ぎ

襠前は耳の布

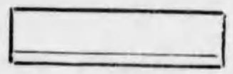
（イ）



（ロ）



（ハ）



折り山と折り山の合つた所

（ニ）

（ホ）

この折り方は女物の時は右手になり男物のは左になります

（ヘ）

この折り方は女物の時は左にし男物の時は右になります

袖の標附けは、綿入着物と同じです。衿は丈も幅も附けません。

○縫ひ方の順序

袖は綿入着物と同じであります。

先づ前後左右共胴接ぎをして胴裏の方に折り返し、躾をかけましたら前下りを一つ身の袖無羽織の様に縫つて隠し躾をかけます。それから後襟の胴接ぎの縫ひ目をよく揃へて待針を刺し、表襟の衿肩を右に持つて、胴接ぎ縫ひ目の所で一針糸止めをしてから背を裏表共縫ひ、手前に折り返し、それを下において後幅と肩幅の標を附けます。今度は襠布を裏表縫ひ合せて裏襠の方に折り返し、躾をかけ、襠標の少し斜になつてゐる方が後襠ですから、此所を後襟の裏表に縫ひ附けて後襟の方に折り返し、次に前襠を前襟に附けて襟の方に折り返します。

只　前下りの縫ひ込は縫ひ附けません。

それから綿入の着物の様に身八つ口を縫つて綿を綴ぢましてから袖を附け、終りましたら布の裏を出してたゝんでおくのです。

○綿の入れ方

綿の入れ方は　袖綿を入れないだけで外は綿入着物と同じであります。

○絎け方

まづ袖口明を綿入着物の様に縫けてから口明下の縫ひ目を綴ち合せ、それから前襠の衿の附さます所を裏表綴ち合はせましたら乳の布を圖の様な順序に折りまして是を裏襠の表で、乳下りの所に縫ひ附けます。次に衿幅標をして衿先を縫ひましたら衿縫けをし、縫け終へたら鞁をかけます。それから前襠の縫ひ目を裏表綴ち合はせ、背縫ひを裏表揃へて丈の中央から裾口まで堅綴ちいたします。

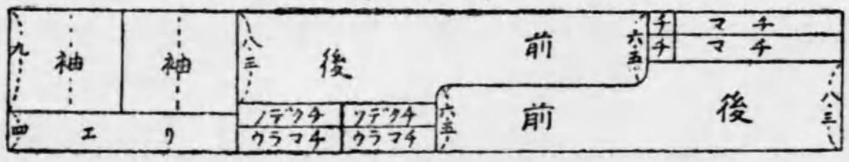
○肩揚げの仕方は、着物と同じであります。

中幅の兩面物での四つ身綿入羽織の裁ち方

裁ち切り寸法

袖丈、一尺六寸。袖幅、九寸。袖口布幅、二寸三分五厘。後身丈、二尺七寸。前身丈、三尺一寸。後幅、八寸三分。前幅、六寸五分。衿肩、一寸八分。袖口布丈、一尺三寸五分。紐附布丈、五分。同じく幅、二寸三分。襠丈、二尺七寸。襠幅、二寸三分五厘。

裁ち方の圖



積り方

袖丈裁切　後身丈上り　裏に返す分　後身丈裁切り
16. × 4 = 64.　20, +　7.　= 27.

後丈より前丈を長くする分
27. × 3 = 81.　81. + 4 = 85.

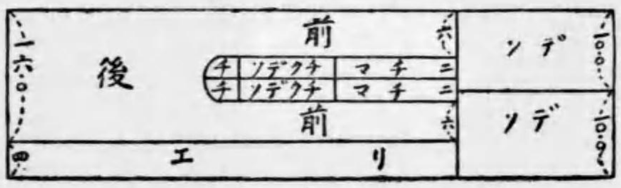
用布
64 + 85. = 149

幅二尺、長さ九尺五寸の布での裁ち方

裁ち切り寸法

袖丈、一尺七寸。袖幅、一尺。後身丈、二尺七寸五分。前身丈、三尺三寸五分。後幅、八寸。前幅、六寸。衿肩、二寸。衿幅、四寸。衿丈、六尺一寸。襠幅、二寸。袖口布幅、二寸。袖口布丈、一尺四寸。襠丈、一尺六寸。紐附布丈、五分。

裁ち方の圖



積り方

袖丈裁切 17.×2＝34.　そう尺 95.－34.＝61.

前を長くする分 61.－6＝55.　55.÷2＝27.5　後身丈

前を長くする分 27.5＋6.＝33.5　前身丈

○裏の裁ち方

裁ち方の圖

積り方

身丈上り 6.5×4＝66.　後身丈 20.×4＝80

66.＋80.＋7.2＝153.2　そう裁代 裏表の合尺

153.2－95＝58.2　裏地用法

○本裁女單衣

○仕立上げ寸法

袖丈、一尺五寸内外。袖幅、八寸五分。袖口、六寸五分。袖附、七寸内外　袖形、五六分。身丈、四尺内外。後幅、七寸五分。前幅六寸。抱、五寸三分。衿肩、二寸三分。繭、一尺六寸五分。衽下り、六寸。衽幅、四寸。相褄、三寸五分。衿幅、三寸。衿下、二尺内外。

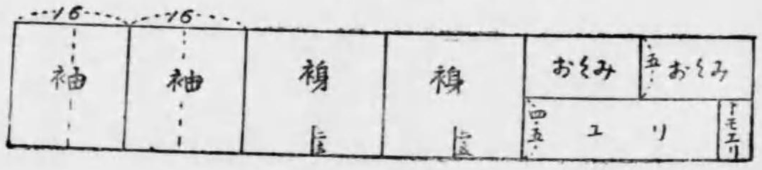
○裁ち方と積り方

裁ち方説明（棒衽）

先づ袖丈の四倍を取り、丈を二つに切つて左右の袖とし、次に衿衽共に取り、片端から幅五寸を竪に切つて落し、是を二つに切つて左右の衽とし、後の布を、衿と共衿にいたします。袖と衿衽とを取りました殘りの布を中表にして丈を四つに折り衿肩を明けて襟といたします。

外に、肩當が、晒木綿で二尺五寸と、尻當が一尺か一尺一寸と、裏衿の分として半幅で四尺八寸とを要します。肩當を裁ちますには、二尺五寸の布を中表にして丈を二つに折つて後にします方の丈を一寸長くしてこれを二つに折り、布全體が輪になつてゐる所に衿肩を明けるのであります

裁ち方の圖



積り方

（總尺－4袖丈＋2衽下り）÷6＝身丈

2身丈－2衽下り＝衽衿地

衿衽地÷2＝衽丈

袖丈
16. ×4＝64　　そう尺 290. －64. ＝226.

おくみ下り
55×2＝11.　　22'6＋11. ＝237　　237. ÷6＝丈丈 39. 5

39. 5×2＝79　　79. －11. ＝衿衽地 68.　　68. ÷2＝おくみ丈 34.

並幅の二丈七尺の布で約衽の裁ち方

袖丈、一尺五寸五分。衿肩、二寸五分。衿丈、四尺八寸。衿下二尺二寸。衽下り、五寸。衽丈、三尺三寸二分として

裁ち方の圖

積り方

そで丈
15. 5×4＝62　　そう尺 270. －62. ＝208.

208. －えり下 22. ＝186.　　186. ＋えり下 5 ＝191

191. ÷5＝身丈 38. 2　　382. ＋えり下 22＝60. 2

60. 2－えり下 5. ＝衿衽地 55. 2　　55. 2－22. ＝おくみ丈 33. 2

積り方の説明

袖丈の四倍を總尺から引いて、其殘りから褄下の二尺二寸を引き、引いたものに衽下りの五寸を加へてこれを五で割れば身丈が出來ます。此身丈に、衿下の二尺二寸を加へて衽下の五寸を引けば、衿衽地が出來ます。衿衽地から衿下を引けば衽丈が出來ます。

衽先接ぎに裁ち、（棒衽）

並幅、二丈七尺五寸の布で、袖丈一尺六寸、衽下り五寸、衿肩二寸五分、衽丈三尺三寸四分として裁ち方の圖

そで丈 16・×4＝64　そう尺 275.－64.＝211.　えり丈の半分 211.－24.＝187.

おくみ下り 187.＋5.＝192.　192.÷5＝38.4　身丈 38.4＋24.＝62.4

おくみ下り 62.4－5＝57.4　衿筵地 身丈 38.4－5＝334

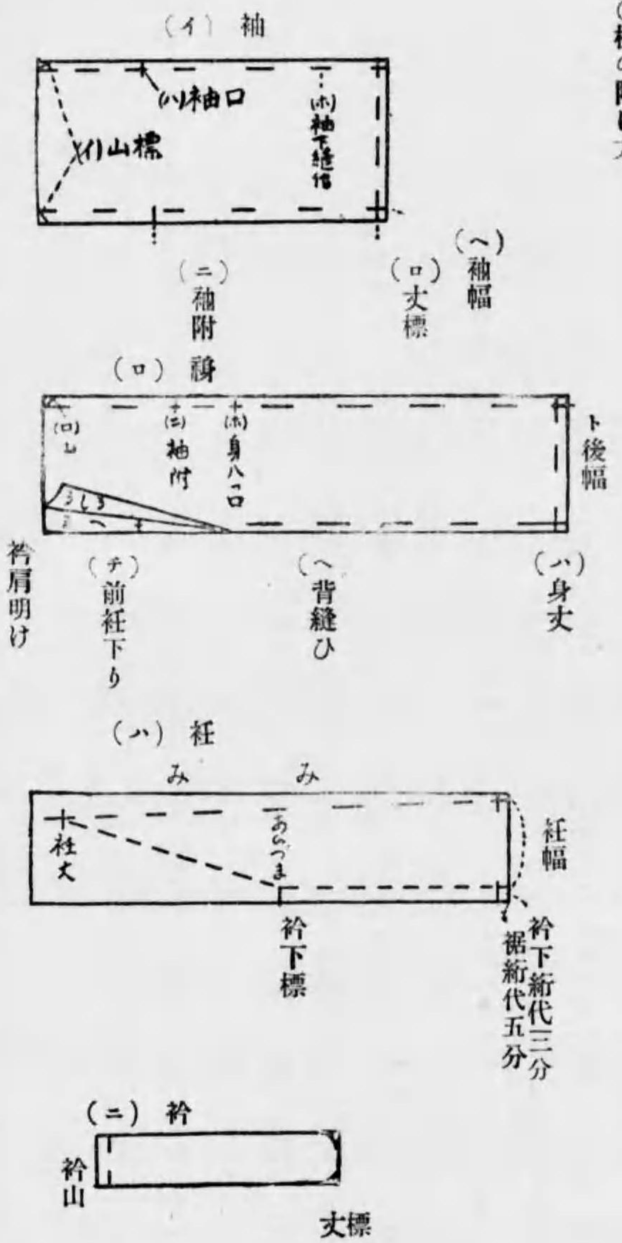
衿筵地 おくみ下り 57.4－33.4＝24.　衿筵地 衿丈 57.4　下前下り 衿丈の足布 48.＝9.4

裁ち方の説明

二丈七尺五寸の中から、六尺四寸切つて兩袖とし、次に一丈五尺三寸六分を切つて襟とし、殘つた五尺七寸四分の片端から、幅を、四寸五分竪に裁ち落して、衿丈を四尺八寸切りまして、其の殘りを下前の衽先に接ぎ、殘りました幅五寸長さ五尺七寸四分の中から、丈三尺三寸四分を取りまして上前の衽とし、殘りの二尺四寸を下前の衽といたします。

女物の衿丈は、身丈が四尺以下の時には、普通四尺八寸に見積りまして、四尺以上の時は、五尺と見積れば足りるのであります。

○標の附け方



裏衿の丈は表の衿丈と同じであります。

○縫ひ方の順序

まづ袖の表を出して、袖丈の標と標とをよく合せて待針を刺し、左右の端を幅五六分だけ殘して、袖丈の端を淺く縫ましたら裏返して裏を出し、袖附を右持ち、袖丈標の所を縫ひ、袂の所には形を當てゝ標を附けて袖口明の所まで縫ひましたら其所で糸止めをしてその糸を切らないでおいて袖口明の所を細く三つ折綴けをいたします。其の仕方は、針目を三分か四分位にして、表に小針を一針出して綴けます。袖形は五つから七つ位襞を取り、袖附を右に持つて左の袖口は向うに折りを附け右袖は手前に返し、裏返して表を出し、縫ひ目を正しくして袖幅の標を附けて折を附け、そして袖幅標から五分離れた所から裏に二針、表に一針出して、針目を五分位にして耳綴けにします。

衽は衿下を三つ折にし針目を三四分位にして、衿下の標から一寸程上まで綴けます。

肩當布は、前後の端を二つ折にして縫ひましたら今度は襟を出し、衿肩を右に持つて肩當布を自分の向ふに當て、衿肩の出來上り寸法の所を縫ひ、其の先を今一度縫つて手前に折り返しましたら背縫ひを左に持ち、布を平に下に置いて後幅と肩幅の標を附け、そして折を附け、次に肩當を綴ぢます。それから尻當を裾口から九寸か一尺位上げて附けましたら、前後の脇を揃へて左右の脇を縫ひ縫ひ目は前襟の方に返し、後襟の縫ひ込みと脇縫ひの丈の中程まで後の方に開いて前襟の縫ひ込みに綴ぢましてから身八つ口の所から裾口まで、脇の縫ひ込を、針目一寸位にして耳綴けをいたします。次に前幅と抱幅と其の中程と標を附けて其所に折を附け、それから衽を出して襟に附く所に折をつけましてから前幅の標と合せて待針を刺し、左右とも裾口から縫ひはじめて衽下りの所まで縫ひ、衽の方に折り返して縫ひ込みを綴ぢ附けます。（但し、衿を附ける時、襟の縫ひ込みの隱れる所まで綴ぢます）

次に、裾口を二分五厘づゝ、三つ折にし、褄先の所は斜に折りまして其の眞中に一針出し、衿下の折り目の所にも一針出して、それから針目を三四分位にして縫ひ目毎に一針返し、糸止めをして綴け、そして袖を附けるのであります。袖附は、肩幅は出來上り寸法より一分廣くして折を附け、肩山と袖山とを合せて待針を刺し、襟で袖を挾みまして袖附のはじめと終りとは、襟を極く淺く糸止めし、二針か三針返し針にして縫ひ、あとは一分の縫ひ代で細かに縫ひ、袖の方に折り返します。それから裏表の衿を出し、衿丈の眞中と背縫ひとを合せて、裏表の衿で襟を挾み、左肩右に縫ひ下げて衿先は表衿と衽と、裏衿と二枚共に極く淺く針を通して糸止めをしましたら其の糸で、一分先を縫ひ、裏衿の方に返して、はじめ衿を附けました糸の所に、衿先の縫ひ込みを縫ひ附け、次に表の衿幅三寸、裏衿幅二寸九分に標を附け、そして其所に折を附け、前襟の衿の中の縫ひ込みを斜によく引き伸ばして、三つ衿の所には別布の芯を入れて綴ぢ、衿先の縫ひ込みは裏衿の方にくるみ上

の縫ひ込みは表衿の方にくるんで、衿先は褄の形にし、針目を一分か二分位にして絎け、次に糸を四本捻りまして、背縫ひの所で表に針目の出ない樣に、そして針目を二分位に一針通し衿丈の眞中に一針通し、糸を四寸位に切つて結んでおきまして次に左右の三つ衿の角にも前の樣に糸を附けておくのであります。此の糸は。着ます時に。其の糸を引き締めて結び、衿幅を二つ折とするのであります。

○本裁男單衣

○仕立上げ寸法

袖丈、一尺四寸。袖幅、九寸。袖口、八寸。袖附人形ならば一尺二寸。袖形、五分か六分。身丈、三尺六寸五分。衿、一尺七寸五分。後幅、八寸。前幅、六寸五分。抱幅、六寸。衽下り、五寸。衽幅、四寸。相褄、三寸五分。衿肩、二寸一分。衿幅、一寸六分。衿下、一尺七寸五分。

○裁ち方と積り方

並幅で、長さ二丈七尺五寸の布。棒衽の裁ち方。

袖丈、一尺四寸。衿肩、二寸三分。衿丈、四尺八寸。衽丈、三尺三寸五分として。

裁ち方の圖

積り方

（總尺－4袖丈＋2衽下）÷6＝身丈　2身丈－2衽下＝衿衽地

14. ×4＝56.　275. －56. ＝219.　衽下り 4.5×2＝9.

219. ＋9. ＝228.　228. ÷6＝38.　38. ×2＝76

76. －9＝67.　67. ÷2＝33.5 身丈

積り方の説明

總尺から袖丈の四倍五尺八寸を引き、其の殘りに衽下り二倍を加へて、是を六で割りますと身丈が出來、此の身丈を二倍して、衽下りの二倍を引きますれば衿衽地が出來ます。そしてこれを二で割りますと衽丈が出來るのであります。

裁ち方説明

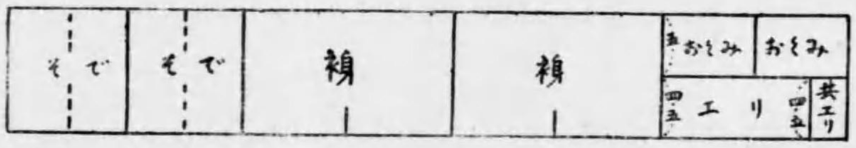
先づ袖丈の四倍を取り、その丈を二つに切つて左右の袖とし、次に衽丈の二倍つまり六尺七寸を取

つて片端から幅五寸を竪に裁ち落してその丈を二つに切つて左右の衽とし、殘りの幅四寸五分の布を衿とし、あとの布を中表にして丈を二つに折り、又丈を二つに折つてその丈の輪の方に、衿肩二寸三分明けて縫ふといたします。

浴衣は幅で長さ二丈七尺五寸の布、鉤衽の裁ち方。

袖丈、一尺四寸五分。衿肩、二寸三分。衿下、二尺。衽丈、三尺七寸。衿丈、四尺八寸。衽下り、三寸として。

裁ち方の圖



積り方

そで丈
14.5×4＝58.　そう尺 275.－58.＝21.7　えり下 217.－20.＝197.

えり下
197.＋3.＝200.　みたけ 200.÷5＝40.　みたけ 衿丈 40.＋20.＝60

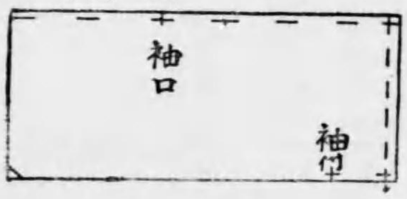
おくみ下り　えりおくみ
60.－3.＝57.

積り方說明

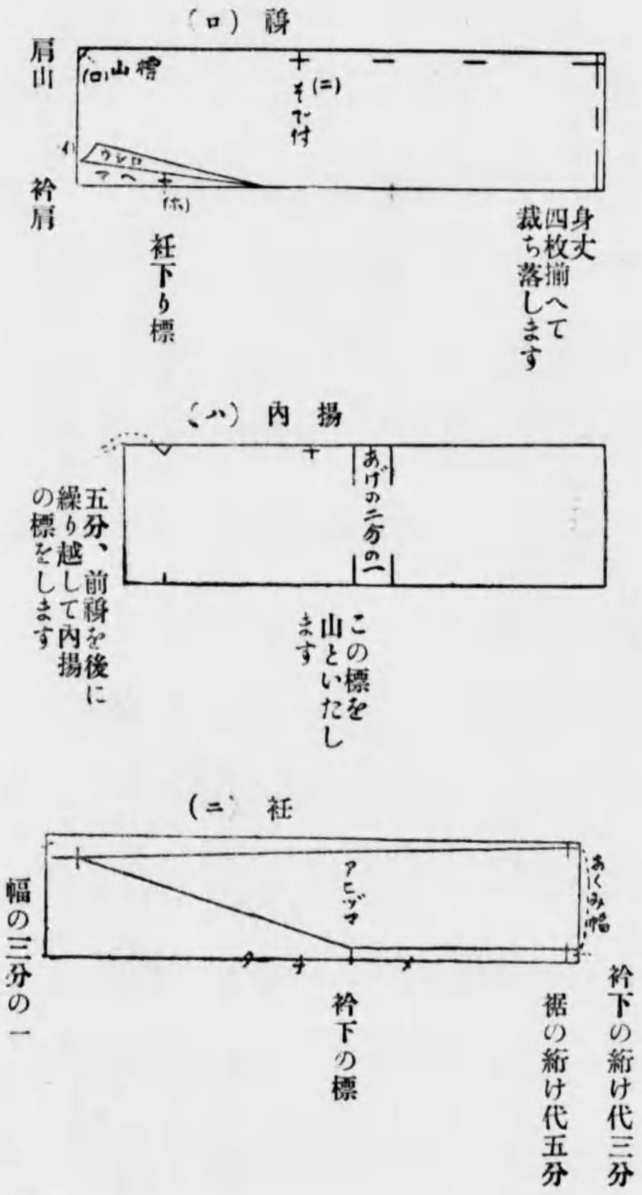
總尺から袖丈の四倍、つまり五尺八寸を取りますと二丈一尺七寸となります。その中から衿下の二尺を引きますと一丈九尺九寸となり、これに衽下りの三寸を加へますと二丈となります。そしてこれを五で割りますと四尺となりつまり身丈であります。それに衿下の二尺を加へますと六尺となり此の中から衽下りの三寸を引きまして五尺七寸となり、これを衿衽地といたします。肩當、裏當、尻當、は別布を用ひ、その寸法は女物と同じであります。

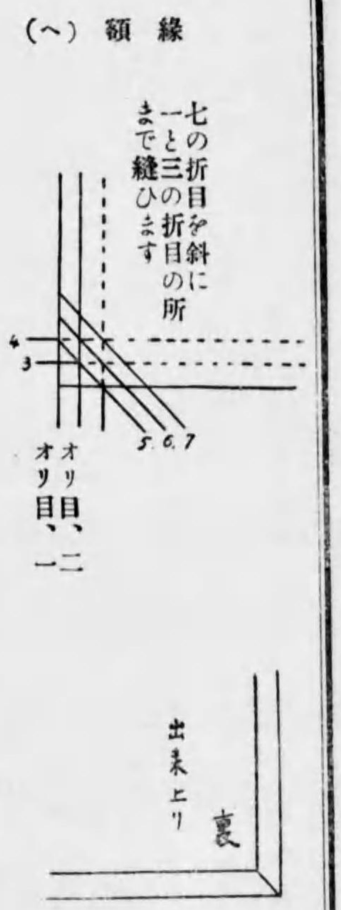
○標しの附け方

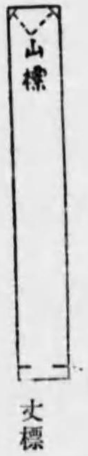
（イ）袖



丈標は上り寸法より一分長く







○縫ひ方の順序

先づ袖は、表を見て、袖丈の標に拘はらずに、左右の端を五六分殘して淺く縫ひまして裏返し、裏を出して袖附を右に持ち、袖丈標の所から袖口明の所まで縫ひまして糸止めをし、其の糸を切らずにおいて、袖口明を細く三つ折にし、針目を三分か四分位にして表に小針に出して繕けましたら袖幅の標を附けて人形を縫ひまして袖形に襞を取ります。襞を取りますには、袖附を右に持つて、圓く縫ひました角の所から始めて、五つか七つ位襞を取りましたら袖附を右にして、左の袖は向ふに

右袖は手前に返し、人形の角は、横を先に折りましてそれを人形の縦の縫ひ目に縫ひ附け、それから堅を折つて今度はそれを横の縫ひ込みに縫ひ附け裏返して裏を出し、正しく疊んでおきます。

次に衽は、衿下を三つ折にして針目を三分か四分位にし、表に小針に出して衿下標から一寸程上まで紡けます。次に肩當を出し、裁ち目の所を二つ折にして縫ひまして、次に襟は、衿肩を右に持つて肩當を自分の向うに、襟を手前にして、衿肩の上り標の所から縫ひましたら最一度一分程はなれた所を縫つて二度縫ひし、手前に折り返しましたら、背縫ひを左にして、それを平に下におき、後幅と肩幅の標をしまして、そして内揚を縫ふのであります。内揚を縫ひますには、裾口の方の標を山とし袖附から一寸下つた所を、後幅の標から標まで縫ひまして裾口の方に折り返し、それから尻當を附けます。尻當は、尻當の裾にいたします方を二つ折りにして縫ひ、上の方は端が内揚げの下に縫ひ代だけ入る樣にし、尻當の眞中と背の始の縫ひ代と合せ針目を五分位に、尻當の表に小針に一針出して綴ぢ附け、そして左右の端は耳紡けにし、上の方は尻當の幅だけ、揚と一緒に紡け附け下の方は其のまゝにしておきます。それから前襟の内揚を縫つて裾の方に返し、左右の脇を、後襟を見て縫ひ、前襟の方に折り返し、その糸は切らずにおいて袖を附けるのであります。袖は。肩幅の標から縫ひ代だけ、幅を一分廣　折り出しまして、襟で袖を挾み、極く淺く四枚共に糸止めをして、はじめと終の五六分の間は、襟を五厘の縫ひ代にして返し縫ひし、あとは一分の縫ひ代として襟は手前、袖は向うに持つて附け終へましたら袖の方に折り込します、一方の袖も同じ方法で附けます。

肩當は、表に一針、裏に二針出して襟に綴ぢ附け、次に、袖附から内揚の所までは幅を一分交へて二度縫ひをし、其の縫ひ込みは、左右に開き、内揚から下は、縫ひ込みを二枚共に前襟に綴ぢ附けます。それから前幅と抱幅と其中頃とに標を附けて折りを附け、衽の襟に附く方にも折りを附けて前幅の標を合せて待針を刺し、左右とも裾口から縫ひ上げまして衽の方に折り返し、縫ひ込みの端は折つて裾口から衿下止めの四五寸上の所まで衽に紡け附け、衽先の所は襟と共に衽を綴ぢ、裾口は二分五厘づゝ三つ折にし、褄先の所は斜に折り、紡け附けます時は、はじめ斜の丈の眞中に一針かけて表に出し、それから斜に折つて角の所に一針かけて、あとは針目を三四分位にし、縫ひ目毎に一針返し針をして紡けます。次に裏表の衿で襟を挾み上前は表衿を自分の方に、裏衿は向ふに持つて、背縫ひから附け下げ、下前は裏衿を自分の方に、表衿を向うに持つて衿を附け、背縫ひから衽下りまでは衿を少し緩くし、衿肩の角の所では、襟を淺く縫ひ、衽下りで一針小さく糸止めをしそこから二三寸の間は衽も衿も同じにし、それから褄下までは、衿を少し引きつらせて附け、附けましたら表衿の方に折り返し次に衿先は、はじめ、裏表の衿と衽と都合三枚で糸止めをし、其の糸

で衿先は一分内を縫ひ、裏衿の方に折り返し、そして初め衿を附けた糸の所に縫ひ附け裏返して表を出し、そして衿幅の標み附けそれから前襟と衽の縫ひ込みを衿にくらべて斜に引き伸し、縫ひ込みを正しくして、三つ衿には別布の芯を入れ、前襟の縫ひ込みに綴ち附けます。衿先は、衿幅の標から先を斜に折つて其處を表に針目の出ない樣に絎け、下前は其糸を切らずにおいて、衿幅を二つに折り、衿下の止りから幅も丈も二分づゝの所に、裏表とも針を出して糸止めをし、其の糸で衿先を二分絎け殘しておき、上前の衿下止りから二分上の所まで絎け、（上前の縫ひ込みの斜に折りました所は、はじめ別の糸で絎けておくのであります）此處でも、幅も丈も二分づゝの所に針を出して糸止めをし、それから共衿をかけるのであります。共衿ははじめ竪を折り、次に横を折つて左右の端を縫ひ、一分のキセをかけ、下衿の縫ひ代をよく扱き出し、其所に共衿の折目を當てゝ絎け、次に裏で絎けるのであります。この仕方は共衿を取りはずしが出來ますが、他の掛け方は、衿を附けます前に、共衿の左右の端を下衿に縫ひ附けて、衿を附けます時に一緒に縫ひ、裏の方も衿を絎けます時に一緒に折り込んで絎けるのであります。そして木綿物ならば、水を吹いて、縫ひ目を正しくしてたゝみ、絹物ならば火熨斗をかけるのであります。

尙、男單衣を上仕立にいたします時は、袖下を袋縫ひにせず、はじめから丈標の所を縫ひ、袖形をこしらへましてから袖下ははじめ一枚を、袖下を縫ひました糸より、一分間をおいた所まで、縫ひ込の裁ち目の所を折り返し、殘りの一枚の、縫ひ込みの裁ち目の所は、はじめ縫ひ込みを折つた所の輪の所まで折り返し、針目を三四分位に、表に小針に出して絎け、又背縫ひも右の樣に折つて絎けるか、又は、普通の樣に二度縫ひとしておきます。

次に、後の內揚をいたします時は、後幅の標まで縫ひ附けずに、布幅のある所まで縫ひ、（これは前後共）脇縫ひは後幅の標の所を縫ひ、そこから一分間をおいて後幅標の所を縫ひました上を縫ひ一分だけ重ねて縫ひ込みを左右に開き、縫ひ込みの端を折つて絎け、衽褄先の所は額緣の拵へ方を前の圖の樣に折つて返し縫ひにし、縫ひ目を左右に開き、一分縫ひ代とし、縫ひ込みは裁ち落して額緣にし、衽を附けましてから前襟の縫ひ込みの端を折つて、衽に絎けるのであります。其の他は普通の仕立方と同じであります。

○中裁袷

中裁物は、十二歳位から十五六歳までの者の着ます衣服であります。

○普通仕立上げ寸法

袖口と袖附は五寸から五寸五分。袖幅は七寸五分から八寸。衿肩は一寸七分か八分。衽下りは四寸

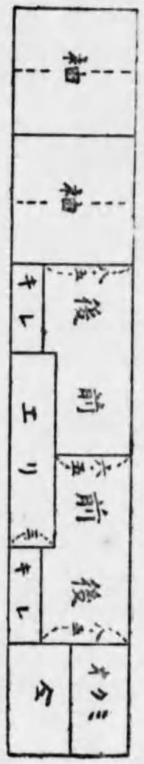
五分から五寸。身八口は三寸。衿下は一尺三四寸。後幅は七寸。前幅は五寸五分。抱幅は五寸五分
衽幅は三寸五分から三寸七八分。相褸は三分詰めます。衿幅は一寸三四分。衽は一分五厘か二分で
すが二分にいたします時は、少し綿を入れた方がよろしいのです。

○裁ち方と積り方

幅、九寸五分の布で表の裁ち方

袖丈、一尺五寸以上。身丈、三尺五寸。衿肩、二寸。後幅、八寸五分、前幅、六寸五分。衽下り、
三寸。衽丈、三尺二寸。衽幅は半幅。衿幅、三寸として。

裁ち方の圖



積り方

4袖丈＋5身丈－衽下り＝用布

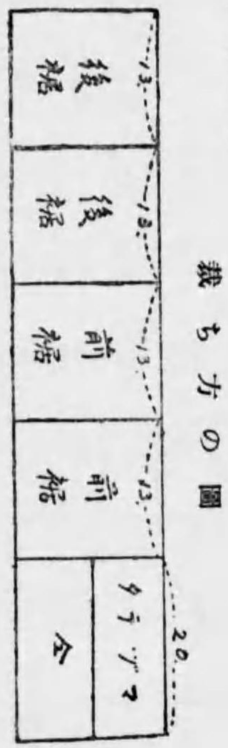
袖丈 15. ×4＝60.　身丈 35. ×5＝175.　175. ＋60. ＝235.

衽下り 3. ＝232.　身丈 35 －3. ＝32.　衽丈 235. －

裏地の裁ち方

裏は通し裏でありますしたら、表身丈や衽丈より、出衽の二倍だけ長く裁ちます。袖丈は表と同じに
裁ちます。此の外に袖口布は別の布で、並幅の四つ割で長さ一尺四寸のものを二枚要します。
胴裏と裾廻し布とを、別布でいたします時の裁ち方。
並幅の布で裾廻しの裁ち方。

裁ち方の圖



積り方

裾廻高 13. ×4＝52.　52. ＋20. ＝72　用布

胴裏の裁ち方

裁ち方の圖

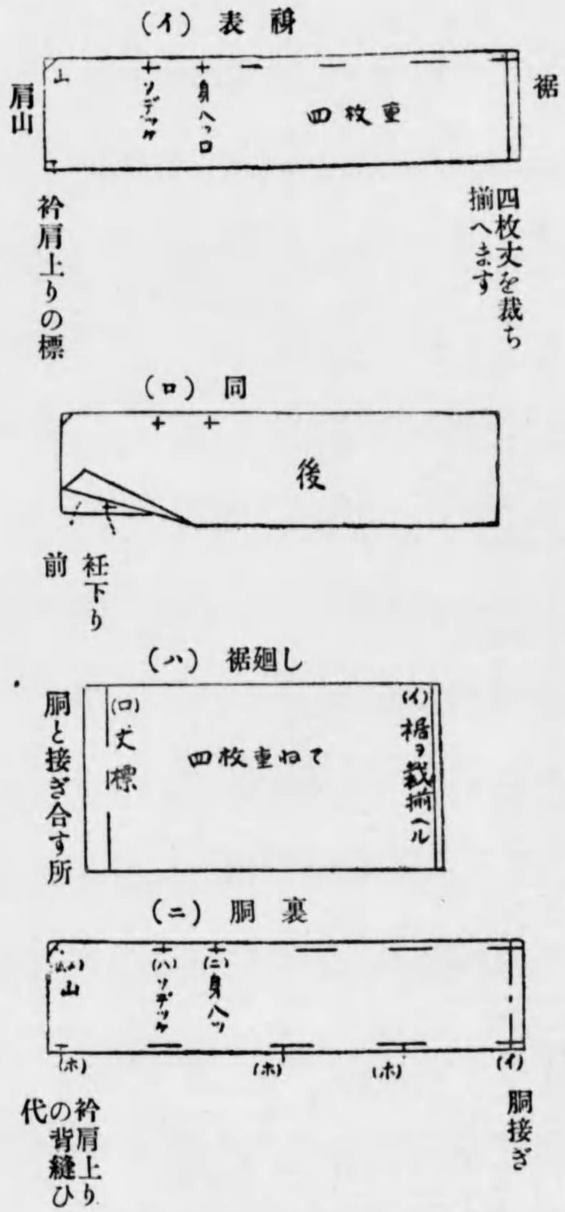
積り方

裏身丈 すそ廻高 袖丈
胴裏丈の積り方 35. −13. ＝22 15. ×4＝60.
胴接ぎ代 ふきの二倍 胴裏丈裁切寸法
22. ＋2. ＋ 6. ＝24. 6 21. 6×4＝98. 4

衽先裏布丈の積り方

裏衽丈 竪縫 布丈 胴接代 ふきの二倍 胴裏用布
32. −20. ＝12 12＋2. ＋6. ＝14. 6 60. ＋98. 4＋14. 6＝173.

○標の附け方

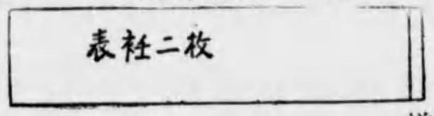


（ホ）同

前　衽下り

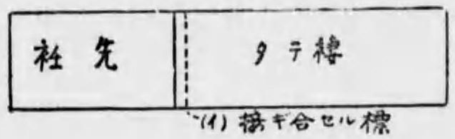
（ヘ）衽（表衽）

耳の方は身につく方



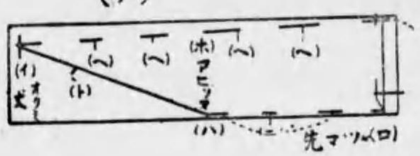
（イ）裁ち揃へる

（ト）裏衽



（イ）接ギ合セル標

（チ）



ツマ形

衿下　ヌヒ代

○縫ひ方の順序

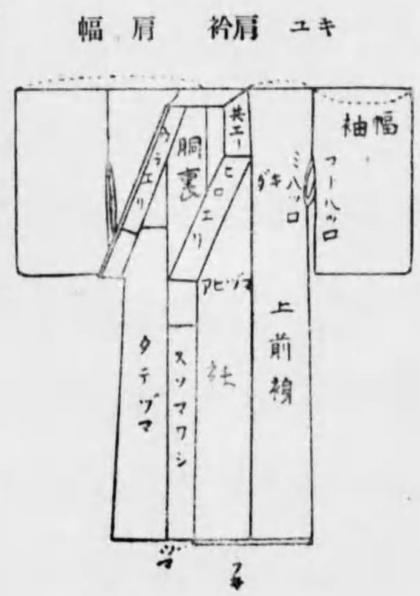
先づ裏袖に袖口布をかけて表裏の袖口明を縫ひ合せます。次に袖口止めを、四つ止めにして口明下を四つ縫ひし、袖幅の標を附けます。振り八つは、裏は袖幅標から一分詰め、袖丈の標と合せて縫ひましたら裏袖の方に返します。それから袖下を四つ縫ひし、表袖の方に折り返し、決を折つて綴ち附け、決は、袖下を先に竪を後に折ります。そして縫ひ目を正しくし、振り八つと、袖全體に躾をかけます。

躾は、背を縫ひましたら後幅と肩幅の標をいたします。衽は、前幅の縞目を通して、附けましたら前幅標を附けます。次に前後の幅標を合せて脇を縫ひ、後躾の縫ひ込みにクセを取つて躾で押へておきます。

次に胴接ぎをして裏躾の方に折を附け躾をかけます。背　脇、衽の縫ひ方は表とじ同であります。裾合せ、背、脇綴ぢ、身八つ口の縫ひ方、袖附、衽附、綴ぢ、衿下の縫ひ方、衿附け、衿新けなどは一つ身と同じであります。袵綴ぢは、前は、裏に三針、表は七針、脇の縫ひ目には、裏表に返針に出し、後は裏に四針、表に九針出し、その仕方は一つ身袷と同じであります。

肩揚げも一つ身袷と同であります。

○本裁女袷



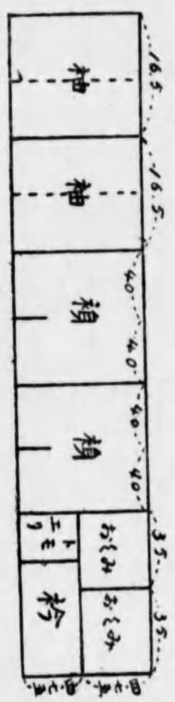
○普通仕立上げ寸法

袖丈、一尺五寸内外。袖口六寸。袖附六寸五分内外。袖幅八寸五分。袖形五六分。身丈、四尺内外袷肩二寸三分か四分。身八つ口。三寸から四寸。衽下り、六寸。後幅、六寸、衽幅、四寸。相褄幅三寸五分。袷下、二尺内外。袷幅、三寸。衽、一分。衿、一尺六寸五分。

○裁ち方と積り方

裁ち方の種類、には、棒衽。鈎衽。衽先接ぎ、袷下なし、袷三つ接ぎ、袷山接ぎなどがあります。並幅の布で表の裁ち方

裁ち方の圖



積り方

{(用布－4袖丈)＋2衽下}÷6＝身丈

{(用布 246－16.5×4)÷10}÷6＝40　身丈　衽下の二倍　衽丈

衽丈の積り方

身丈 衽下り 衽丈

40－5＝35

袷丈の積り方

身丈 袷下 袷用 袷先縫ひ代 袷丈

(40－20＋24＋1)×2＝46.8

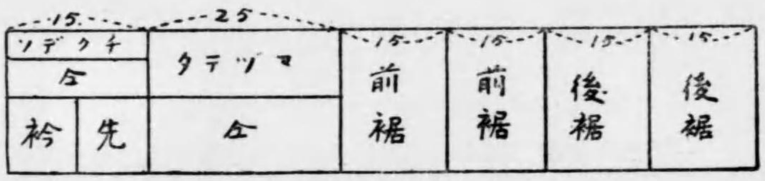
裾廻の裁ち方

身丈－衽下＝衽丈

裾廻しの高さは普通一尺五寸内外であります。

並幅の布での裁ち方

裁ち方の圖



積り方

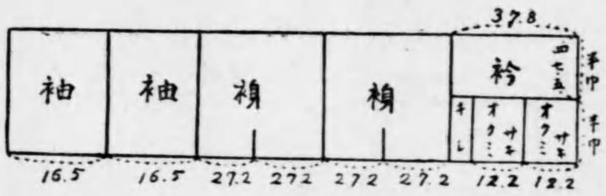
4裾廻丈＋竪褄＋袖口布＝用布

裾廻丈　たてつま　そで口布　用布
15. ×4＋ 25. ＋15. ＝100

胴裏の裁ち方

並幅の布

裁ち方の圖



積り方

4袖丈＋4(表身丈－裾廻丈＋2出衿＋胴接ぎ)＋衿丈＝用布

表身丈 裾廻丈 ふきの二倍接代 胴裏丈
40－ 15 ＋ .2 ＋2＝ 27. 2

衽先の積り方

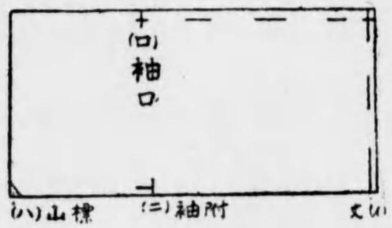
表衽丈 竪褄 ふきの二倍 接代
35－ 25 ＋.2＋ 2 ＝12. 2

裏衿丈の積り方

表衿丈 衿先布 つき代 衿　　袖丈　　胴裏丈　　衿丈
46. 8－10＋ 1 ＝37. 8　　16. 5×4＋27. 2×4＋37. 8＝212. 6

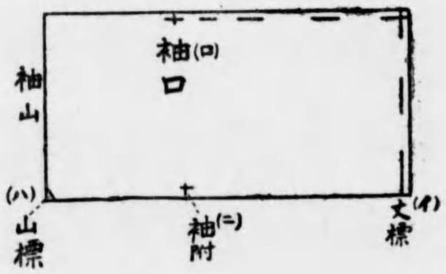
○標しの附け方

（イ）表袖

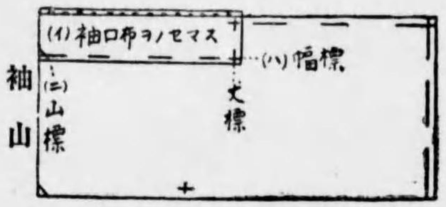


より一分長く
丈標は上り寸法

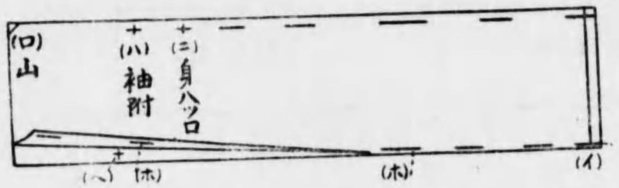
（ロ）裏袖



（ハ）裏袖



（ニ）表身

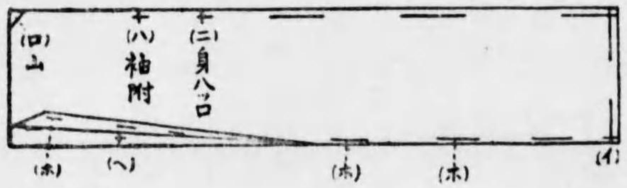


背縫ひ
衽下り
裾口を裁ち揃へます

（ホ）裾廻

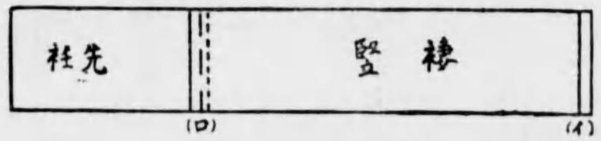
裾口ハ背縫ひ

（ヘ）裏胴



背縫ひ
衽下り
胴接ぎ

（ト）衽

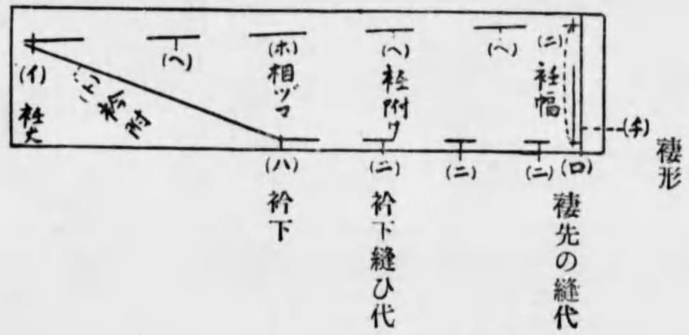


接ぎ標

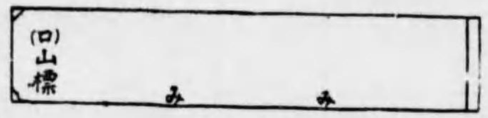
裾を揃へます

（チ）衽

裏衽の上に出衽の二倍をひかへて表衽をのせます

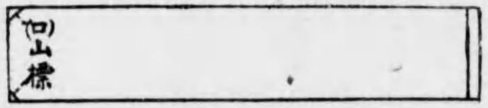


（リ）表衽



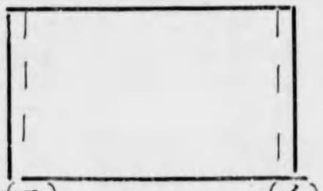
（イ）丈標

（ヌ）裏袷



（イ）接ぎ代

（ル）袷先布



接ぎ代

袷先の縫ひ代

尙、褄に繰り越しを附けます時は、肩山で前褄を後褄に繰り越します。

○縫ひ方の順序

袖は、中裁と同じ縫ひ方でありますが、袂の角に丸味を附けるのであります。それで丸く縫ひました縫ひ目から一分五厘程はなれた所を縫ひ締めて、襞を取るのであります。

褄の背、脇の縫ひ方や、裾の合せ方、綴ぢ方、身八つ口、袖附け等は、中裁ちと同じであります。それから褄揚げ、衽附け、袷下などは一つ身と同じです。

衿の附け方は、裏衿に衿先布を縫ひ合せ、裏衿の方に折り返し、襟を挾んで衿を附けましたら衿幅の標をして、衿先は極く淺く四つ止めいたしましてその糸で一分先を縫ひ、裏衿の方に折り返して衿附けの縫ひ目に綴ぢ、三つ衿に芯を入れて衿紐けをするのであります。次に共衿を附けて引き締め、そして糸を附けるのであります。

袵の綴ぢ方は中裁ちと同じにし仕立上げをいたします。

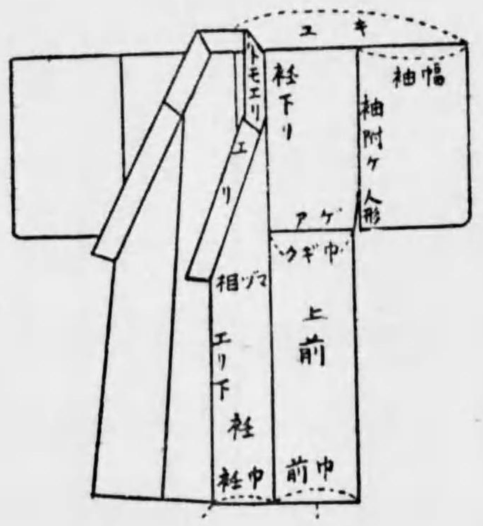
○本裁男衿

女物は、身丈を長く仕立てゝ、腰の所を端負つて着ますが、男物は肩から足の甲までを身丈といたします。

其處が女物と違ふ所であります。

○名稱

前



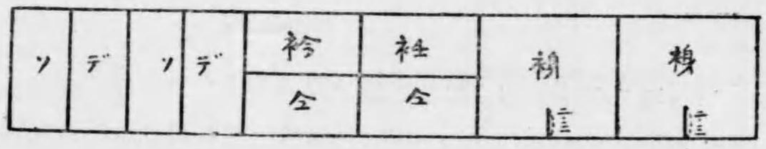
袵　褄

○裁ち方と積り方

表の裁ち方は單衣と同じであります。

裏の裁ち方は、表と同じでもよく、又、裏の用布が短いため棒袵に裁とうとする時は、裏衿を山接ぎに裁つのであります。

裁ち方の圖



積り方

（總尺－4袖丈－衿丈半分＋衽下）÷5＝身丈

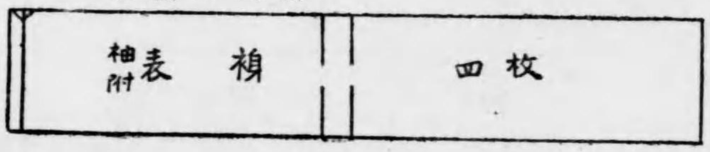
身丈－衽下＝衽丈

そてたけ　　そう尺　　衿の半丈分
14.5×4＝58　　270.－58.＝212.　　212－24.＝188.

おくみ下り　　身丈　　衽下り　衽丈
188.＋4.＝192.　　192.÷5＝38.4　　38.4－4.＝34.4

○標しの附け方

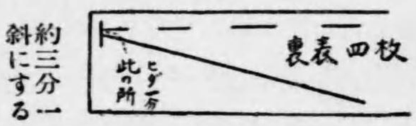
表袵の内揚



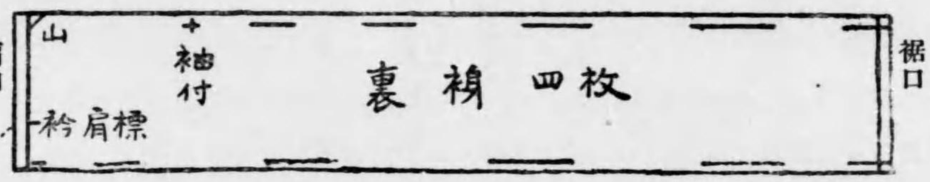
前袵を五分後に繰りしまりす越

揚丈の半分

衽



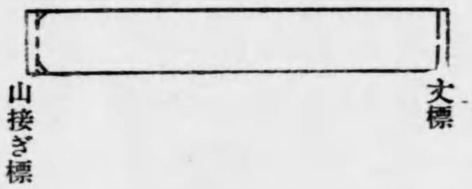
袵裏



此の間内揚の標　　背縫ひ

裾を裁ち揃へます

裏衿



○縫ひ方の順序

袖口布を裏袖に附け、裏袖を向ふ、表袖を手前に持ち、袖口明の標を合せて待針を刺し、表袖と裏袖とは少し緩み加減にし、袖口布を少し引きつらせて口明標から標まで縫ひ、五厘のキセを掛けて表布の方に折り返し、左袖なら表を自分の方に持つて口明の所を四枚共に糸止めをし、袖口布丈のある所までは返し針に縫ひ　其處から袂の所までは普通に縫ひ　その糸を切らずにおき、四枚共布を平に下にをいて袖幅の標を附け、其の標から幅二寸五分口明の方に寄つた所まで、袂の方から四つ縫ひ、其處で一針止めをいたしましたら其の糸を切らずに人形を裏表別々に縫ひ、袖形を拵へて、人形の所を單衣の樣に折り附けて縫ひ附け、表の方に折返し引返して表を田し、縫ひ目を正しくして躾をかけるのであります。躾は、袖口の所は別々にかけそこから下は四枚を一緒にかけます今度は襟を出して、衿肩を右にして背を縫ひ手前に折り返し、後幅と肩幅の標を附けてから前後の揚を縫ふのであります。揚は、裾口の方の揚標を山とし、袖附の方の標を縫ふ所にして、後は後幅標から幅標まで縫ひ、五厘のキセを掛けて裾口の方に折り返し、前は、布幅一杯に内揚を縫ふのであります。それから左右の脇を縫ひ、前襟の方に折返します。

次に裏襟を出し、内揚を衿肩標まで縫ひ後に折り返して躾をかけ、次に、衿肩を右に持つて背を縫

ひ、向ふに折り返し、それから後幅と肩幅の標を附けまして左右の脇を縫ひ前襟の方に折り返します。

次に裾合せは裏表の背と脇の縫ひ目を揃へて待針を刺し、裾を縫ひ合せましたら、一分のキセを掛けて表の方に折り返し、表から躾を掛け、衽を定めて衽綴ぢをいたします。衽を綴ぢますには、背と脇の縫ひ目は一針づゝ返して止め、前幅で、表に七針（返して止めました針はかぞへずに）裏に三針、後幅は、表に九針、裏に四針出して綴ぢ、脇縫ひには單衣の時の樣に、後襟の内揚を斜に折つて裏表共に綴ぢます。

次に袖附は、袖山と襟の山とを揃へて待針を刺し、表襟で袖を挾み、袖附の所を、はじめ表襟に針を通し、次に表袖二枚を通し、次に表襟に通して四枚共に糸止めをし、襟を手前に　袖を向ふに持つて、はじめと終りを五六分の間は、襟を五厘の縫ひ代にし返し縫ひし、外は一分の縫ひ代に縫つて折は袖の方に返し、裏袖は、袖幅に縫ひ込みのあります時は袖を折つて一分縫ひ代にし、襟を開いて袖を手前に襟を向ふに持つて附け、襟の方に折り返し、次に前襟の衽を附ける所を、裏表幅を揃へて綴ぢます。

（綴ぢる前に、裏襟の前の先は、衿肩から衽を附ける時の縫ひ代を、幅二分程出し、そこから裾口の方に縫ひ込みのつれない樣に、斜に裏襟の方に折り返しておいて綴ぢるのであります）。

それから前幅と抱幅と其の中程とに幅標を附けて折りを附けましたら裏表の衽を出し、裏衽を手前に、表衽を向ふに持つて褄を縫ひ、五厘のキセを掛け、針目五分位に、表に小針を一針出して隠し躾を掛け、衽の、襟に附く方に、標通り折を附けて、襟の裾口の縫ひ目と、衽の裾口の縫ひ目とをよく合せて待針を刺しておき、衽山を揃へましたら裏表の衽に襟を挾んで四つ縫ひにし、表衽の方に折り返し、次に衿下の所に折を附け、裏表衽の中に襟をたゝみ込んで、衿下の表は標を、裏は幅を五厘縫ひ込んで褄先から衿下標まで縫ひ、引き返して表を出し、縫ひ目を正しくして裏表二枚一緒に躾をかけましたら。衽の衿を附ける所の、幅を揃へまして躾で綴ぢておき、裏衿を山で接ぎ合せて縫ひ目を割り、伏せ縫ひをいたしましたら、裏表の衿で襟をくるみまして背縫ひから左右に附け下げ折を附け、衿幅の標を附けます。次に衿先の所で、衿二枚と衽二枚で都合四枚に淺く針を通して糸止めをし、其の糸を切らずにおいて、衿先は一分先を縫つて裏衿の方に返し、初め衿を附けました糸の所に縫ひ附けましたら引き返して表を出し單衣の樣に衿を新けまして共衿をかけ、終りましたら双方の縫ひ目を正しくたゝんで押おくのであります。

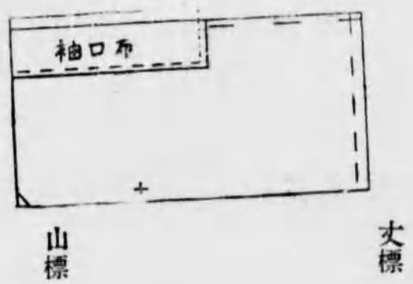
衿を上仕立にいたします時は、衿を四つ縫ひにせずに、裏表を別々に附けましてか後ら綴ぢ、衿だけを四つ縫ひにする仕立方もあります。

○本裁女綿入

○裁ち方と積り方

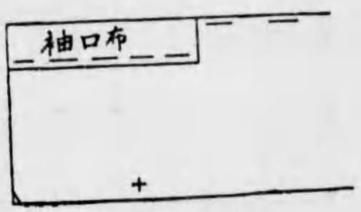
裁ち方は、衿と同じで、只袵を、衿より太くいたします。

○標の附け方



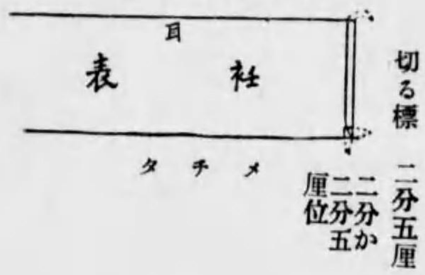
袖裏

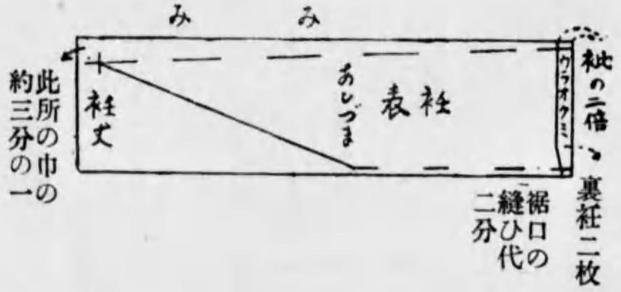
袖口は時に狹い幅が袖裏布を三分出します

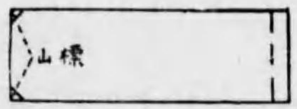


裏袖幅の廣い時は

圖の げ下切の衽表







衿先を接ぎ合せる標

襟、表袖、裾廻、表衿などは袷同じです。

○縫ひ方の順序

先づ表袖を出し、袖附を右に持つて袖口明の所まで縫ひまして袖形を拵へ、袖附を右に持つて、左袖は向ふに右袖は手前に返し、引き返して表を出し、左り袖ならば袖附の方から躾を掛け初め、袖下から袖口の回りに掛け、右袖ならば、後の袖口明の止りから躾をかけはじめ、袖附の方で袖下までかけます。

そうしましたら布を平に下において袖幅の標を附けておいて次に裏袖を出し、表の袖幅より六分廣くなる樣にして袖口布を掛け、縫ひ目は袖口布の方に返し、袖附を右に持つて、袖下を縫ひ、口明を止めます時に、袖口布をかけました横の縫ひ目の所に、一分のキセをかけ、袖口布より裏袖を少し緩くして、縫ひ代を四分にして縫ひ、袖形を拵へて　裏袖は表袖と反對に、左の袖は手前の方に右袖は向ふ返し、裏返して表を出し、袖幅は袖附より下、つまり袖下までは、表の袖幅より一分狹くし、袖山では、表の袖幅より六分廣く標を附けて其所に折を附けておいて表袖を出し、袖幅標の所に折を附けましたら裏表の袖下の縫ひ目を合せて待針を刺し、裏袖の方を少し引きつらせ、表を緩くして表袖を手前に、裏袖を向ふに持つて、針目を少し大針にしまして袖附標から標まで、但し袖下の縫ひ目の所では一針止めをして縫ひ、裏表の裏から平燒鏝を當てましてから、裏袖の方に綿を當て、初め八つ口を縫ひました糸の所に、針目を一寸位に綴ぢ附け、引き返して表を出し、そし

て表から二枚共躾を掛けるのであります。

（八つ口に綿を綴ぢます時は、糸のつれない樣にいたします。）

袖が終りましたら表の裾を出し、背と脇を縫ひ、それから、前幅と抱幅と其の中程との幅標を附けて其所に折を附けましたら表の衽を出し、裾に附きます方に、標通りに折を附け、前幅の標と合せて左右の衽を附けまして衽の方に折り返し、それから衿を背縫ひから左右に附け下げて衿の方に折り返します。

（但し衿を附けます時、前裾と衽との縫ひ込みは縫ひ附けずに、衽一枚だけに衿を附けましてから布を平に下におき前裾と衽の縫ひ込みを、衿附けしました縫ひ目の所に綴ぢ附けておきます。）

次に脇縫ひの縫ひ込みの中、後の縫ひ込みだけ引きつらない樣に縫ひ代だけ重ねて、後裾の方に折り返し、躾で、前裾の縫ひ込みだけに縫ひ附けましたら、縫ひ目を正しくして疊んでおきます。

今度は裏裾を出し、衿肩を右に持つて背を縫ひ、向ふに折り返し、布を下において後幅と肩幅の標を附けて其所に折りを附けて左右の脇を縫ひます。

それから裾廻布を出して背を縫ひ、裾口を左に折は向ふに返し、次に後幅標を附けて左右の脇み縫ひ、前裾の方に折り返し、胴裏と裾廻の背脇の縫ひ目を合せて待針を剌し、胴接ぎをして胴裏の方に折り返し、表から二日落しに躾を掛け、次に前幅と抱幅と其中程との標を附けて折を附け、衽の

裏を出して、竪褄と衽先布を接ぎ合せて衽先の方に折り返し、表から躾をかけて衽の裾に附く方を標通りに折り附け、前幅を揃へて待針をして左右の衽み附け、衽の方に折り返します。

次に衿を接ぎ合せ、裏衿の方に折り返して躾をかけ、そして背縫ひから左右に附け下げ、衿の方に折り返し、左右の縫ひ込みを、表の樣に開いて躾で縫ひ、次に裏表の背脇と、衽の縫ひ目を裾口で合せ、待針を刺して裾口を縫ひ合せ、褄を縫ひ上げましてから一分のキセをかけ、表の方に折返して躾をかけ、褄の所は針目を五分位にして表に一針小針に出して隠し躾をかけましたら次に身八つ口を、裏表の間で四枚共を針を淺く通して糸止めをし、其の糸で身八つ口を縫ひ、裏に綿を當てゝ躾で綴ぢ附けます。

次に袖を袷せの樣に附けましたら、双方の縫ひ目を正しくし、表の衿下を紮け代だけ裏に折つて躾をかけ、衿幅を、表は三寸、裏は二寸九分の標を附けましたら裏返して、表裾、裏裾兩方とも裏を出し、前裾を、裏裾の裏表の間に折り込んでたゝんでおくのです。

○綿の入れ方

先づ表裾の裏を出して、裾を平に伸して綿を、其の上に丈も幅も二三寸位づゝ長くしてのせ、そして袵綿をくるみ、袵の山から綿を五分位長く置き、殘りは折り返して、袵綿の殘りは其のまゝ裏表の前裾の間に折り込んでおき、次に衿肩から兩方の手を入れ、左右の脇縫ひの所で袵山を持つて引

き返し、裏前襟の裏を出して、布を平に下におきましたら、表袖の裏の上に綿をのせ、其の上に裏袖を置き、その裏袖の上にも綿を置きまして次に、前襟に綿を入れましたら、衿肩から手を入れて袖口と袂の角とを、一方の手でもつて引き返し、次に裾口では脇縫ひを持つて、裏の前の上に、表前襟を引き返し、斯うして左右の袖と前とに綿を入れましてから襟を双方とも正しく引き合せてたゝむのであります。

○紮け方

裏の表を背縫ひ合せて待針を刺し、衿を引き合せて、袖口に綿を括り附けますには、袖口布よりの袖の方を緩くして、幅四分の口明の間を眞直に折り、裏袖と口綿と糸のつれない樣にし、はじめと終りは、小針に二針出し、外は針目を一寸位にして括ります、次に口明止りで、袖口布より表袖の方を一分位緩くして口明の所を四枚ともに糸止めをして、袖口を紮けるのであります。紮けますには初めと終りとは、表袖を引きつらせ、袖口布を緩くし他は表袖の方を緩ませ、口綿に針の通らない樣布をよく引いて、糸を少し緩く引き、針目を二三分にして、折山から五厘程中で紮け、其の糸を切らずに、袂の角まで袖下の縫ひ目を裏表合せて綴ぢ、それから裏竪褄に綿を入れまして、衽幅標を折り返し、衿下止りの所で針目を五分にして、布の表に、小針に一針出して、三針綴ぢておき次に衿先の所で裏表の衿と裏表の衽と四枚共に淺く針を通して糸止めをし、其の糸で衿先は一分先

を縫ひ、縫ひ込みは裏衿の方に返して、初め衿を附けました糸の所に縫ひ附け、次に裏表の衿を附けました縫ひ目を合せて綴ぢ衿先の薄い所には、表衿の方に綿を入れ、三つ衿には別布の芯を入れて綴ぢ附け、衿先の縫ひ込みに裏衿の方にくるみまして褄形にし、衿を紮けましたら次に衽の位を見て、衽綴ぢを袷の樣にし、それから背脇の縫ひ目を裏表合せて裾口から一尺五寸程上つた所まで堅綴ぢをし、衽の縫ひ目は衿先の所まで綴ぢ、次に衿下を紮け、それから共衿をかけまして、終りましたら双方の縫ひ目を正しくしてたゝんでおきます。

女物を二枚重ねて仕立てます時の、上着より下着を短くします寸法。

袖附、一分、袖丈、三分、袖幅、一分、身丈、一分、前幅、二分、衽幅、一分、衿肩、一分、衿丈、三分、(左右で六分)裄、一分。

但し地質に依つて違ひます。

○本裁男綿入

○裁ち方と積り方

裁ち方は袷と同じであります。

○標の附け方

袷と大抵同じであります。それで違ひます所だけ説明いたします。

裏袖の布が狹いため、仕立上げ寸法に出來ませんときは、袖口布を三分裏袖より先に出して標を附け、それでも袖幅の足りません時は、袖丈全體に幅一寸位の共布か、又は別布を裏袖の上に二分重ねかけ、其の重ね代の中央をグシ縫ひにして接いでおき、そして袷の樣に袖口布み縫ひ附ける標を し、次に袖丈は表袖丈より一分短く標を附けます。其外は袷と同じにいたします。尙、袖口下の縫ひ代は、綿入の時は、袖口の衽を一分五厘か二分位出しますから、縫ひ代は普通四分といたします裏身丈は衽の二倍長くし、表衽は出衽に應じて切り下げを附けるものなら附け、此の場合は本裁女綿入と同じであります。

○縫ひ方の順序

先づ袖口布を、袖裏に表の袖幅より六分廣くなる樣に附け、縫ひ目を袖口布の方に返して躾をかけましたら袖附を右に持つて袖下を縫ひ、袖口明を止めます。

（裏を一分緩くし、縫ひ代を四分にして）次に袖形に五つか又は七つ襞を取つて拵へ、袖附を右に持つて左の袖なら手前に、右袖は向うに返し、それから表袖の裏を見て袖とを縫ひ、袖附を右に持つて左袖なら向うに、右袖なら手前に返し、引き返して、左袖は袖附の方からはじめ、口明のまわりに躾をかけ、右袖は後の口明からはじめて袖附まで躾をかけ、次に袖幅を、普通のものなら九寸

に標を附け、裏袖は袖山で表袖より六分廣く標を附け、口明から下は表袖幅と同じに標を附け、人形袖なら人形を縫ひ、單衣と同じに折つて縫ひ附け、表から躾をかけるのであります。

今度は表の襟を出　、衿肩を右に持つて背を縫ひ、手前に折り返し、後袖八寸と肩幅八寸六分に標を附けて折を附け、後の揚げは袖附から一寸下で背縫ひよく合せて待針を刺し、後幅の標から標まで縫ひ、縫ひ込みは下（裾の方）に返し、前の揚げは、後の揚げより又一寸下げ、布幅の端から端まで縫ひ、下（裾の方）に返します。次に脇縫ひをし、其の折り目は前襟の方に返し、次に袖附から肩揚の標まで、斜に折を附け、袖附は襟と袖とを共に淺く止め、襟の方に折つて、はじめと終りは、一寸程の間、淺く縫ひあとは一分の縫ひ代にして小針に縫ひ、袖の方に折り返し、それから後の内揚げと脇の縫ひ込みに、單衣の樣にクセを取り躾で前身の縫ひ込みに附けておき、そして前幅六寸五分、抱幅六寸其の中程を六寸二分五厘に標を附け、裾口は衽と襟とを揃へて待針を刺し、左右共裾から衽を附け、衽の方に折り返し、次に背縫ひから左右に衿を附け下げます。

今度は裏襟を出し、衿肩を右に持つて背を縫ひ、向うに折り返し、そして後幅八寸、肩幅八寸六分に標を附け、若し裏の丈の長いときには肩に揚げをし、其の折目の後の方に返して脇を縫ひ、袖は袖幅に縫ひ込みのありますときは、これを一分の縫ひ代に折つて附け、それから衽を附けて次に衿

を附けます。（肩に揚げのあります時は、前瞬の縫ひ込みを衿肩から淺く斜に折つて衿を縫ひ附けるのであります。）

次に、裏を向ふに、表を手前に持つて、裾口で縫ひ目を揃へて待ち針を刺し、二分の縫ひ代で裾を縫ひ合せて褄を拵へ、一分のキセをかけ、表の方に折を附け、褄の所は、針目を五分位に隱し躾をかけ、それから裾口と衿下に躾をかけ、双方の縫ひ目を燒鏝で伸して夜着だたみにするのであります。

（但し、衿幅標は、綿を入れます前にするのです）

○綿の入れ方

裏はたゝんだまゝにしておき、表の後の裏を見て引き伸し、裾口を二三寸長く、背筋で繼ぐ樣にして綿をのせ、袖口と裾とに袱綿をくるみ、出袱を定めて縫ひ目を揃へ、綿の上に裏を伸し、次に裏前襟の方に綿をおきまして、次に袖に綿を入れましたら前表の方から決に手を入れ、袖口と決とを共に持つて引き返し、裾口も前の表から手を入れ、左手で脇縫ひを持ち、右手で褄先を持つて引き返しましたら双方を引き合せてたゝみます。尙、袖口綿は、全體に綿を入れましてからするのも差支へありません。

○紮け方

背縫ひを裏表揃へて待針を刺し、裄を引き合せて、袖口を針目一寸位にし、綿をくゝり附け、口明を表と裏との間で一緒に止め、針目を二三分位にして紮け、終りは一寸程袖下の縫ひ目を裏表揃へて綴ぢ、次に表と裏との間で衿先を止め、一分先を縫つて、裏の方に折り返して縫ひ附け、それから裏と表との縫ひ目を合せて衿を綴ぢ、衿幅の標通りに折を附けそして衿を單衣の樣に紮けまして から共衿をかけ、次に袱の位を見て袷の樣に袱綴ぢをし、又背と脇の縫ひ目を、裾口から一尺五寸程綴ぢ、衽は衿先の所まで綴ぢ、それから衿下を紮け、終りましたら、正しくたゝんでおきます。

男綿入の重ねの仕立てます時は、上着より下着を短くする寸法。

袖丈、三分、袖附、三分、袖幅、一分、身丈、一分、後幅、一分、前幅二分、衿丈三分で左右で六分。裄一分。右の通りであります。

○絹布本裁女袷

○裁ち方と積り方

右は綿布の時と同じであります

○縫ひ方

縫ひ方は、絹布でも普通仕立の時は、綿布と同じでありますが、上仕立の時は左の所だけ違ひます

（イ）絹布袷を上仕立にいたします時は、振りを縫ひます前に、袖下を幅三四寸の間、袖附から袖口の方に、裏表別々に縫ひ、次に振を綿入れの樣に縫つて、袖下を裏表別々に縫ひました所から先を袂の角まで四つ縫ひにいたします。

（ロ）裾は、綿入の樣に、裏表の背脇衽などを別々に附けます。

（但し表に胴接ぎのあります時は、其の縫ひ目には縫ひ躾をかけます。

次に裾口を縫ひ合せ、綿を少し入れ、出衽を定めて衽綴ぢをし、それから絹布の樣に竪綴ぢをし、身八つ口も綿布の樣に縫ひまして袖を附け、衿も綿布の樣に四つ縫ひにして絎けるのであります。

○絹布本裁男袷

○裁ち方と積り方

綿布と同じであります。

○縫ひ方

綿布と違ひます所は、女物の樣に裏表を別々に縫ひますだけで外は絹布と同じであります。

（但し裾口には綿を入れずに、綿の代りに裏地と同じ色の金巾を、少し緩くして裏裾の裏に當てゝ縫ふのもよろしいのです。

○本裁女綿入羽織

○仕立上げ寸法

袖丈、下に着る着物より三分長く、袖口、下の着物と同じ。袖附、下の着物より一分多く。袖幅、下の着物より三四分廣く、身丈、二尺五寸から二尺七寸ですが着る人に依つて違ひます。前下り、一寸。衿肩、二寸四分。後幅、七寸五分。前幅、四寸七分。襠幅は、裾口で一寸七八分、上で三分衿幅は襠の裾口幅と同じ、乳下りは肩山から九寸以上一尺。身八つ口、二分から二寸三分。衽、下の着物より一分長く。

○裁ち方と積り方

並幅、長さ二丈八尺の布で表の裁ち方。

裁ち切り寸法

袖丈一尺六寸八分。後身丈三尺二寸二分。前丈四尺二寸二分。衿肩二寸七分の中二寸二分を眞直に切り殘りの五分を丸く裁ちます。前幅六寸八分。袖口布幅二寸七分。同丈、一尺五寸を二枚。襠幅二寸七分。同丈、二尺六寸七分。乳の布丈四分。

（但し出來上りは袖丈一尺六寸三分、身丈二尺七寸として）

裁ち方の圖

積り方

袖丈上り　縫代　袖丈裁切り
16.3＋ 5 ＝168　　168. ×4＝67.2

衿丈の定め方

身丈上り　衿肩廻　前下　衿先縫代　　衿丈
27. ＋3. ＋ 1. ＋1. ＝32.　　32. ×2＝64.

後身頃より前身頃を長くしますのは片身頃について 10. ですから
10. ×2＝20. です

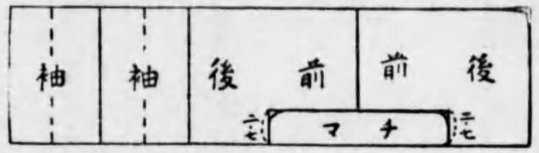
總尺
280. －67. 2－64. －20. ＝128. 8

後身丈
128. 8÷ 4 ＝32. 2

前後ノ差　前身丈
32. 2＋10. ＝ 42. 2

裏の裁ち方

裁ち方の圖



積り方

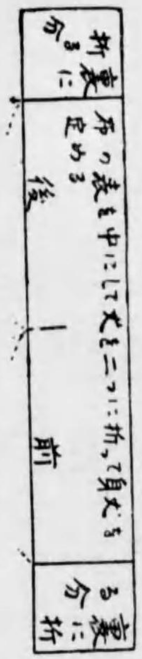
袖丈上り　　後身丈上り　　總縫代衿肩廻
16. 3×8＝130. 4　　27. ×10＝270.　　130. 4＋270. ＋25＝425.4

裏表の合尺　表地　用布裏
425. 4－　280. ＝145. 4

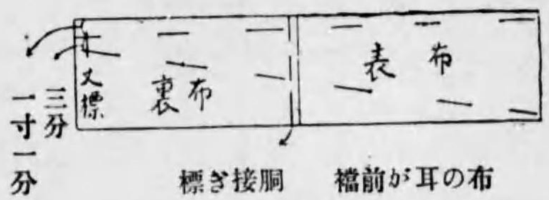
總縫ひ代と衿肩廻しを二尺五寸といたしましたのは、袖下縫ひ代五分づゝ裏表で四寸・胴接ぎ代四寸前下り六寸　衿肩廻し六寸。衿先縫ひ代二寸。衿の前下りの分二寸。三つ衿縫ひ代一寸とを合せた寸法であります。

○標の附け方

（イ）

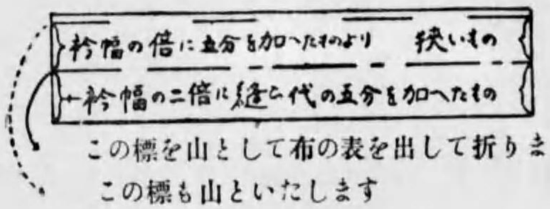


丈標　後身丈の上り寸　後丈より一寸五分長くします　丈標
標　法より三分長く　衿肩を所に待針付け



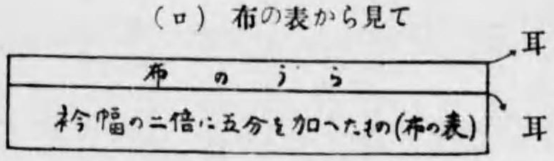
衿の折り方

（イ）



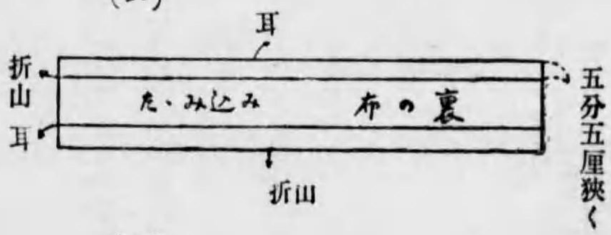
この標を山として布の表を出して折ります
この標も山といたします

（ロ）布の表から見て

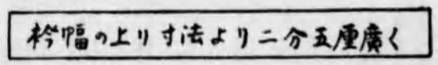


折り山

（ハ）

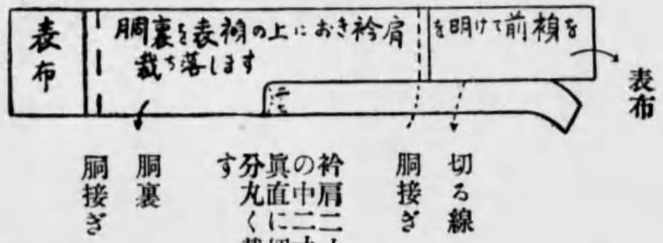


（ニ）

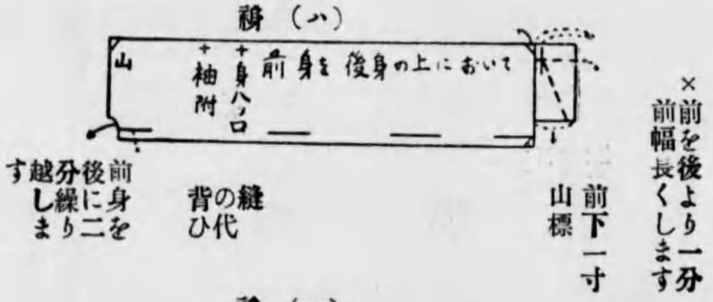


全部折り山

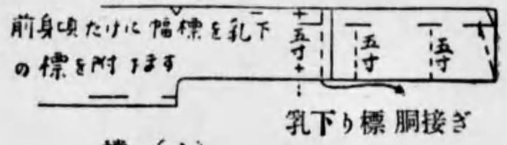
襟（ロ）



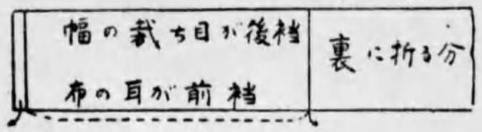
襟（ハ）



襟（ニ）



襠（イ）



上の縫ひ代は三分
丈標此の間は後襟の裾山から身八つの標までの長さより五厘短くします

○縫ひ方の順序

袖は綿入着物と同じであります。

襟の胴接ぎと背縫ひをして、後幅と肩幅の標を附け、次に前下りを表は標通りにし、裏は標を一分か一分五厘位縫ひ込んで前幅標の所まで縫ひ、裏襟の方に折り返し、針目を五分位に隠し躾をかけます。

次に後襠と前襠を附け、五厘程のキセをかけて襟の方に折りを附け、双方の縫ひ目に鏝を掛けましたら次に表を外に出し、裏表の間から手を入れ、襠丈の上りで、一針糸止めをし、其糸で身八つ口を縫ひ、着物の様に袖を附け、表は袖の方に折りを附け、裏は襟の方に折を附け、其所に鏝をかけるのであります。(八つ口と身八つ口は、着物の様に綿を縫ひ附けておくのです)

○綿の入れ方

着物と同じであります。

○衿け方

袖口の衿け方は、綿入着物と同じにし、それから裏と表との前襟を揃へ、前裾口は表を五厘か一分裏にふかせ、衿を附けます所は、綿を薄くして躾で縫つておきます。それから紐附けを附け、次に衿丈の中央と、背縫ひとを合せて襠針を刺し、紐附けから紐附けまでは衿を一分づゝ緩くし、紐附

けから下は衿も襟も同じにし、衿先の所は丈五寸の間で、前襟を一分程斜に縫ひ込んで衿を附け衿先は一分巾を縫ひ、縫ひ込みと裏襟の表の方に返し、初め、衿を附けました所にこれを縫ひ附け、衿芯は衿の縫ひ込みにくるみ、少し緩くして所々を綴ち附けそうしてから衿を衿け、背と前襠に布綴ぢをし、衿と八つ口に躾をかけましたら火熨斗をかけるのであります。

○本裁男綿入羽織

○仕立上げ寸法

身丈二尺七八寸ですが着る人に依つて違ひます。

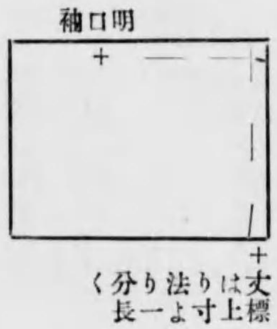
後幅八寸。前幅五寸。前下りは一寸。襠幅は裾口で一寸九分以上二寸。上は着物の衽先の様にいたします。乳下りは肩山から八寸。衿一尺七寸六分、下に着る着物より一分長く。袖丈に下に着る着物より三分長く。袖口明は下の着物と同じ、袖幅九寸、袖附は袖丈殘らず附けます。

○裁ち方と積り方

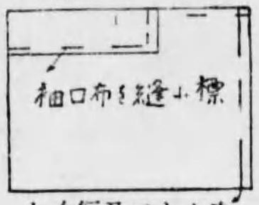
裏と表も、本裁女綿入羽織と寸法が違ひますだけで外は同じであります。寸法の違ひますのは、つまり袖丈が短くなるのであります。

○標の附け方

表袖



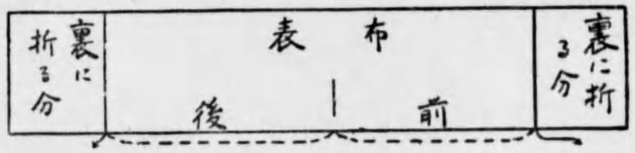
裏袖



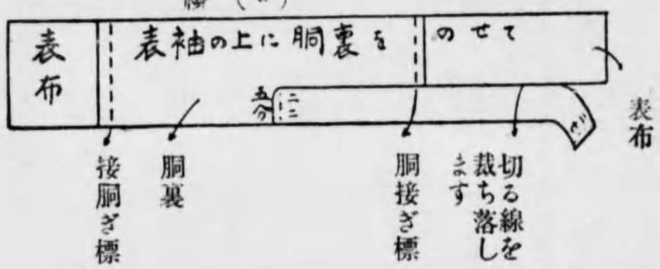
袷

布の裁ち目は後幅

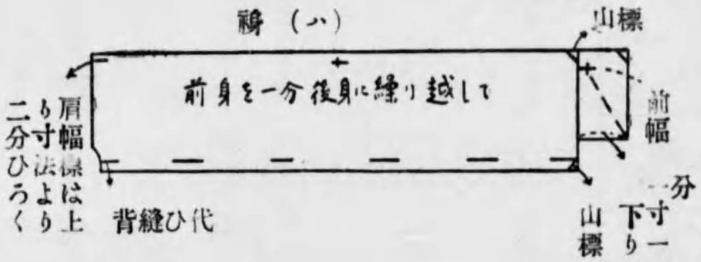
裏（イ）



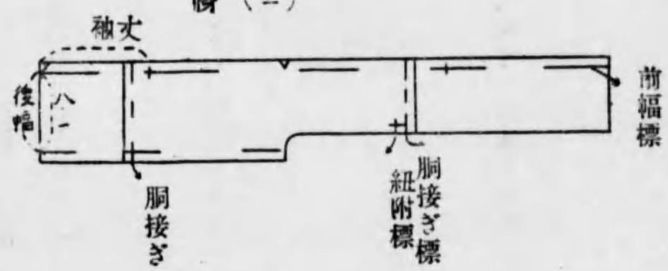
裏（ロ）



裏（ハ）



裏（ニ）



衿の折り方は衿幅の上り寸法が違ふだけで女綿入羽織と同じであります。尚、又裏地が大幅の時は衿あきも綿入れも、胴裏に背縫ひをせず、此の時は、裏襠の衿肩は表衿肩より背の縫ひ代だけ小さく明けるのです。

○縫ひ方の順序

女物と違ひます所は、男物は、袖で袖を殘らず附けますので、襠丈の終りで、襠には針を通さずに、袖で袖を挟み、着物の様に裏表を附けるのであります。外は女物と同じであります。

○本裁男袷羽織

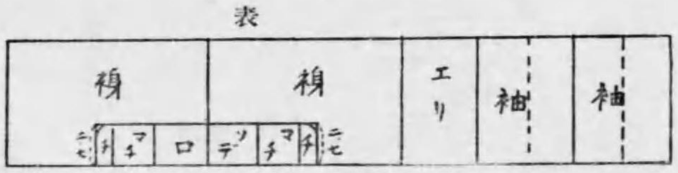
○裁ち方と積り方

並幅で長さ二丈七尺五寸の布で表の裁ち方

袖丈一尺四寸五分の裁ち切り　紐附丈五分、袖口布丈一尺八寸。後丈二尺五寸の出来上りとします。

裁ち方の順序

表



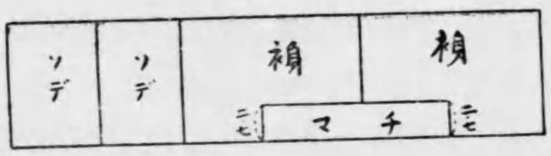
積り方

袖丈 14.5×4＝58.　後身丈 25.＋5＝30.　5寸は衿肩廻と前下りと縫ひ込み

衿丈 30.×2＝60.　275.－60.－58＝157　前後の差の二倍 157.－20.＝137.

後身丈 137.÷4＝34.25　後身丈 34.25＋10.＝44.25 前後の差 前身丈

裏



積り方

袖丈 14.×8＝112　身丈 25.×10＝250.　112.＋250.＋25.＝387.　ぬひ代 裏表の合尺

表用布 387.－275.＝裏用布 112.

○標の附け方

綿入羽織と違ひます所は、綿入れは裏袖の丈を表袖丈より一分短くいたしますが、袷は五厘短くいたします。袷は綿入の様に折りまして次の圖の様に合標をいたします　合標は五寸位づゝ間をおいて

いたします。

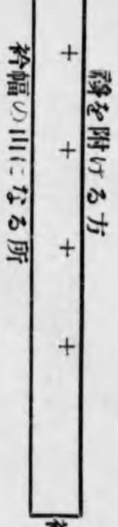
其外は綿入と同じであります。

○縫ひ方の順序

裏袖に袖口布を附け終へましたら、表袖を手前に裏袖を向ふに持つて、裏表共、袖口布より一分緩くし、袖口布を引きつらせて口明を二分の縫ひ代で縫ひ、其の縫ひ目は五厘のキセを掛けて表の方に折りを附け、袖幅標を附けておきます。

今度は襟を取つて胴接ぎをし、胴裏の方に折り返して躾をかけ、衿肩を左りに裾口を右に持つて、背を表と裏を四枚共に裾口から肩山まで縫ひ、その縫ひ込みは向ふに折り附け、次に前下は裏を一分縫ひ込み、表に標の通りに、前幅標まで縫ひ裏に折り返し、表布を裏に五厘折り返します。次に前襟の所の端を、裏表幅を揃へて躾で縫ひ合せておき、そして紐附布を綿入羽織の様に折つて、紐附下りの所に縫ひ附け、次に衿を附けるのであります。附け方は、衿布の表になる所、つまり折り山の所と裏襟の表とを合せて衿山と背縫ひとを揃へ、襠針を刺し、衿で前襟をくるんで衿の合標と合標とを揃へ、

（合標の附け方）



綿入羽織の様に衿と襟の釣合を取つて襠針を刺し、三つ衿の所は、裏衿になります方を一枚殘し、外は衿の裏表で襟をくるんで附けます。（これは鐵砲附けと云ひます）次に、衿先は、衿の縫ひ込みの布を開いて一分内を縫ひ、縫ひ目は裏襟の方に返し、衿を附けました所に、返し針で衿先の縫ひ込みを附け、次に衿幅の縫ひ込みの布を、其の上に折り返し、その中に芯を入れて綴ぢ、衿の縫ひ目は手前に返し、そうして衿肩から衿と前襟を引き返し、衿の縫ひ目は、裏襟の方は五厘つかせて折を附け、躾をかけましたら衿の附け殘してある所を綴け、襠の上の方の縫ひ代を布の間に折り、次に後襟で後襠を挾み、襟の方を緩くして、四つ縫ひにして引き返します。袖附は、表襟を一分縫ひ代にして折を附け、其所に袖を少し緩くして縫ひ附け縫ひ目は袖の方に返しおき、次に裏袖を附け、前の袖附の所を五寸程縫ひ殘しておいて、折り目は襟の方に返し、（但し、身を開いて袖を折つて一分の縫ひ代にします）それから是を裏返して袖口明下を四つ縫ひにし、其れから袂の角まで縫つておき、次に袖附を七つ止めつまり七枚一諸に糸止めをして袖下を縫ひまして、袖形を拵へ、その縫ひ目は表に折つてから是を引き返します。次に前襟で前襠を挾み裾口から四つ縫ひにして表に折り附け、引き返しまして袖附の縫ひ殘しました所を新けましたら双方の縫ひ目を正しくし、前下りと袖等に躾をかけてからたゝんで壓をおくのであります。

尙袖附の七つ止めの針のかけ方は、裏の前襟一枚だけ殘して、左右共に袖口を左持ち、布の重つて居る順に通すのであります。若し絹物ならば、袖形と裾口に眞綿を少し入れた方がよろしいのです。亦、裏布の幅が狹いために、裄の出來ません時は、裏袖の口明になる方に、共布か別布を足しましてから袖丈や袖口布を縫ひ附ける標をするのであります。

○絹布本裁男袷羽織

○裁ち方と積り方

綿布と同じであります。

○縫ひ方で綿布と違います所を述べませう。

(イ)胴接ぎの躾を、縫ひ躾にいたします。

表襟が大幅で、模樣などのあります時は、裏に背縫ひをせず、それで、表の背を縫ひましてから胴接ぎをして背を綴ぢます。

(ロ)後襟の裾口と襠の裾口に、綿か別布の芯を入れます。

(ハ)袂の丸味の所には綿を少し入れます。

(ニ)上仕立にいたします時は、背、袖附、胴接ぎ、襠などの縫ひ目を割ることもあります。此の時は

襠の上幅を五六分にし、襠を身に縫ひ附けます時、各羽附といたします。

○絹布本裁女袷羽織

○裁ち方と積り方

右は、綿布女物綿入羽織と同じであります。

○標の附け方

袖や、襟、襠などは、女綿入羽織と同じで、袷の標の附け方は綿布本裁男袷羽織の時と同じにいたします。

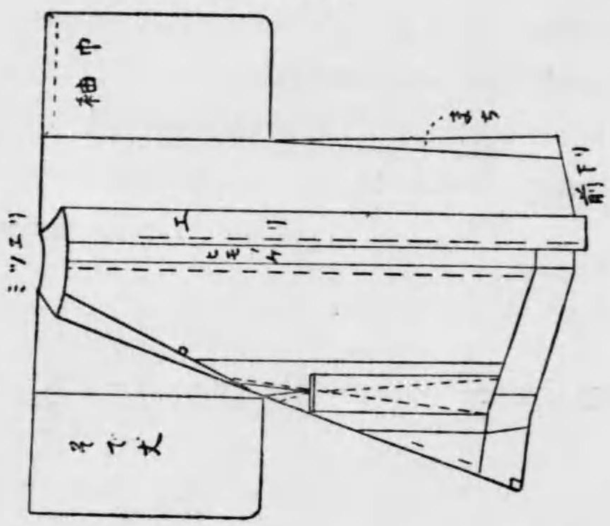
○縫ひ方

袖は袷の着物と同じにします。

襟は胴接ぎや前下りの縫ひ方、袷の附け方などは綿布男袷羽織と同じにし、襠の附け方は綿布男袷羽織の樣に、後襠を裾口から縫ひはじめ、襠丈の止りまで縫ひ、此所で一針止めをし、其の糸で後の身八つ口を縫ひ、それから袖を附けます。袖の附け方は袷着物の樣に、袖附止りを四つ止めとして、表袖を普通に附けて袖の方に折り返し、次に裏袖を前後から縫ひ合せる事の出來る所まで附け袖附山を少し殘しておいてこゝから引き返して表から袖と身を綴けるのであります。

○本裁男單羽織

出來上り圖

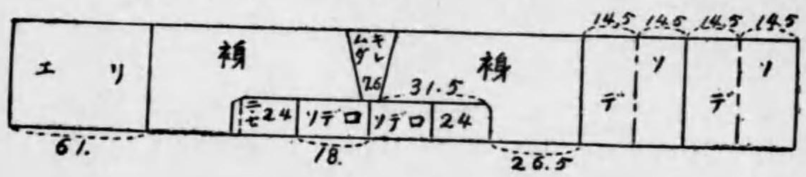


○裁ち方と積り方

並幅の布で男單羽織の裁ち方

袖丈一尺四寸五分、身丈二尺六寸五分の裁ち切りとして。

裁ち方の圖



裁ち方の說明

二丈三尺五寸の中から五尺八寸を切つて兩袖とし、次に六尺一寸を切つて衿とし、殘りの一丈一尺四寸を丈を二つに折り輪になつてゐる方を前袵とし、後丈一尺六寸五分、衿肩二寸七分を圖の樣に圓く裁ち、前袵を裁ち落して袖口と襠にいたします。

紐附は前下りのむだ布から取ります。

積り方

4袖丈＋6身丈＋衿廻＋前下のむだ布＝用布

2(身丈＋衿肩と縫ひ代)＝衿丈

袖丈 14.5×4＝58　身丈 26.5×6＝159.　159.＋50.＋18.（衿廻ムダ布）＝ 用布 235.

身丈 26.5＋ 衿廻縫ひ代 4 ＝30.5　30.5×2＝衿丈 61.

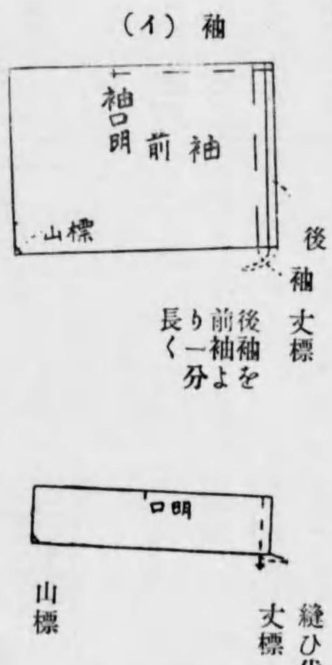
總尺と、袖丈、身丈の定まつてゐる時の積り方。

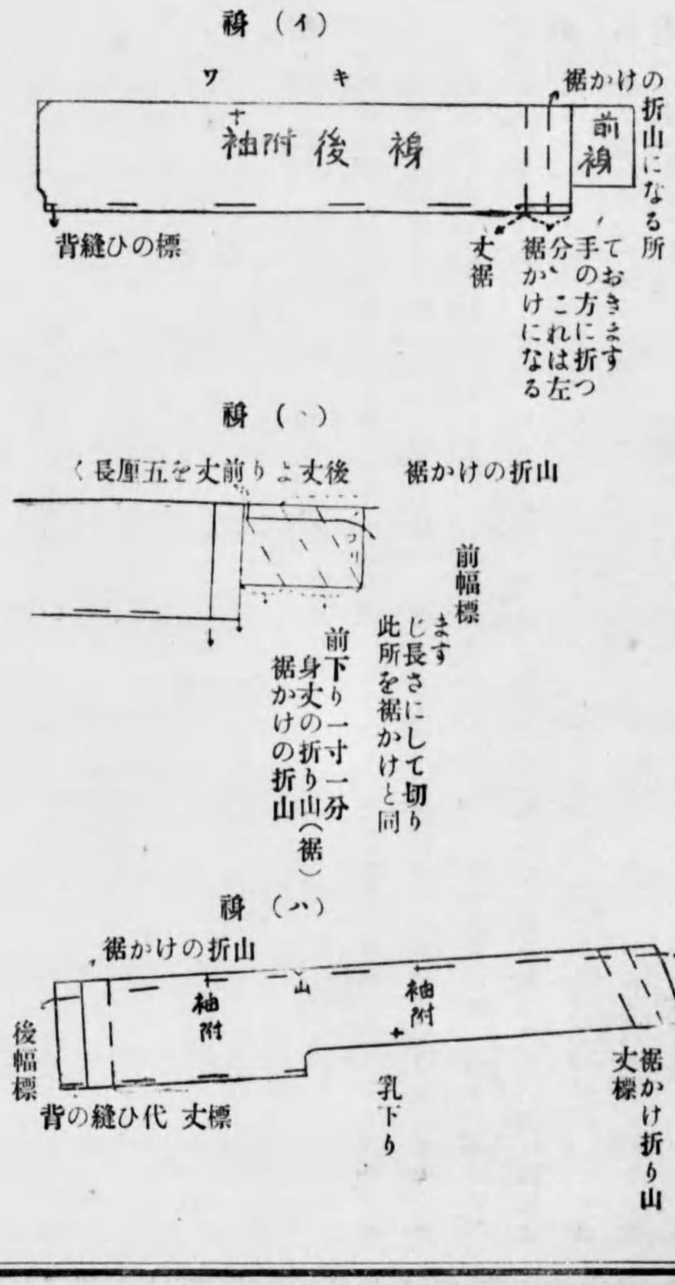
裁ち方は前の圖と同じです。

積　ち　方

14.5×4＝258　衿丈裁ち切り寸法の定め方　身丈より衿廻し　前下り　衿先ゝと代
3.×2＝60.　衿丈の長切　總ぢ　袖の用布　衿の用布　25＋3.＋1.＋1.＝30.
250.　58－60＝132.　132.－10.＝122.
122.÷4＝305　後身丈　305＋5.＝35.5　前下とムダ布　前身丈　前下とムダ布

○標の附け方





襠

裁ち目が後襠

○縫ひ方の順序（縫ひ方の中、紐ける所は羽二重糸を用ひます）

先づ袖を手前に袖口布を向ふに持つて、口明を縫ひ表に返し、次に紋のある所を後にして口明を止め、其所から袖附まで縫ひまして袖形を拵へ、袖口布と袖下の縫ひ込みを紐け、引き返して躾をかけ、それから紋をよく合せて背を縫ひ、手前に折り返し、次に背の縫ひ込みの端み折り、裾かけの折山から三分程身丈標に依つた所まで紐け、前下りの所を三つ折にして端を綴ぢます。次に紐附を縫ひ附けましてから、袷羽織の樣に衿で前襟をくるみ、衿先の所は、襟の幅を丈二寸の間、一分斜に縫ひ込み、それから紐附までは、衿を二分位緩くして、衿肩の所で、襟の表の方は、衿を一枚殘して縫ひ附け、衿先は一分中を縫つて折目を襟の方に返して綴ぢ、次に衿の縫ひ込みの中に衿芯をくるみ、縫ひ糸で所々を綴ぢまして衿肩から引返し、そして衿肩の縫ひ殘しました所を紐けて躾をかけます。それから襠の頭を細く三つ折にして紐け、次に前後の襟に襠を附け、そして襠の縫ひ込みは、襟の縫ひ込みに紐け、前後の脇の縫ひ込みに、襟に紐けるのであります。次に裾を紐けてそれから袖を附け、裾幅に縫ひ込みのあります時は、袖の縫ひ込みを袖に紐け附け、終りましたら裏の方から火熨斗をかけてたゝみます。

幅九寸五分で長さ二丈二尺三寸の布で單羽織の裁ち方

但し兩面物で、袖丈一尺五寸の裁ち切り。

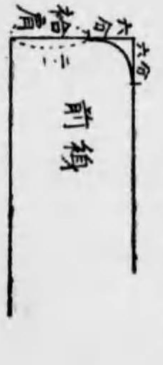
裁ち方の圖

積り方

袖丈 15. ×4＝60　總巾 233. －60. ＝163.　前下と衿襠 163. ÷6＝27.1　後丈

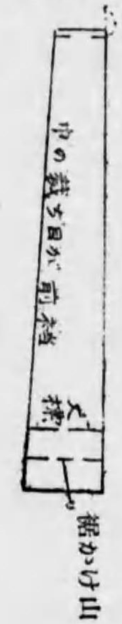
27.1＋1. ＝28.1　前丈 27.1＋4. ＝31.1　衿丈 31.1×2＝622

羽織の衿肩を裁ち切る所



○標の附け方

棒衽と鈎衽の違ひます所は次の圖の樣にして、幅標は前襠を身に附けてから附けるのであります。



○縫ひ方

袖と背と、衿と、襠の頭を絡ける所までは、棒襠の時と同じであります。襠の縫ひ方は、前幅標から縫代だけ脇の縫ひ込みに依つた所に、前襠（つまり斜に裁ちました所）を持つて行つて、布の表に縫ひ目の出る樣にし、襠を一分の縫ひ代にして、袖附標から、裾掛折り山標の三分程、丈の裁ち目に依つた所まで縫ひ、襠の方に折り返し、次に布の表と表を合せ、布の裏を見て前幅標の所を、襠の頭から布丈の終りまで縫ひ、脇の方に折り返し、次に襠丈標の所で幅標をして棒襠の樣に後襠の標を附け、そして後襠を附けるのであります。其の外は棒襠と同じであります。

○本裁女單羽織

女物の單羽織は八つ口を明けるだけで外は男物と同じであります。

○本裁女小袖一重

重を仕立てます時の、上着より下着を短くする寸法。

但し地質に依つて違ふ事があります。

袖丈は三分、袖幅は一分、袖附も一分、袖口は上着と同じ、身丈は一分、後幅と衿肩と衽幅と衿は一分づゝ、前幅は二分、衿丈は左右で六分。

尙、三枚重ねの時は、三枚目の着物を此の順に詰めるのであります。

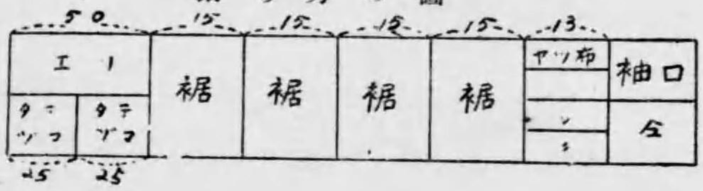
○縫ひ方

普通の綿入を二枚仕立ると同じであります。

重の下着を胴抜きにいたします時は左の樣に裁ち、又積ります。

下着表もの廻りの裁ち方

裁ち方の圖



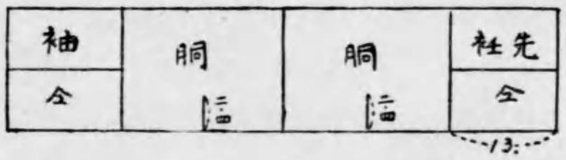
積り方

袖丈　縫代
16.5×2＝33.　八布の定め方　袖丈　袖附
16.5－6.5＝10.

やつ布　すそまわし
10.＋3＝13.　15.×4＝60.　33.＋13.＋60.＋50.＝156.
えり　えり　廻りの用布

同く表もの胴抜きの裁ち方

裁ち方の圖



積り方

袖丈
16.5×2＝33.　胴丈の定め方　身丈　すそまわし
40.－15.＝25.　25.＋2＝27.
おひしろ　胴丈の裁ち切

27.×4＝108.　衽先丈布の定め方　衽丈　竪棲
36.－25.＝11

おひしろ　衽先布丈
11.＋2＝13.　33.＋108.＋13.＝154.
胴抜きの布用布

○縫ひ方

右の樣に、表身に、胴と裾と別布を用ひます時は、各々別々に背と脇を縫ひ、それから胴を抜きをして裾の方に折り返し、縫ひ鎖をかけ、衽も竪棲布と衽先布とを縫ひ合せ、裾の方に折り返して縫ひ鎖をかけるのであります。

袖には廻りの、半幅の表袖と半幅の胴抜き布とを縫ひ合せて胴抜き布の方に折り返して縫ひ鎖をかけそれから胴抜き布の方を袖附にいたしますからそこへ振り八つを縫ひ附けるのであります。あとは普通の綿布か綿入の縫ひ方と同じであります。

○本裁男小袖一重

○裁ち方と積り方

下着の表身を通しにいたします時は、普通の着物を二枚裁つと同じですが、下着を胴抜きにいたし

す時は女物と大體同じに裁ち、只八つ布を附けないのです。

上着より下着を短くする寸法

袖丈は三分。袖附も三分。人形は上着と同じ。袖口と袖幅は上着と同じ。身丈、後幅、衿肩、衿とは一分づゝ詰めます。前幅は二分。衿丈は左右で六分。

三枚重ねの時は三枚目の此の順に詰めます。

○縫ひ方

下着の表裙が通しの時は、普通綿入を二枚仕立てる樣にし、胴抜きの時は、女物の樣にいたします

尙、表裾廻の丈が長くて、胴接ぎを腰より上にいたします時は、縫ひ目を肩山の方に返すのです、

○本裁單重

○裁ち方と積り方

普通の單衣を二枚裁つと同じであります。

○標の附け方說明

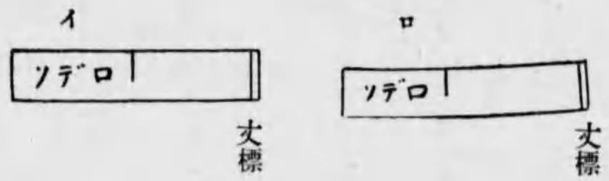
最初に、上着の表袖を出して布を中表にして二枚を重ね、丈を二つ折りにして普通の樣に、袖下を右に、袖口を向ふに袖附を手前にして下に置き、袖丈の上り寸法より一分長く標をし、袖口と袖附

標をして袖附の方にだけ山標を附けます。次に下着の袖を表袖の樣に下におき、袖丈、表袖丈より五厘短く標をし、袖口と袖附は、表と同じに附けます。今度は上着と下着の袖口布を出して圖の樣に袖口布丈と口明の標をします。次に上着の裙を出し、普通の單衣の樣に身の丈を裁ち揃へましたら、袖附と身八つ口と山標と、それから衿肩の出來上り寸法との標を附けます。

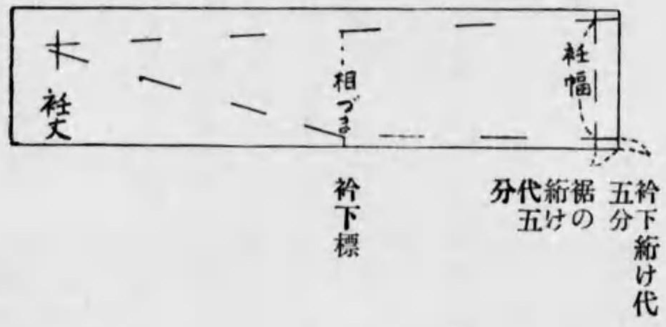
次に下着の裙を出して表の通りに標を附けましたら次に、上下の衽を四枚揃へて、幅の裁ち目の方を手前に裾口を右にして下におき、裾口を四枚裁ち揃へましたら衽丈を身の丈より衽下りだけ短く標をし、褄先の所は、裾口の絎け代を右から左へ丈五分の所に標を附け、其所で手前から向ふに、衿下の絎け代を幅五分の所に標をし、其の標から向ふに、衽幅の標を附け、衿下標の圖の樣に褄先の絎け代から左に度つて附け其所でも褄下の絎け代を幅五分取り、そこから向ふに相褄の幅標をして、衽丈の所では向ふから手前に、凡そ三分の一の所に標をし、衽の裙に附きます方の標をしましてから衿を附ける標をいたします。

次に衿丈を度つて衿布を出し、四枚共に丈を同じに標をしておくのであります。上着も下着も、裏衿には裏打をし、上着には別布の芯を入れるのもよろしいのです。

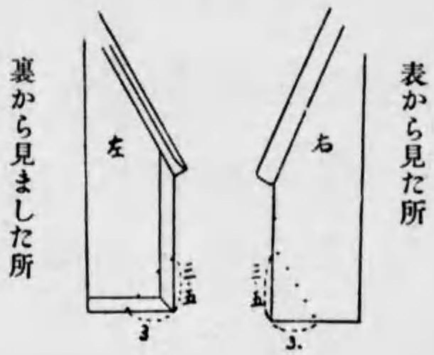
(一)圖　袖口布



(二)圖　衽



(三)圖　褄先に綴ぢを入れた所



○縫ひ方

上着の袖と袖口布を取り、袖口明標と標とを合せ、袖口布を少し引きつらせて、口明標から標まで縫ひ、袖の方に折り返し、袖口布の丈の止りの所は、二つ折にし、針目を三分か四分位にして縫つておき、次に口明の所は四枚共に糸止めをし、その糸は切らずに袖口布丈のある所まで返し縫ひにし其所で糸止めをしましたら糸を切り、袖口布の奥の方は裁ち目のまゝで、袖口布の表に二針、袖の表に一針出し針目四五分にして綴ぢます。

次に下着の袖と袖口布を出して上着の様に口明を合せ又袖口布丈のある所まで縫ひ、其所で縫ひ代だけの幅に、袖布の方に切り込みを眞直に入れておき、次に袖口布の奥の方に折り、針目を三四分位にして紉けましたら、上着の袖の裏と、下着の袖の表とを重ねて、袖口布の止りの所で四枚共に糸止めをし、その糸で袂の角まで縫つて糸を切り、布を平に下において袖幅標を四枚共に附け、其所に折りを附けて袷の様に八つ口を縫ふのです。この時、表は袖幅の標の通りに、裏は袖幅を五厘縫ひ込んで縫ひ、下着の袖の方に折り返し、八つ口の所を、四枚共に糸止めをして袖下を四つ縫ひにし、袖形を拵へましたら引き返して表を出し、縫ひ目を正しくして、八つ口に躾をかけ、其外は四枚共に躾をかけておくのです。

（但し、八つ口は、衿の様に縫はずに、上着と下着の間に、袖幅の縫ひ込みを折り、白の絹糸を二本にして、上着の表に二針、下着の表に一針づゝ出し、針目を一寸位にして綴ぢる事もあります）

次は上着の襟を出し、衿肩を右に持つて背を縫ひまして自分の方に折り返し、後幅と肩幅の標をして左右の脇を縫ひ、脇の縫ひ込みが多い時は、後の縫ひ込みを開いて、次に裾口を幅二分五厘づゝ三つ折にして針目を三分か四分位に裾を絎けます。

次に下着の襟を出し、裾口を幅二分五厘づゝ三つ折にして、裏の方に折り返し、針目を三分か四分位にして前後とも裾口を絎け、それから衿肩を右に持ち、表の方に縫ひ目の出る様にして背縫ひをし、向ふに折り返して次に後幅と肩幅の標を附けてから左右の脇を縫ひ前の方に折り返して、後襟の縫ひ込みを開き、それから上着の裏と下着の裏とを合せて、裏表の間で背縫ひを綴ぢましたら下着の脇の縫ひ込みを、裾の所は裏と裏との間に斜に折り込み、其の先を絎けておいて、上下の脇縫ひを裏の間で綴ぢ、それから身八つ口を衿の様に縫ひ、次に袖を附けるのであります。袖の附け方と衿と同じにします。

次に前幅を揃へ、衽み附ける所を、上下共に躾で裾から衿肩まで綴ぢ、前幅と、抱幅と、其の中程とに幅標をして其所に折り附けまして、次に衽を出し、褄先を額縁にして、上着も下着も裾口から五寸上の所まで衿下を絎け、裾口も絎けましたら、上着と下着の衽で襟を挟んで四つ縫ひにし、縫ひ目を表の方に返して折を附けましたら表を出し、縫ひ目を正しくして、褄下を裾口の五寸上の所から衿下標の一寸上の所まで、上下二枚共に針目を三分か四分位にして絎けます。

（但し、上も下も衿下は三つ折にいたします）

次に衽の衿を附る所を、衽幅二枚揃へて躾で綴ぢておき、そして衿附をするのであります。衿の附け方は、上着の裏表の衿を合せて、衿先を上前も下前も縫ひまして裏の方に折り返して、上着の襟の表と、上着の表衿を合せ、上着の裏衿の上に下着の表衿を重ね、下着の表襟の上に下着の裏衿をおいて、上下の衿で襟を挟んで背縫ひから左右へ附け下げ、下着の衿先は一分中を縫ひ、裏衿の方に折り返して、初め衿を縫ひ附けました糸の所に縫ひ附けて、三つ衿には別布の芯を入れ、普通の衿を絎ける通りにします、次に衽の褄先の所は、褄先から衽の縫ひ目の方へ幅三寸の所へ標を附けてそれから、褄先から衿下の方へ丈三寸五分とし、其間を斜に標をして、白絹糸を二本にし、表に小さく二針づゝ出し、裏に一針、表の間に大針を出して、表に二針づゝ五針出し、裏には一針づゝ五針出して綴ぢましたら双方の縫ひ目を正しくして火熨斗をかけるのであります。第三圖は褄先に綴ぢを入れました所です。

○本裁長襦袢

○仕立上げ寸法

袖丈に上の着物より三分短く、袖附は上の着物より一分短く。袖口は廣袖であります。袖幅は上の着物より一分せまく。身丈は三尺三四寸でありますが、これは着る人に依つて違ひます。後幅は八寸。前幅は六寸五分か七寸。衿肩は上の着物より一分少く。衿幅は裾口で二寸。三つ衿の所三寸程の間は一寸五分。袵は一分内外。前下りは八分。袖は六寸五分であります。

○裁ち方と積り方

並幅で長さ二丈四尺の布で女長襦袢の裁ち方

袖一尺六寸の裁ち切りとして。前下りは八分。

裁ち方の圖

裁ち方の說明

先づ袖丈の四倍を取つて、左右の袖とし、次に並幅で衿丈だけを取つて、その幅を二つに切つて山で接いで衿といたします。あとの布を中表にして丈を二つに折り、前襟にする方を前下りだけ長くして、丈を二つに折り、衿肩を明けて襟といたします。

積り方

{總尺－(4袖丈＋3前下り＋衿肩廻＋衿先縫代)}÷5＝後丈

後丈＋前下り＝前丈　前丈＋衿廻＋衿先縫代＝衿丈

裏の裁ち方

袖は表と同じに裏は袵の二倍だけ長く、褄廻し布は並幅で一尺五寸五分取り、幅を二つに裁つて横布にして用ひるのである。

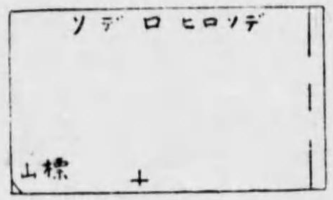
積り方

袖丈　袖巾布　そう布　袖巾　袖下の三倍　衿廻と衿先のひ代
16. ×4＝64.　240.－(64.＋2.4＋3.5)＝170

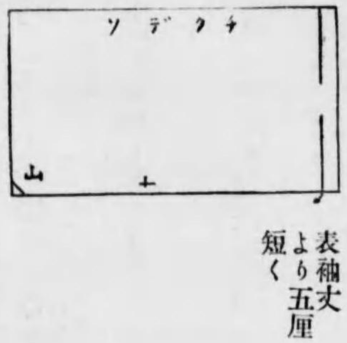
後身丈　前下り　前身丈　衿肩ト衿先縫代　衿丈
170.÷5＝34.　34.＋8＝34.8　34.8＋3.5＝38.3

○標の附け方

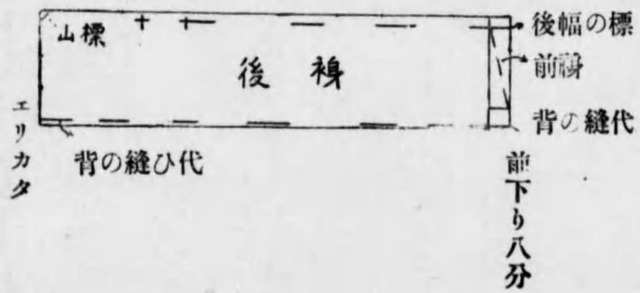
（イ）表　袖



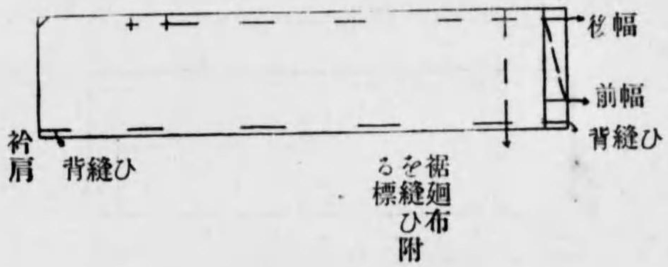
（ロ）裏　袖



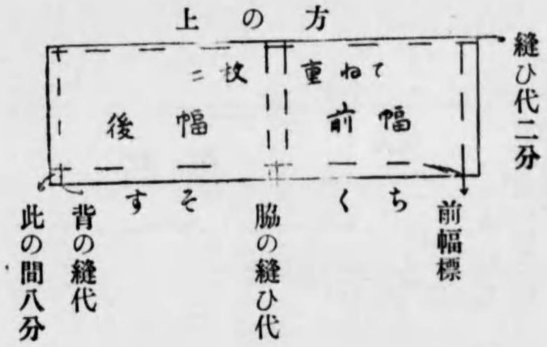
（ハ）表　裾



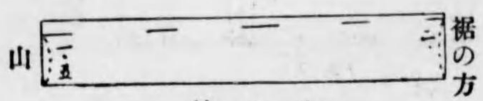
（ニ）裏　裾



（ホ）裾　廻　し



（ヘ）衿

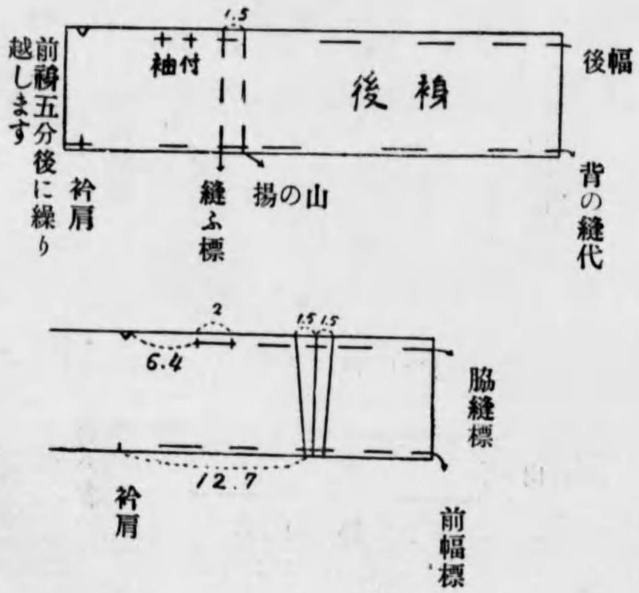


輪の方

（ト）内　揚

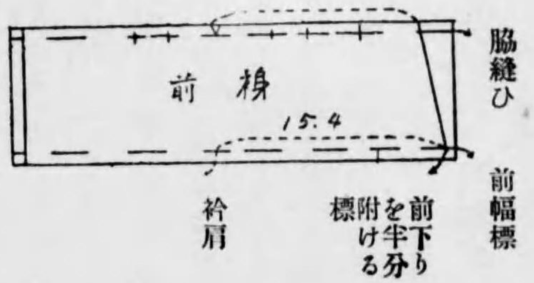
（一）

（二）

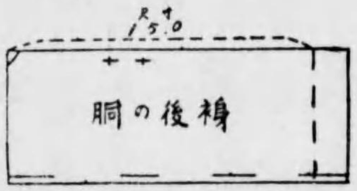


表褙を胴接ぎにし、胴と裾廻し布とを別布で仕立ます時の標の附け方。

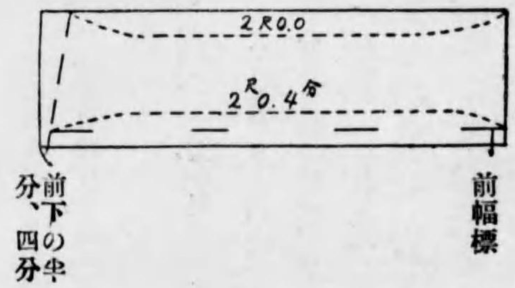
（イ）胴接ぎのあります時は胴接ぎで前下りを附ます



（ロ）



（ハ）裾　廻



○縫ひ方の順序

先づ裏表の袖を出して袖口を縫ひ合せ、裏袖の方に折り返して躾をかけます。次に、表袖幅の廣い時は、表袖を返されるだけ裏に折り返して下におき、袖幅標をいたしましたら幅標を合せて八つ口を縫ひ（裏は幅も丈も五厘つめて）裏袖の方に折り返し、次に袖下八つ口の所を四枚糸止めなし、その糸で袖下を縫ひまして引き返し、八つ口と袖下に躾をかけます。

今度は表裾を出し　衿肩を右に持つて背を縫ひまして手前に折り返し、後幅と肩幅の標をつけて脇を縫ひ、前裾の方に折り返します。次に裏裾を出して背と脇を縫ひましたら裾廻布を出して是も背と脇を縫ひ　裏裾の裾口から上の標の所に、裾廻布の上縫代二分の標を合せて縫ひ附け、裾の方に折り返して躾をかけます。それから裏表の裾を出して裾口を縫ひ合せ、表裾の方に折り返して躾を掛け　袵を綴ぢます。この時地質に依つては綿を少々入れます。綴ぢ方は、前裾は表に七針、裏に三針、脇縫ひの所は、裏表一出し　後裾は裏に四針、表に九針出し、背縫ひの所は裏表に出します

それから背を綴ぢ、脇の縫ひ込を裏表別々に、後裾の縫ひ込みだけ、肩幅標から斜に、後の方に縫ひ込みの引きつらないだけ折り返してクセを附け、待針を刺し、次に裏表の縫ひ巨を合せて脇綴ぢをし、それから身八つ口の止りの所で、淺く糸留めをし、その糸で前と後の身八つ口を縫ひ、裏布

の方に折り返し、次に袖を附けますには、袖山と裾の山を合せて待針を刺し、袷や綿入の樣に附けます。次に前裾の衿の附く所を、裏表の丈と幅をよく引き合せて躾をかけ、それから前幅標をし、其所に折を附け、衿布の山で接ぎ合せ、その縫ひ目は割り、次に衿に芯を少し緩く綴ぢ附けて、二枚共に縫ひ附け、衿の方に折り返し、三つ衿に芯を入れ、衿先は一分先を縫つて裏に折り返し、そして衿を絎けるのであります。

衿衿の折へ方やかけ方は、半襦袢と同じであります。

襦袢の身丈が長いために、内揚をいたします時は、揚の所で前下りみ附けた方がよろしいのです

幅一尺三寸の布で女長襦袢の裁ち方

袖丈一尺五寸。身丈三尺五寸。の裁ち切りとして。

尙衿丈の足りない時は、三つ衿に別布を足すのです。

裁ち方の圖

積り方

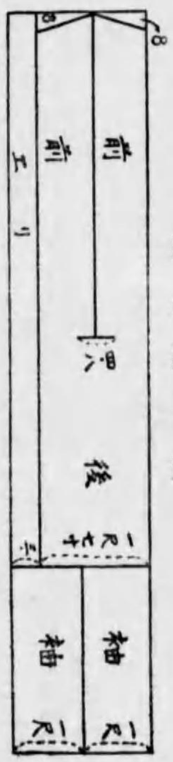
袖丈　袖用布　みごろ用布
15. ×4＝60.　35. ×3＝105.　60. ＋105. ＝165.

前下り　用布
165. ＋8. ＝165. 8

幅、二尺の布で女長襦袢の裁ち方

袖丈一尺五寸、身丈三尺五寸の裁ち切りとして。

裁ち方の圖



裁ち方

袖丈　身丈
15. ＋35. ＝50.　50. ×2＝100.　100. ＋8. ＝1008.

前下り用布

衿丈の不足の時は、三つ衿に別に布を足すのであります。

○本裁被布合羽

○仕立上げ寸法

袖丈は、下に着る着物より三分長く、袖口は下に着る物と同じ。袖附は、一方多く。袖幅は一杯。身八つ口は二寸五分から三寸。身丈は、着る人に依つて違ひます。衿肩は一分大きく。衿は一分長く。後幅は、脇縫ひの止りで七寸五分。裾で一杯。肩幅は衿ノ袖幅に依つて定めます。前幅は脇の縫ひ代を後と同じに取つておいて、裾口で六寸五分、脇縫ひの止りで五寸五分。竪衿下りは衽ドリと同じ六寸。竪衿幅は、衽幅と同じで、裾口で四寸、上で三寸五分。小衿丈は、竪衿下りの二倍で一尺二寸。小衿幅は小衿丈の三分の一。小衿左右の角の丸味は小衿丈の五分の一より四分多くします。只し小衿には別布を芯に入れます。

又内揚をいたします時は、普通後は肩山から一尺三寸下つた所、前は一尺四寸下つた所にいたします。

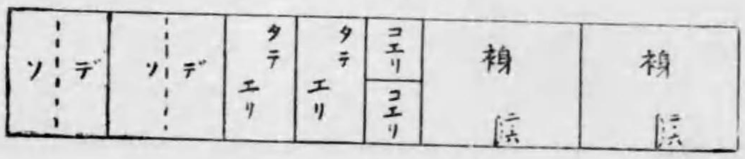
附）前丈を後より五分短く仕立てますと、着ました時に工合よく出來ます。

並幅の、長さ二丈八尺の布で女單被布合羽の仕立方

肩當布は、別の布で長さ三尺要し、衿肩を明けます時に、普通の單衣の樣に後を一寸長くいたします。

○裁ち方

裁ち方の圖



積り方

袖丈上　メセシロ　裁ち切り寸法
16.3＋5.　＝　16.8　　16.8×4.＝67.2　　總尺 280.　－67.2＝212.8

小エリ
212.8－13.＝199.8　　199.8＋11＝210.8　　タテエリ下りの二倍　210.8÷6＝35.1　身丈 分

タテエリ下り　タテエリ丈
35.1－5.5　＝　29.6

○裁ち切り寸法

袖丈、一尺六寸八分。身丈、三尺五寸一分余。衿肩、二寸六分。竪衿丈、一尺九寸六分。小衿丈、一尺三寸。袖口布は別布で、毛繻子などを使ひますが、用布の長い時は、同じ布を附ける事もあります。又は、小衿丈を挾くして、丈一尺五寸を取り、小衿の端から袖口布を取る事もあります。

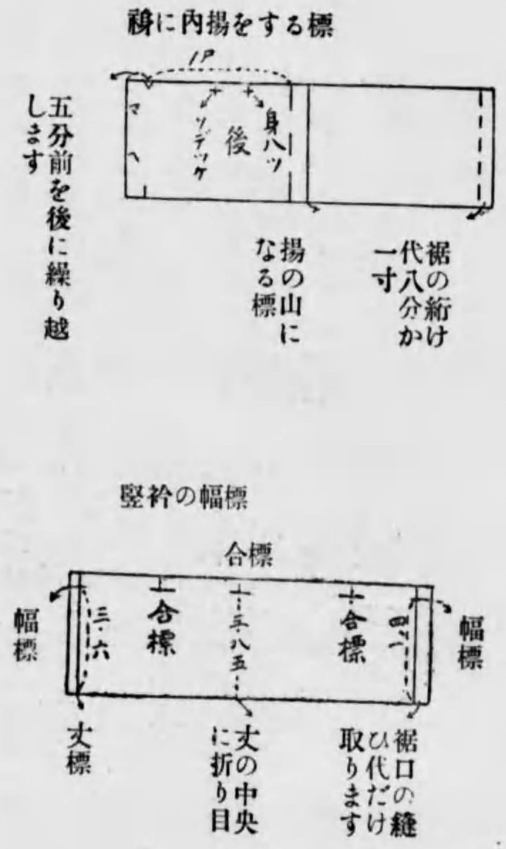
○標の附け方

袖は左右の袖を、中表にして二枚重ね、丈を二つに折つて、袖附の方に山標を附け、次に丈と口明と袖附の標を附けましたら袖口布を丈二つに折り、奥の方に山標をし、そして口明と縫ひ代の標を附けます。

今度は身頃を出して布を中表に二枚揃へ、衿肩から丈を二つに折り、裾口を右に、背を手前に、後身を上にして裁ち板の上にのせ、身丈を裁ち揃へ、（裾かけ八分か一寸をのぞき、長い時は男子の着物の樣に内揚をいたします）次に袖附と山標と身八つ口の標と、後幅は一杯の標と肩幅の標を附け、次に後身を開いて前身頃に竪衿下りと前幅の標を附けるのであります。

次に竪衿布を中表に二枚重ねて幅を二つに折り、折り目は手前に、裾を右にして下におき、丈と上下の幅は標をつけましたら丈の中央で、裾口幅と上の幅との差の半分だけ挾く標をし、次に丈に四五寸位づゝ間をおいて合標をいたします。次に小衿を中表にして幅を二つに折り、それを丈二つに折つて丈と幅の標をつけましてから角の所に丸味の標を附けます。

ビロードの樣な地の厚いものを小衿に用ひます時は、幅は挾く、一寸四五分から一寸八分位にして折らずに附けるのが普通であります。それで厚い紙を芯に入れます。



○縫ひ方の順序

袖口布を附けます時は袖と袖口布の表と表を合せて袖を手前に袖口布を向ふに持ち、袖を少し緩く袖口布を引きつらせて、口明標まで縫ひ、袖の方に折り返して、次に袖下を普通の單衣の様に袋縫

ひにしますから、布の表から一度縫つておき、次に袖口布の兩端を縫ひ代だけ布の裏に折り、針目を三分位にして、表に一針小針に出して縫つておいて次に口明止りを袷の様に四つ止めにし、其の糸で袖口布丈のある所まで、四枚共に返し縫ひにし、それから下は、普通の縫ひ方に袖下まで縫ひ袖口布の奥を折つて袖に紉け附け、それから袖形に襞を取り、次に袖幅標をして振り八つを耳紉けします。次に肩當布を出して前後の裾口を普通に縫ひましたら背を普通仕立の單衣の様に肩當を共に二度縫ひ、内揚のあるのなら前後共男物の様に縫ひ、次に襟の前後左右四枚共に身幅の標をしまして次に前襟を、幅標より竪衿み附ける時の縫ひ代だけ、二分廣くし、其處から裏に折り、前肩當の丈の終りまでは、布の間で袷の様に、襟と肩當布とを縫ひ合せておき、襟の折り込みの端を耳紉けし、次に裾を三つ折にして躾をかけ、竪衿の表と裏とで前襟をはさみ、竪衿の合標を合せて裾口から竪衿下りまで縫ひ、次に衿先を縫ひ、裏に返して縫ひ込みを綴ぢ附けましたら引き返して上を小針に紉けますが、上の縫ひ代は表衿にくるんで裏に返します。

それから兩脇を縫ひ、普通單衣の様に後の縫ひ込みにクセを取つて前身の縫ひ込みだけに綴ぢ附け脇の縫ひ込みと身八つ口の前後を耳紉けにしましたら裾かけをし、衿肩廻を綴ぢて小衿の表に芯を入れて被布の様に是を縫ふのであります。

そして小衿の縫ひ方は、小衿の表にする方を幅一分廣くなる樣に幅の山を繰り越し、其の方、つまり幅を廣くした方へ芯の布を當てゝ、初めに附けた形通りに縫ひ、左右の角は、芯の縫ひ込みは切り捨て、表布だけを縫ひ込んでおいて、袂の布の樣に襞を取り、引き返して表を出すのであります次に襟の裏と小衿の表とを合せて縫ひ附けましたら表で紮けるのであります。それから左右の袖を附け、次に左脇の裏と、右竪衿の表に肩から二尺位下つた所に、長さ七八寸の細い紐を附けそして飾紐を附けるのであります。飾紐が梅結びの時は、上前の竪衿先に玉の附いた結びを附け、下前襟の小衿と竪衿との間に輪の附いてゐる結びを附け、上前竪衿の縫ひ目から、衿幅の山に寄つた所に玉の附いた結びを附け、上前襟の表にも下前襟と同じ所に輪の附いた結びを附け、そして上前竪衿丈の中央には、梅結びの先に打紐を輪にして、丈八寸から一尺位のものを附け、下前襟幅の中央で上前竪衿と同じ所に附け、次に下前竪衿の上の端と、上前竪衿下の止りの所にホックか又は細い紐を附けるのであります。

飾り打紐には、梅結び、厳、三つ輪などありますが、それは好みに依つて用ひます。梅結びは。長さが凡そ一丈二尺で、其他のものは五尺要します。

○比翼

比翼仕立には本比翼と附比翼とありまして、本比翼は、上着と下着との一部分の布を裏襟に三枚共に縫ひ附けてあつて取外しの出來ないのです。又附比翼は上着一枚を普通に仕立てゝおいて下着廻りつまり袖口、八つ口布、裾廻し、衽、衿等を別に仕立て、上着に紮け附けて取り外しの出來る樣に位立てたものであります。

上着を比翼にします事と、上着一枚は普通に仕立てゝ下着を比翼にする事がありますす。

○裁ち方と積り方

並幅の布で本比翼の裁ち方

袖丈を一尺七寸、身丈四尺、表裾廻し長さ一尺五寸、表竪褄布丈二尺五寸、出袖五分として。

（衽は棒裁ちで無垢の裁ち方）

積り方

袖丈 17. ×4＝68.　身丈 40. ×6＝240.　衽下裁切 5. 5×2＝11.　みごろ用布 240. －11. ＝229.

上着一枚の用布 229. ＋68. ＝297.　15. ×4＝60

裏裾布の長さの定め方　15. ＋1. ＝16.　16. ×8＝128.　下着と下着裏廻布の用布

裏衽丈の定め方　下着裏衽丈 25. ＋1. ＝26.　26. ×2＝52.　上着と下着の裏廻布の用布